

唐
津
城
跡
(10)

唐津市文化財調査報告書 第181集

唐津城跡(10)

— 唐津保健福祉事務所建替えに伴う発掘調査 —

唐津市文化財調査報告書
第181集

2019.3

2019.3

唐津市教育委員会

唐津市教育委員会

唐津市文化財調査報告書 第181集

唐津城跡(10)



1. 唐津城遠景



2. 調査地遠景（調査後）

卷頭図版 1



1. 調査区全景（調査前）



2. 調査区全景（調査中）

巻頭図版 2



1. 丁銀表面



2. 丁銀裏面

卷頭圖版 3



1. 丁銀表面



2. 丁銀裏面



3. 拡大写真①



4. 拡大写真②



5. 拡大写真③



1. 燒塗壺集合



1. 烧盐壺身集合



2. 烧盐壺蓋集合

卷頭圖版 6

序 文

佐賀県の西北部に位置する唐津市は、玄界灘を挟み朝鮮半島に面しているという立地条件から、古くから大陸との交流が盛んに行われ、大陸文化の受容口として、非常に重要な役割を担ってきました。このことは、唐津市に所在する遺跡、あるいはそこから出土した遺物から窺い知ることができます。

しかし、その一方で、現在開発行為等によって多くの遺跡が消滅の危機に瀕していることもまた事実です。唐津市教育委員会においても、以上のような状況から、やむをえず保存できない文化財については事前の発掘調査をおこない、できるだけ正確な記録保存に努めると同時に、遺跡の保存・活用のための措置にも力を注いでいるところです。

本書は、唐津保健福祉事務所の建替え工事に伴い、平成28年2月から6月にかけて実施した、唐津城三ノ丸の本調査の調査記録です。本書が、地域住民の皆様はもとより、市民各位の埋蔵文化財保護に対するご理解、さらには学術研究の分野においてもご活用いただければ幸いなことと存じます。

最後になりましたが、発掘調査から出土遺物の整理に至るまで、唐津保健福祉事務所の方々をはじめとする多くの人々のご理解とご協力に対しまして、心から感謝の意を表するものであります。

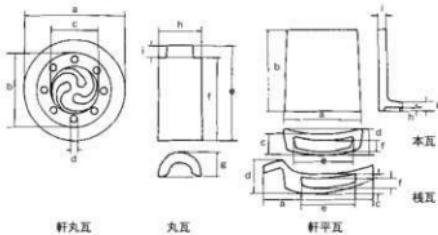
平成31年3月29日
唐津市教育委員会 教育長 栗原 宣康

例　　言

- 1 本書は、唐津市教育委員会が唐津保健福祉事務所建替え工事に伴い、平成28年2月から6月にかけて実施した唐津城跡三の丸の調査報告書である。
- 2 調査は佐賀県文化財課の指導を受け、唐津市教育委員会がこれにあたった。
- 3 調査及び本報告書作成にあたっては、佐賀県教育委員会にご協力を賜った。
- 4 現地での発掘調査は船川和樹、美浦雄二が担当し、遺構等の実測（写真測量）は（株）とっぴんに委託して実施した。
- 5 現地での調査写真的撮影は船川、美浦が行い、空中写真的撮影は（株）とっぴんに委託して実施した。
- 6 遺物の実測、製図は井上美代子、萩森育子、宮崎良子、山中比抄恵、芳野万喜子、美浦、永井久美男氏（兵庫埋蔵金調査会）が行った。
- 7 執筆は築城昇平（第IV章第1節(3)）、美浦が、編集は美浦が担当した。
- 8 遺物の写真撮影は築城、美浦が行い、巻頭図版の遺物の撮影は牛飼茂氏にお願いした。またFig.78に掲載したX線写真是長崎県埋蔵文化財センターより協力を賜った。
- 9 銭貨の調査及び分析においては、長崎県埋蔵文化財センター、片多雅樹氏（長崎県教育委員会）、（公）黒川古文化研究所、永井久美男氏、加藤裕一氏（佐賀県教育委員会）より指導・助言を賜った。また陶器及び石製品の調査においては、九州陶磁文化館、徳永貞紹氏（九州陶磁文化館）、藤木聰氏（宮崎県教育委員会）より指導・助言を賜った。

凡　　例

- 1 遺跡の名称は「唐津城跡」、略号は「KJR-DMK」である。
- 2 Fig.3は唐津市発行の5万分の1図「唐津市全図」を使用した。
- 3 指標における方位は座標北を表す。
- 4 遺構名は性格不明遺構「SX」、土坑「SK」、溝「SD」、小穴「P」とした。
- 5 遺構の高さは標高で表し、遺構の法量はm、遺物の法量はcm単位である。
- 6 出土遺物及び図面等の資料は唐津市教育委員会が保管する。
- 7 瓦の計測位置は下記のとおりである。



目 次

第Ⅰ章 調査の経過	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査の組織	1
第3節 調査の経過	1
第4節 調査日誌	2
第Ⅱ章 環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	5
第3節 近世以降の唐津地域の歴史的展開	6
第Ⅲ章 遺構	15
第1節 調査の概要	15
第2節 層序について	15
第3節 上面・上層調査について	16
第4節 下面・下層調査について	18
第Ⅳ章 遺物	55
第1節 陶磁器・土器	55
第2節 石製品・金属製品・瓦等	58
第3節 丁銀	58
第Ⅴ章 まとめ	89
第1節 遺構について	89
第2節 遺物について	89
第3節 丁銀について	90

表 目 次

Tab.1 調査の経過表	2	Tab.6 遺物観察表(2)	85
Tab.2 調査地点の土地利用の変遷概要	10	Tab.7 遺物観察表(3)	86
Tab.3 唐津地域の近世～現在年表	11	Tab.8 遺物観察表(4)	87
Tab.4 遺構一覧表	83	Tab.9 遺物観察表(5)	88
Tab.5 遺物観察表(1)	84		

挿 図 目 次

Fig.1 保健福祉事務所工事図と調査区位置図	Fig.30 SX01 3D画像①
Fig.2 調査区位置図	Fig.31 SX01 3D画像②
Fig.3 唐津市内の主な遺跡位置図	Fig.32 T-2・3平面図（上層）(1/60)
Fig.4 唐津城跡調査実施位置図	Fig.33 T-2北壁土層図(1/60)
Fig.5 調査区平面図（上面）(1/300)	Fig.34 T-4南壁土層図(1/60)
Fig.6 調査区平面オルソ図(1/300)	Fig.35 T-4平面図（上面）(1/60)
Fig.7 S区上層模式図	Fig.36 T-7平面図（上層）(1/60)
Fig.8 S-2西壁土層(1/40)	Fig.37 T-5平面図（上層）(1/60)
Fig.9 S-2中央ベルト土層(1/40)	Fig.38 T-6平面図（上層）(1/60)
Fig.10 S-1平面図（上面）(1/40)	Fig.39 H-1平面図（上面）(1/60)
Fig.11 S-1北壁土層図(1/40)	Fig.40 H-1東壁土層図(1/60)
Fig.12 SX11平面図(1/30)	Fig.41 SK17・SD14平面図(1/40)
Fig.13 S-1東壁土層図(1/30)	Fig.42 SK17・SD14平面オルソ図(1/40)
Fig.14 S-2平面図（上面）(1/40)	Fig.43 H-2平面図（上面）(1/60)
Fig.15 S-2北壁土層図(1/40)	Fig.44 H-2東壁土層図(1/60)
Fig.16 S-2東壁土層図(1/40)	Fig.45 調査区平面図（下層）(1/300)
Fig.17 S-3平面図（上面）(1/40)	Fig.46 調査区平面オルソ図（下層）(1/300)
Fig.18 SX02オルソ図(1/40)	Fig.47 S-2平面図（下面）(1/60)
Fig.19 S-4平面図（上面）①(1/40)	Fig.48 S-3・4平面図（下層）(1/60)
Fig.20 S-4平面図（上面）②(1/40)	Fig.49 T-3平面図（下層）(1/60)
Fig.21 S-5平面図（上面）(1/40)	Fig.50 T-2平面図（下層）(1/60)
Fig.22 S-5北壁土層図(1/40)	Fig.51 T-4・5・6・7平面図（下層）(1/80)
Fig.23 S-6平面図（上面）(1/40)	Fig.52 H-1平面図（下面）(1/60)
Fig.24 S-6南壁土層図(1/40)	Fig.53 H-2平面図（下層）(1/60)
Fig.25 SX01平面図(1/30)	Fig.54 遺物実測図①（陶器）(1/3)
Fig.26 SX01平面オルソ図(1/30)	Fig.55 遺物実測図②（陶器）(1/3)
Fig.27 SX01北壁立面図(1/30)	Fig.56 遺物実測図③（陶器）(1/3)
Fig.28 SX01展開オルソ図(1/60)	Fig.57 遺物実測図④（陶器）(1/3)
Fig.29 SX01展開図(1/60)	Fig.58 遺物実測図⑤（陶器）(1/3)

- Fig.59 遺物実測図⑥（陶器）(1/3)
- Fig.60 遺物実測図⑦（陶器）(1/3、1/4)
- Fig.61 遺物実測図⑧（磁器）(1/3)
- Fig.62 遺物実測図⑨（磁器）(1/3)
- Fig.63 遺物実測図⑩（磁器）(1/3)
- Fig.64 遺物実測図⑪（磁器）(1/3)
- Fig.65 遺物実測図⑫（磁器）(1/3)
- Fig.66 遺物実測図⑬（土器）(1/3)
- Fig.67 遺物実測図⑭（土器）(1/3)
- Fig.68 遺物実測図⑮（土器）(1/3)
- Fig.69 遺物実測図⑯（瓦質土器）(1/3)
- Fig.70 遺物実測図⑰（瓦質土器）(1/3)
- Fig.71 遺物実測図⑱（須恵器・石製品他）(1/2、
1/3、1/4)
- Fig.72 遺物実測図⑲（石製品・銅錢・ガラス製品）
(1/2)
- Fig.73 遺物実測図⑳（瓦）(1/4)
- Fig.74 遺物実測図㉑（瓦）(1/4)
- Fig.75 遺物実測図㉒（瓦）(1/4)
- Fig.76 遺物実測図㉓（瓦・丁銀）(1/4、1/1)
- Fig.77 丁銀クリーニング前写真
- Fig.78 丁銀透過X線写真
- Fig.79 丁銀クリーニング後写真
- Fig.80 分析の様子
- Fig.81 丁銀成分比の簡易計測
- Fig.82 慶長丁銀と正徳享保丁銀の識別点
- Fig.83 唐津城跡出土丁銀の特徴

卷頭図版目次

- | | |
|--------------|----------|
| 卷頭図版 1 | 1 丁銀表面 |
| 1 唐津城遠景 | 2 丁銀裏面 |
| 2 調査地遠景 | 3 拡大写真① |
| 卷頭図版 2 | 4 拡大写真② |
| 1 調査区全景（調査前） | 5 拡大写真③ |
| 2 調査区全景（調査中） | 卷頭図版 5 |
| 卷頭図版 3 | 1 塩壺蓋集合 |
| 1 丁銀表面 | 卷頭図版 6 |
| 2 丁銀裏面 | 1 焼塩壺身集合 |
| 卷頭図版 4 | 2 焼塩壺蓋集合 |

図版目次

- | | |
|-------------------|---------------|
| P L - 1 | ② H-2全景（真上から） |
| ① 唐津城と松浦川以東の風景 | P L - 4 |
| ② 調査区全景（調査前） | ① 挖削作業状況① |
| P L - 2 | ② ドローン写真撮影状況 |
| ① 調査区全景（調査前、真上から） | ③ 挖削作業状況② |
| ② 調査区全景（調査中、真上から） | ④ SX01棒石① |
| P L - 3 | ⑤ SX01棒石② |
| ① H-1全景（真上から） | ⑥ 重機作業状況 |

⑦ 埋戻し作業状況

⑧ 調査区埋戻し終了状況

P L - 5

- ① S-1上面遺構検出状況（南から）
- ② SX11遺物出土状況（南から）
- ③ SX11全景（西から）
- ④ SX11北側石列
- ⑤ S-1北壁土層（南から）
- ⑥ S-1東壁土層（西から）
- ⑦ S-1中央ベルト土層（北から）
- ⑧ S-1中央ベルト土層（拡大、北から）

P L - 6

- ① S-2上面遺構検出状況（南から）
- ② S-2上面トレンチ掘削状況（南から）
- ③ P09検出状況（北から）
- ④ P09,P10根石検出状況（南から）
- ⑤ P10根石検出状況（東から）
- ⑥ P09根石検出状況（北から）
- ⑦ S-2北壁土層（南から）
- ⑧ S-2西壁土層（東から）

P L - 7

- ① S-2東壁土層（西から）
- ② S-2東壁土層（拡大、西から）
- ③ S-2中央ベルト土層（拡大、西から）
- ④ S-2中央ベルト、東壁土層（西から）
- ⑤ S-2下面遺構検出状況（南から）
- ⑥ S-2下面遺構完掘状況（南から）
- ⑦ S-2下面遺構完掘状況（拡大、南から）
- ⑧ SK-13上層（西から）

P L - 8

- ① S-3上面遺構検出状況（北から）
- ② SX02検出状況（東から）
- ③ SX02検出状況（北から）
- ④ SK07遺物出土状況（東から）
- ⑤ S-3上面遺構検出状況（南から）
- ⑥ S-3下層遺構検出状況（南から）
- ⑦ S-3下層遺構検出状況（拡大、南から）
- ⑧ S-3調査区水没（南から）

P L - 9

- ① S-3下層完掘状況（南から）
- ② S-4上面遺構検出状況（東から）
- ③ S-4上面遺構検出状況（拡大、北から）
- ④ S-4上面遺構掘削状況（南から）
- ⑤ SX05掘削状況①（東から）
- ⑥ SX05掘削状況②（北から）
- ⑦ S-4上面遺構完掘状況（東から）
- ⑧ S-4調査区水没（東から）

P L - 10

- ① S-4下層完掘状況（東から）
- ② S-5上面遺構検出状況（西から）
- ③ SD06土層（西から）
- ④ S-5北壁土層①（南から）
- ⑤ S-5北壁土層②（拡大、南から）
- ⑥ S-5下層完掘状況（東から）
- ⑦ S-6上面遺構検出状況（東から）
- ⑧ S-6遺物出土状況（東から）

P L - 11

- ① SX-01掘削状況①（上から）
- ② SX01掘削状況②（東から）
- ③ SX01掘方土層（東から）
- ④ SX01石積内面①（南から）
- ⑤ SX01北壁土層（南から）
- ⑥ SX01石積内面②（北から）
- ⑦ SX01石積外側（南から）

P L - 12

- ① SX01解体調査①（西から）
- ② SX01解体調査②（南から）
- ③ SX01解体調査③（西から）
- ④ SX01解体調査④（北から）
- ⑤ S-6西壁土層（東から）
- ⑥ S-6南壁土層（北から）
- ⑦ T-1掘削状況（北から）
- ⑧ T-2遺物出土状況①（南から）

P L - 13

- ① T-2遺物出土状況②（拡大、南から）
- ② T-2下層完掘状況（南から）

- ③ T-3上層完掘状況（東から）
 ④ T-3下層完掘状況（東から）
 ⑤ T-4上面検出状況①（北から）
 ⑥ T-4上層検出状況②（拡大、南から）
 ⑦ T-4下層完掘状況（北から）
 ⑧ T-5上層完掘状況（東から）
- P L-14
 ① T-5下層完掘状況（東から）
 ② T-6上層完掘状況（東から）
 ③ T-6下層完掘状況（東から）
 ④ T-7上層完掘状況（西から）
 ⑤ T-7下層完掘状況（西から）
 ⑥ H-1上面遺構検出状況（南から）
 ⑦ H-1上面遺構削除状況（西から）
 ⑧ SK17遺物出土状況（南から）
- P L-15
 ① H-1下面遺構検出状況（西から）
 ② H-1下面遺構完掘状況（西から）
 ③ SK19土層（西から）
 ④ SK19追加調査（西から）
 ⑤ H-2上面遺構検出状況①（北から）
 ⑥ H-2上面遺構検出状況②（北から）
 ⑦ H-2上面遺構完掘状況（北から）
 ⑧ H-2下面完掘状況（南から）
- P L-16
 ① 遺物（2~10）
 ② 遺物（20~23,25,26,29,30）
 ③ 遺物（77,78,96,97,100,101,111,129）
 ④ 遺物（210~216）
- P L-17
 ① 遺物（34~36）
 ② 遺物（50）
 ③ 遺物（55）
 ④ 遺物（56）
 ⑤ 遺物（57）
 ⑥ 遺物（68）
 ⑦ 遺物（79）
 ⑧ 遺物（95）
- P L-18
 ① 遺物（1,11,14,15,18,19）
 ② 遺物（12,13,16,17,27,28,32,33）
 ③ 遺物（37,40）
 ④ 遺物（42~45）
 ⑤ 遺物（46~49）
 ⑥ 遺物（58,59,66,67,73）
 ⑦ 遺物（60~65）
 ⑧ 遺物（69~71）
 ⑨ 遺物（74）
- P L-19
 ① 遺物（75,76,78）
 ② 遺物（98,104,105,113,114）
 ③ 遺物（179~181）
 ④ 遺物（182,188,189）
 ⑤ 遺物（183~185）
 ⑥ 遺物（186,187,190,191）
 ⑦ 遺物（192）
 ⑧ 遺物（247）
- P L-20
 ① 遺物（131~144）
 ② 遺物（146）
 ③ 遺物（147）
 ④ 遺物（150）
- P L-21
 ① 遺物（151）
 ② 遺物（152）
 ③ 遺物（153）
 ④ 遺物（154）
 ⑤ 遺物（156）
 ⑥ 遺物（157）
 ⑦ 遺物（158）
 ⑧ 遺物（159）
- P L-22
 ① 遺物（145,148,149,155）
 ② 遺物（160~162表）
 ③ 遺物（160~162裏）
 ④ 遺物（165~167表）

- ⑤ 遺物（165～167裏）
- ⑥ 遺物（168～170表）
- ⑦ 遺物（168～170裏）
- ⑧ 遺物（171～173表）

P L-23

- ① 遺物（171～173裏）
- ② 遺物（163,164表）
- ③ 遺物（163,164裏）
- ④ 遺物（174）
- ⑤ 遺物（175）
- ⑥ 遺物（176）
- ⑦ 遺物（177）

P L-24

- ① 遺物（207～209）
- ② 遺物（203～206）
- ③ 遺物（195～199,201）
- ④ 遺物（200表）
- ⑤ 遺物（200裏）
- ⑥ 遺物（178）
- ⑦ 遺物（193）
- ⑧ 遺物（194）

P L-25

- ① 遺物（210）
- ② 遺物（211,215,216）
- ③ 遺物（212～214）
- ④ 遺物（217,218）
- ⑤ 遺物（220）
- ⑥ 遺物（219,221,222）
- ⑦ 遺物（223,224）
- ⑧ 遺物（225）

P L-26

- ① 遺物（226,228,229）
- ② 遺物（227,230）
- ③ 遺物（231,232）
- ④ 遺物（233,234）
- ⑤ 遺物（200）
- ⑥ 遺物（178）
- ⑦ 遺物（193）
- ⑧ 遺物（194）

第Ⅰ章 調査の経過

第1節 調査に至る経過

唐津市教育委員会では、平成27年度に唐津保健福祉事務所より本庁舎の建替えについての問い合わせを受け、保健福祉事務所の場所が唐津城跡に含まれており、確認調査の必要があることを伝えた。数回に及ぶ協議を受け、平成27・28年度に仮設庁舎の建設及び本庁舎の建替えに伴う確認調査を実施した。その結果、建物の礎石と思われる石材や近世陶磁器が出土したため、唐津保健福祉事務所と遺跡の保存についての協議を行ったが、工法の変更もできないことから、平成28年度後半から平成29年度前半にかけて本調査を実施した。整理作業は平成30年度に実施した。

第2節 調査の組織

調査組織は次のとおりである。

調査団長 教育長	稻葉継雄（平成28・29年度）、栗原宣康（平成30年度）
事務局 教育部長	金嶽栄作（平成28・29年度）、保利守男（平成30年度）
生涯学習	
文化財課長	中尾修二
文化財調査係長	仁坂聰
文化財調査係	美浦雄二、坂井清春、立谷聰明、鮎川和樹、築城昇平、井本吏沙
発掘作業員	小副川初美、北島誠、古賀友里菜、小西まみ、近藤可奈、志氣勝、谷口陽一、高尾久見恵、戸田正一、野崎元則、東島強、藤原和幸、堀川尚美、松尾真里帆、宮口真由美、盛永和恵、山口直茂
文化財整理員	井上美代子、萩森育子、宮崎良子、山中比沙恵、芳野万喜子

第3節 調査の経過 (tab. 1)

発掘調査は仮設庁舎の建設後、本庁舎及び車庫棟の解体を待って実施した。確認調査の結果、地表下約1.0mが遺構面であることが分かっていたが、建物基礎の設置深度も大よそ同深度と考えていたため、建物の解体による遺構面の破壊を抑えるために、解体は建物上屋だけにとどめた。そのため車庫棟の遺構面は残存したが、建物基礎が残った状態で調査を行うこととなり、調査区が細切れとなる弊害も生まれた。

調査は車庫棟下（S区）、庁舎棟下（T区）、庁舎棟と二ノ門堀の間（H区）に大きく分けて、前述の順に行った。S-1グリッド（以下グリッドは省略）から表土剥ぎを開始したが、解体土を除去すると下層より現代～近世の陶磁器や金属片等が大量に見つかった。S区ではその他のグリッドからも多くの遺物が見つかっている。陶磁器が中心であり、そのほとんどが近世陶磁器であるが、調査を進めると、その出土層位が近代の造成土であることが分かった。造成土は土色や土質に違いがあることが理解できだが、小さなグリッド調査であったため、面的な広がりをつかむことに苦労した。T区は庁舎棟の建設により大きく破壊を受けていることが判明した。T-4からはそれ以前に建てられていた建物のコンクリート基礎が見つかったことから、大正2年に建てられた東松浦郡会議事堂（唐津公会堂）もしくは総合庁

舍以前に建てられていた建物の基礎と思われる。H区は最も広い調査面積を確保することができた。しかし、検出した土坑や溝などの遺構は近代のものであり、石垣際まで近代以降の開発により、近世の遺構は破壊されていることが分かった。

下層の調査は狭小なグリッド調査であったため、人力での掘り下げがほとんどできなかつたが、S-2で土坑を確認した。遺構からは時期を判別できる遺物は見つからなかつたが、それを覆う包含層からの出土品より唐津城築城以前にさかのばる可能性が高いことが分かった。

発掘調査は条件面が当初の予定よりも厳しかつたこともあり、困難な調査であったが、無事に予定期間内に終了することができた。

第4節 調査日誌

平成29年

- | | |
|-------|----------------------------|
| 2月6日 | 調査開始 |
| 2月15日 | 重機による表土剥ぎ開始 |
| 2月23日 | 石組み井戸（SX01）・アマカワ遺構（SX02）検出 |
| 3月13日 | SX02下層よりSX07確認、陶磁器の集中出土 |
| 3月24日 | 平成28年度調査の最終日 |
| 4月12日 | 調査再開 |
| 4月14日 | T区調査開始 |
| 4月17日 | 大雨により一部被害発生 |
| 4月24日 | SX01石組み解体開始 |
| 5月10日 | H区調査開始 |
| 5月19日 | SX19検出 |
| 5月31日 | 現地調査終了 |

	平成28年度											
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
確認調査												
準備										■	■	
S区調査											■	■

	平成29年度											
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
S区調査	■											
T区調査	■											
H区調査	■	■										
遺物整理		■	■									

	平成30年度											
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
遺物実測												
報告書作成							■	■	■			
報告書印刷										■	■	

Tab.1 調査の経過表

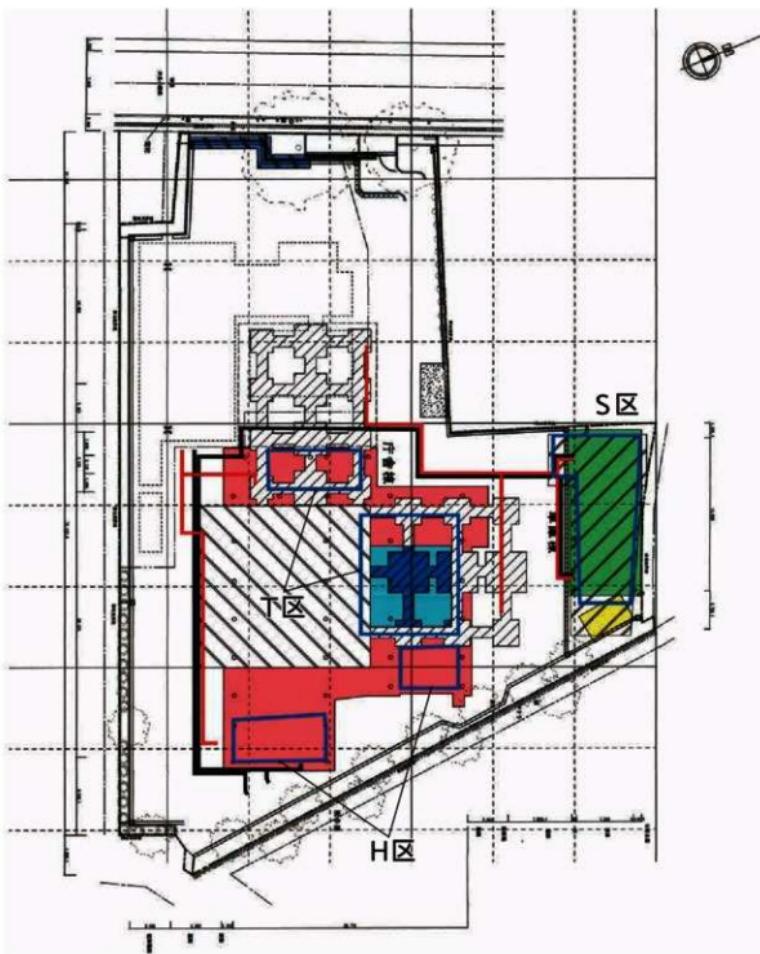


Fig.1 保健福祉事務所工事図と調査区位置図（縮尺任意）



Fig. 2 調査区位置図（縮尺任意）

第Ⅱ章 環境

第1節 地理的環境

唐津市は佐賀県の北西部、九州島の北端に位置し、現在の市役所本庁で北緯33度27分、東経129度58分である。平成17、18年に唐津市、浜玉町、巣木町、相知町、北波多村、肥前町、鎮西町、呼子町、七山村が合併し現在の唐津市となった。

唐津市およびその周辺の地形は①東松浦溶岩台地②松浦杵島丘陵③脊振山地西部④低地部（広義の唐津平野）⑤島嶼域（東松浦半島沿岸部も含む）の五つに区分できる。①東松浦溶岩台地（通称上場台地）は東松浦半島の大半を占め、第三系や花崗岩類の基盤の上に第三紀末期に噴出した東松浦玄武岩類が覆う溶岩台地である。②松浦杵島丘陵は南北に流下する佐志川及びその延長線を境にした東側の丘陵性山地であり、松浦川西岸まで続く。その地質は第三系や花崗岩類からなり、標高約200m内外である。③脊振山地西部は地形が急峻であり、地質は風化の進んだ花崗岩類からなる。唐津平野の基盤の大部分もこの花崗岩類であり、不整合面を介して沖積層が堆積する。④低地部は①～③に囲まれ、北は唐津湾および玄界灘に接する平野を総称している。

今回の調査地点は唐津城跡に含まれており、松浦川支流の町田川及び二ノ門堀に面した唐津城三ノ丸の東端にある。地盤は黄褐色細砂であるが、西から東側へ河川側に向かって地山面が深くなっている。敷地内の地盤調査でも、地表下2～4mまでが盛土となっている。基盤層である花崗岩層までは10mを超える。

第2節 歴史的環境 (Fig. 1)

唐津市域の遺跡の変遷について概観する。

旧石器時代の遺跡は中尾二ツ枝遺跡(1)や枝去木山中遺跡(2)など、上場台地に集中して見つかっている。遺跡の密集度は北部九州でも指折である。

縄文時代早期の遺跡も上場台地に多いものの、前期以降になると上場台地以外の地域でも遺跡の発見例が増加する。徳蔵谷遺跡(3)や五反田松本遺跡(4)は、唐津平野中東部の佐志川流域と玉島川流域の拠点的な遺跡である。晩期には再び上場台地で遺跡の発見例が増加する。

弥生時代以降は唐津平野に遺跡が集中する。特に宇木・半田川流域及び松浦川・徳須恵川流域に遺跡が集中している。代表的な遺跡として菜畑遺跡(5)や中原遺跡(6)、宇木汲田遺跡(7)が挙げられる。唐津市域の遺跡の特徴として、桜馬場遺跡(8)や宇木汲田遺跡などを代表に、青銅器や玉類を副葬した墳墓が非常に多く見つかっていることが挙げられる。

古墳時代も弥生時代と同様の遺跡の分布傾向が見られ、松浦川・徳須恵川流域に久里双水古墳(9)や双水柴山古墳群(10)や竹の下古墳群(11)などが築かれる。新たな動向として玉島川流域に谷口古墳(12)や横田下古墳(13)などが築造される。また島嶼部では後期になると、瓢塚古墳(14)など小型の古墳を中心的に築造が盛んになる。また近年、仁田埴輪窓跡(15)の調査も行われた。

これまで古代の遺跡は発見例が少なかったが、徳須恵川と松浦川流域の(千々賀)古墳遺跡(16)や中原遺跡では、墨書き器や木簡などが大量に見つかり、官衙関連遺跡であることが分かった。また市東部では古代以降、岩根遺跡(17)や鶴ノ尾遺跡(18)など鉄生産に関連する遺跡の発見例が増加している。

中世以降の遺跡も近年調査例が増えてきている。特に佐志川流域では、徳蔵谷遺跡や佐志中通遺跡

(19)で館の可能性がある建物や道路跡が見つかっている。この他大型の建物跡は北部の塩鶴遺跡(20)でも見つかっている。これまで中世山城は市南部を中心に数多く分布していることが知られていたが、調査例が少なく、詳細は不明なものがほとんどであった。しかし近年波多城跡(21)や星賀城塞群(22)で調査が行われ、城域の構造が理解されるようになった。また岸岳城跡(23)や獅子城跡(24)では中世山城が石垣造りの近世城郭に造り変えられていることが調査により明らかとなった。この他、当地域では古墳遺跡やせせり谷経塚(25)など、経塚の発見例が多いことも特徴の一つである。

近世における当地域最大の特徴は、市域の北部に名護屋城並びに陣屋(26)が築かれたことである。全国の大名が布陣し、周辺の丘陵や浦々のほとんどが関係する遺跡となっている状態である。また近世初頭に朝鮮半島より製陶技術が取り入れられ、岸岳古窯跡群(27)が造られており、以降窯業生産が盛んとなつたことも大きな特徴である。生産は市域の南部から伊万里市・武雄市域が中心であり、唐津焼として全国に流通していたことが知られている。今回本調査を行った唐津城跡(28)については後述する。近年玉島川流域では谷口石切丁場跡(29)が確認され、再築大坂城に石垣石材を供給したと推測されており、大きな注目を浴びている。また佐賀県文化財課による分布調査が精力的に行われ、唐津市域における中世山城及び文禄慶長の役に関連する陣跡は数量面積共に大きく増加している。

第3節 近世以降の唐津地域の歴史的展開 (Tab. 2)

前述のとおり近世の唐津地域は、近世初頭に名護屋城並びに陣跡が築かれていることが最大の特徴である。名護屋城並びに陣跡は、文禄慶長の役に際して朝鮮半島に侵攻するための前線基地として築かれた。全国から大名が集められたため、名護屋城周辺は一時期国内最大級の都市となっていた。文禄の役の開戦時、当地域の多くを支配していたのは中世以来の領主の波多氏であったが、役の最中に改易されたため、豊臣氏の直轄領を経て、その臣下であった寺澤忠志が領主となった。寺澤氏は文禄慶長の役では、主に物資搬送担当として活躍していたが、役後は徳川家康との関係を深め、強い信頼を得ていた。慶長五(1600)年の閬ヶ原の戦いでは東軍に属し、その功により肥後国の大草郡も領地として加増された。

寺澤氏は領主として積極的に領内の開発に務めている。河川改修や鏡及び和多田の新田開発を行い、防風林として虹の松原の植栽も行なったとされる。元和二(1616)年には領内の大規模な検地が行われており、公称12万3千石に対し実高は15万石余りであった。また城郭の整備も積極的に行っており、定説では慶長七(1602)年から十三年にかけて唐津城を築城したと言われている。しかし現在行われている唐津城跡本丸の石垣積み替えに伴う発掘調査では、現在確認できる石垣の下層からさらに遡る時期の石垣が確認されている。これに関して山田洋氏により、唐津城は天正十九(1591)年に名護屋城の後詰として築城され、寺澤氏の入部以降増築や改築が行われた可能性が指摘されており(山田、2007年)、調査内容と整合的である。

寛永二(1625)年寺澤忠高は次男の堅高に家督を譲り、寛永十(1633)年に71歳で他界している。同年には、豊後岡藩の中川氏が唐津城下を秘密裏に探索している。なお隠密による探索は、幕府により寛永四(1627)年にも行われている。

その後、寛永十四(1637)年に領有していた天草でキリストianを中心とした大規模な反乱が起きた。反乱軍は翌年幕府及び周辺大名による総攻撃で鎮圧されたが、乱後の始末として天草は没収され、石高は8万3千石となった。その後、正保四(1647)年に堅高は自殺したが、堅高には繼子がいなかったため寺澤氏は二代で改易される。

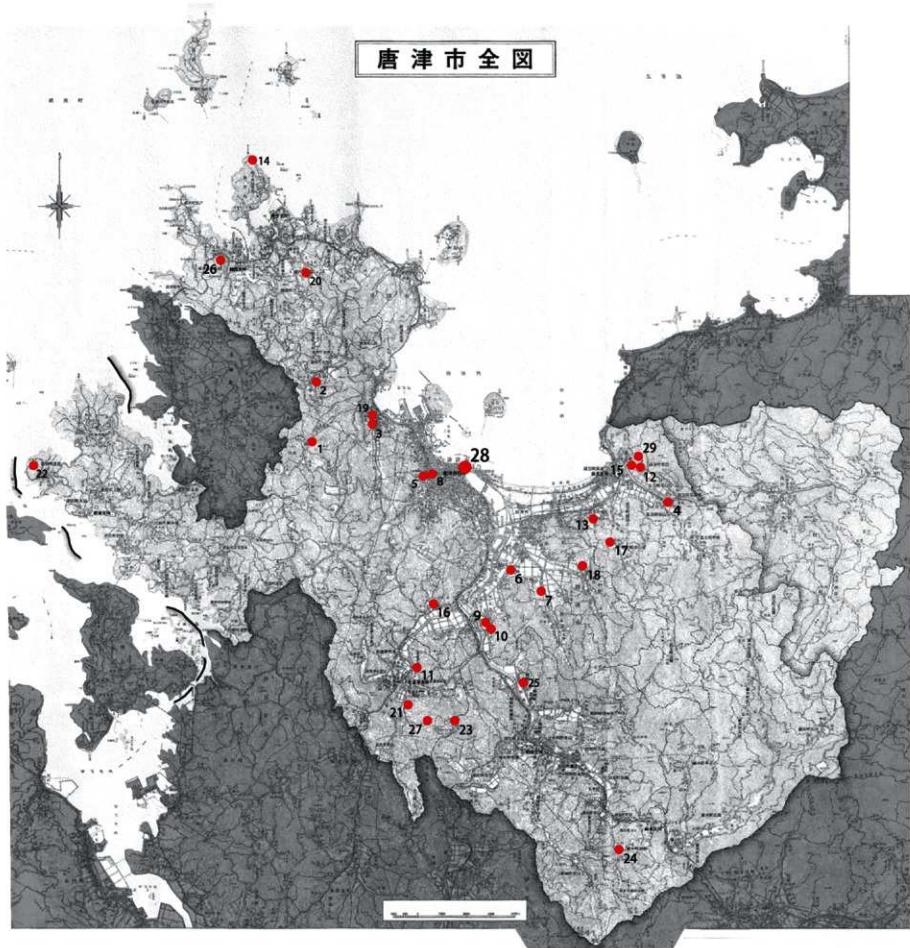


Fig. 3 唐津市内の主な遺跡位置図

- 1:中尾二ツ枝遺跡
- 2:枝去木山中遺跡
- 3:徳藏谷遺跡
- 4:五反田松本遺跡
- 5:菜畑遺跡
- 6:中原遺跡
- 7:宇木汲田遺跡
- 8:桜馬場遺跡
- 9:久里双水古墳
- 10:双水柴山古墳群
- 11:竹の下古墳群
- 12:谷口古墳
- 13:横田下古墳
- 14:瓢塚古墳
- 15:仁田埴輪窯跡
- 16:古園遺跡
- 17:岩根遺跡
- 18:鶴ノ尾遺跡
- 19:佐志中通遺跡
- 20:塩鶴遺跡
- 21:波多城跡
- 22:星賀城塞群跡
- 23:岸岳城跡
- 24:獅子城跡
- 25:せせり谷経塚
- 26:名護屋城跡並びに陣跡
- 27:岸岳古窯跡群
- 28:唐津城跡
- 29:谷口石切丁場跡

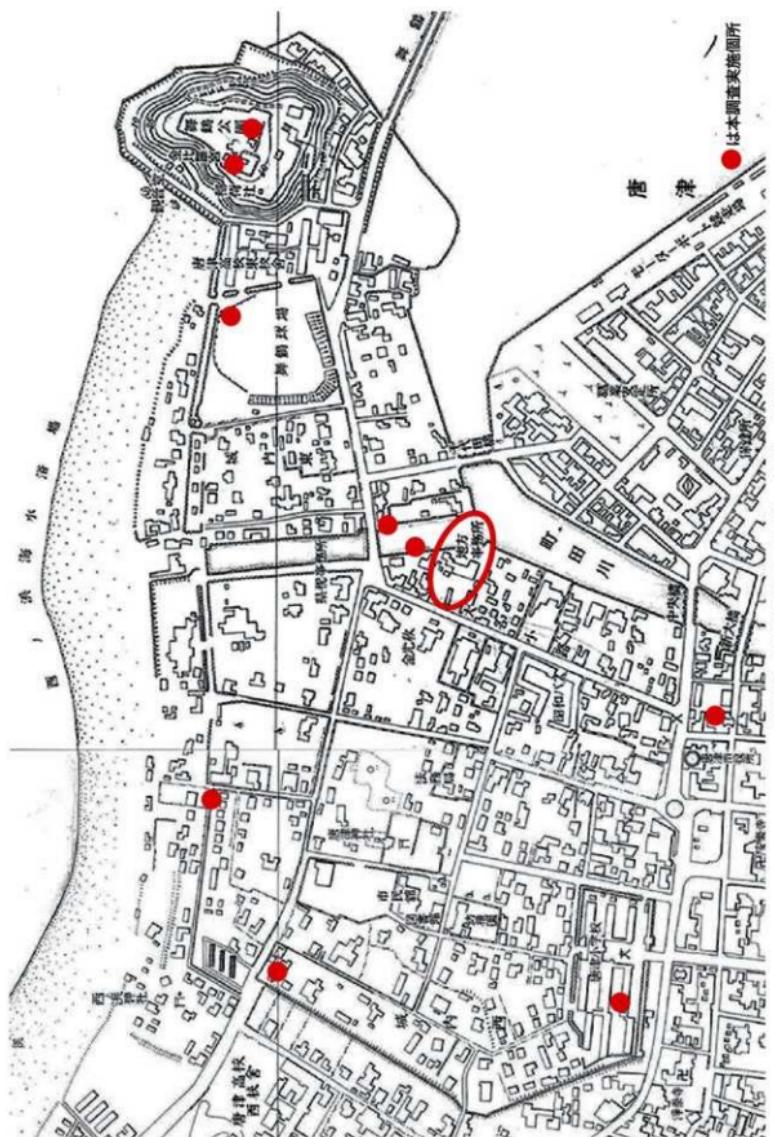


Fig. 4 唐津城跡本陣跡位置図（昭和30年前後の市街地図）

二年間の幕府直轄領を経て、慶安二（1649）年に大久保氏が播磨明石藩より入封する。以降、松平氏一・土井氏一・水野氏一小笠原氏と五代の譜代大名が治めることとなり、幕末を迎えた。大久保氏の治世には地方知行制を改め、蔵米知行制を採用し、転村庄屋制を定めるなど、後の唐津藩の大勢を決定づけることがいくつも行われており、また城内の大規模な改修も行っている。土井氏の治世では坊主町や唐人町に御用窯を開き、京焼風の洗練された唐津焼が作られるようになった。また藩校盈科堂を創設し奥東江を招き、教育に尽力した。その教えを受けた吉武法命やその子弟により、藩内に次々と民間塾が開かれたことにより、近世としては非常に広い層まで学問が広がった藩となった。水野氏の治世では唐津藩の中では最大の虹ノ松原一揆が起きている。水野氏は財政再建のため様々な施策を行っているが、その一つとして藩内の産業を『肥前国産物図考』としてまとめさせている。その他文化的な面として、曳山の製作が始まったのもこの時期である。小笠原氏の治世はさらに財政が悪化したため、捕鯨を藩営したり、様々な産物の専売制を強めたりした。長行は藩主長國の名代として藩政にあたり、藩政改革を断行し、また藩主ではないにもかかわらず異例の出世を果たし老中格として幕政の中枢を担った。

石炭は土井氏の治世には発見されていたが、幕末になると船舶の燃料として需要が急速に高まり、西日本の雄藩が石炭を得るために炭鉱を開いている。その後も石炭産業は唐津の中心を担う非常に重要な産業であった。明治になると、中小炭鉱主が石炭産業の主体であったが、明治後半になると三菱や三井等の大手が進出し、盛んに石炭の採掘を行っている。石炭産業は戦後も続いたが、昭和40年にはすべて閉山し、唐津地域の産業の中枢は失われることになった。

年代	所有及び地目	備考
~1647	寺澤氏家臣屋敷	片岡九郎左衛門邸
1647~1649	幕府直轄領	本陣
1649~1678	大久保氏家臣屋敷	杉浦平太夫邸
1678~1691	松平氏家臣屋敷	今井數馬邸
1691~1762	土井氏家臣屋敷	小杉長藏、小杉長兵衛邸
1762~1817	水野氏家臣屋敷	
1817~1871	小笠原氏家臣屋敷	
1871?~	個人所有地	
	東松浦郡・個人所有地	1881年の市街地図には施設名なし
1896~1902	個人所有地	1900年の地図には施設名なし
1902~1925	東松浦郡	1913年唐津公会堂（都會議事堂）建設 1917年の市街地図には都會議事堂
1925~1956	唐津町・唐津市	1931年の市街地図には公会堂 1955年の市街地図には地方事務所
1956~	佐賀県	1961年の都市計画図には佐賀県唐津総合庁舎

Tab.2 調査地点の土地利用の変遷概要

	元号	西暦	国内の主な出来事	唐津の主な出来事
安土桃山時代	天正4	1576	織田信長による安土城築城開始	
	天正10	1582	本能寺の変	
	天正11	1583	豊臣秀吉による大坂城築城開始	
	天正19	1591		豊臣秀吉による名護屋城築城開始
	"	"		唐津城築城説①
	文禄元	1592	文禄の役勃発	
	文禄3	1594		寺沢広高の唐津入部
	"	"		唐津城築城説②(慶長3年完成)
	文禄4	1595		唐津城築城説③(慶長7年完成)
	慶長2	1597	慶長の役勃発	唐津城築城説④(文禄年間)
	慶長3	1598	豊臣秀吉死去	※唐津城築城説あり
	慶長5	1600	関ヶ原の戦い	
	慶長6	1601		天草4万石加増。12万3千石となる
	慶長7	1602		唐津城築城説⑤(慶長13年完成)
江戸時代	慶長8	1603	徳川家康が江戸幕府を開く	富岡城(天草)完成
	慶長10	1605	徳川家康が秀忠に將軍職を譲る	
	慶長11	1606	江戸城の公儀普請開始(～1636)	
	慶長15	1610	名古屋城の公儀普請開始(～1614)	唐津からも石材が運ばれる
	慶長19	1614	大坂冬の陣	怡土郡(糸島)も領有
	慶長20	1615	大坂夏の陣により豊臣氏滅亡	
	"	"	一国一城令公布	獅子城、岸岳城をこのころ破却?
	"	"	武家諸法度(元和令)公布	
	元和2	1616	徳川家康死去	このころ和多田や鏡の新田開発大よそ完成
	"	"		村々浦々法之事を定める。本格的な検地を行なう
	元和6	1620	大坂城の公儀普請開始(～1629)	
	元和9	1623	徳川家光3代將軍就任	
	寛永2	1625		寺沢広高、堅高に家督を譲る
	寛永10	1633		寺沢広高死去。墓園の築造。中川氏唐津城下探索
	寛永12	1635	参勤交代の制度化(寛永令)	
	寛永14	1637	天草島原の亂勃発(～1638)	
	寛永15	1638		天草4万石減封
	寛永18	1641	鍋国の完成(オランダ人を出島へ)	
	正保4	1647	ボルトガル船が長崎に来航	
	正保4	1647		寺沢堅高自害。寺沢氏改易、公領となる
	慶安2	1649		大久保忠職が明石より入部
	寛文9	1669		唐津藩内で大洪水
	寛文10	1670		大久保忠朝が家督を相続
	延宝2	1674		転村庄屋制度が定まる
	延宝5	1677		大久保忠朝幕府老中となる
	延宝6	1678		国替。松平乗久が佐倉より入部

Tab.3 唐津地域の近世～現在年表 ①

元号	西暦	国内の主な出来事	唐津の主な出来事
延宝8	1680	徳川綱吉将軍となる	
貞享3	1686		松平乗春が家督を相続
元禄3	1690		松平乗邑が家督を相続
元禄4	1691		国替。土井利益が島羽より入部
元禄5	1692		この頃より庄屋の転村制が実施される
元禄7	1698		椎の峰に窯を開き、献上品を焼かせる
元禄9	1660		年貢の定免制が始まる
宝永4	1707	富士山噴火	坊主町に御用窯を開く
宝永6	1709	新井白石を登用	
正徳3	1713		土井利実が家督を相続
享保元	1716	徳川吉宗将軍となる	このころ北波多で石炭が発見
享保9	1724		土井利実が藩校盈科堂を創設
享保17	1732	享保の大飢饉	唐津藩では幕府に援助を願い出る
享保19	1734		御用窯を唐人町に移す
元文元	1736		土井利延が家督を相続
延享元	1744		土井利里が家督を相続
延享2	1745		砂子の論争起きる。唐津藩内で大洪水
江 戸 時 代	宝曆12	1762	国替。水野忠任が廻崎より入部
	宝曆13	1763	庄屋達が待遇の改善を求める（蓮光寺寄り）
	明和7	1770	鏡神社焼失
	明和8	1771	虹ノ松原一揆が起きる
	安永4	1775	水野忠肅が家督を相続
	天明2	1782 天明の大飢饉（～1788）	
	天明4	1784	木崎悠々軒が『肥前國産物図考』を描く
	天明7	1787 松平定信の寛政の改革始まる	
	天明8	1788	御仕法制度開始。石炭産業が藩の統制化に
	寛政4	1792 雲仙岳噴火	
	享和元	1801	水野忠肅が藩校経説館を創設
	文化元	1804 ロシア使節レザノフ長崎に来航	
	文化2	1805	水野忠光が家督を相続
	文化5	1808 フェートン号事件	
	文化9	1812	伊能忠敬が唐津藩内を測量
	"	"	水野忠邦が家督を相続
	文化14	1817 イギリス船踏浜へ来航	国替。小笠原長昌が翻倉より入部
	文政2	1819	1番曳山赤獅子造られる
	文政4	1823 シーボルト着任	小笠原長泰が家督を相続
	文政8	1825 異国船打払合せられる	
	天保4	1833 天保の大飢饉（数年続く）	小笠原長会が家督を相続。赤子養育仕法を実施
	天保7	1836	小笠原長和が家督を相続
	天保8	1837 大塩平八郎の乱。モリソン号事件	
	天保10	1839 奪社の獄	前年起きた幕領の百姓一揆が唐津藩が鎮圧

Tab.3 唐津地域の近世～現在年表 ②

	元号	西暦	国内の主な出来事	唐津の主な出来事
江戸時代	天保11	1840		小笠原長国が家督を相続
	天保12	1841	天保の改革始まる	
	天保13	1842		満島村に炭方役所が開設
	天保14	1843		小川島捕鯨を営む
	嘉永6	1853	ペリーが浦賀に来航。チャーチンが長崎に来航	
	安政元	1854	日米和親条約を締結	
	安政2	1855	江戸大地震	領内を外国船が航行
	安政3	1856		小川島沖にロシア船が来航
	安政5	1858	日米修好通商条約を締結。安政の大獄始まる	小笠原長行が長國の名代となる
	万延元	1860	桜田門外の変	外国船が名護屋・呼子に来航
	文久2	1862	生麦事件	
	"	"		小笠原長行が老中格となる
	文久3	1863	薩英戦争	
	元治元	1864	禁門の変、第一次長州戦争	御仕法制度を強める。薩摩藩が蕨木・相知で採炭開始
明治時代	慶応元	1865		小笠原長行が老中格に返り咲く
	慶応2	1866	薩長同盟成立。第2次長州戦争	
	慶応3	1867		小笠原長行が外国事務総裁となる
	"	"	大政奉還、王政復古を宣言	
	明治元	1868	戊辰戦争起きる	小笠原長国が石炭を新政府に献上
	"	"	五箇条のご誓文公布。神仏分離令	虹ノ松原一揆が再度おきる
	明治2	1869	戊辰戦争終結。版籍奉還	小笠原長国唐津守となり
	明治4	1871	廃藩置県	耐恒寮を設ける。唐津県廃止、伊万里県となる
	明治5	1872		志道館廃校
	明治6	1873	地租改正	
	明治7	1874		佐賀の乱（旧唐津藩士が120名参加）
	明治9	1876		佐賀県が長崎県に編入
	明治10	1877	西南の役	唐津城跡が公園となる
	明治11	1878		東松浦郡役所設置
	明治15	1882		郡役所の開庁式を行う。唐津港から石炭の輸出を許可
	明治16	1883		長崎県より佐賀県を分離
	明治18	1885		芳谷炭鉱開鉱。唐津銀行ができる
	明治22	1889	大日本帝国憲法発布	唐津町町制施行。唐津港が特別輸出港に指定される
	明治27	1894	日清戦争	芳谷炭鉱株式会社が設立
	明治29	1896		相知炭鉱開鉱。松浦橋架橋
	明治31	1898		唐津線（妙見一山本間）開通
	明治32	1899		東松浦郡役所建設
	明治33	1900		岩屋炭鉱開鉱
	明治34	1901		岸括炭鉱開鉱。唐津小学校建設
	明治35	1902	日英同盟	
	明治36	1903		唐津線全線開通。馬鉄が大手口まで開通
	明治37	1904	日露戦争	

Tab.3 唐津地域の近世～現在年表 ③

	元号	西暦	国内の主な出来事	唐津の主な出来事
明治時代	明治41	1908		三菱合資会社唐津支店建てられる
	明治42	1909		唐津鉄工所創立
	明治43	1910	韓国併合	
	明治44	1911		三菱銅業が芳谷炭鉱を買収
	明治45	1912		松浦橋再築、唐津銀行本店建設
大正時代	大正2	1913		唐津公会堂建設
	大正3	1914	第1次世界大戦開戦。パナマ運河開通	
	"	"		桜島大噴火。唐津でも降灰
	大正7	1918	スペインかぜ大流行	
	大正8	1919	パリ講和条約調印	
	大正12	1923	関東大震災	新大橋架橋
	大正13	1924		唐津町と満島村が合併
	大正14	1925	治安維持法成立	北九州鉄道博多→唐津間全線開通
	大正15	1926		郡役所閉庁
昭和時代	昭和3	1928	第1回普通選挙	
	昭和4	1929	世界大恐慌	
	昭和6	1931		唐津町と唐津村が合併
	昭和7	1932	五・一五事件	唐津市制施行
	昭和8	1933	国際連盟脱退	松浦川《材木町裏》埋立 (~1935)
	昭和9	1934		千代田橋架橋
	昭和11	1936	二・二六事件	
	昭和12	1937	日中戦争	
	昭和14	1939	第2次世界大戦開戦	現松浦橋架橋
	昭和15	1940	日独伊三国同盟締結	
	昭和16	1941	太平洋戦争	唐津市と佐志町が合併
	昭和20	1945	ポツダム宣言受諾	
	昭和22	1947	日本国憲法施行	
	昭和25	1950	朝鮮戦争始まる	
	昭和26	1951	サンフランシスコ平和条約調印	
	昭和28	1953		舞鶴橋・旧中央橋架橋
	昭和29	1954		唐津市が鏡村・久里村・鬼塚村・湊村と合併
	昭和31	1956	国際連合に加盟	打上村・名護屋村が合併し、鏡西町誕生。浜崎村・玉島村が合併し、浜崎玉島町が誕生
	昭和33	1958		入野村と切木村(一部)が合併し、肥前町が誕生
	昭和35	1960	日米新安保条約発効	
	昭和36	1961		捕鯨の終了。現中央橋架橋
	昭和37	1962		現唐津市役所建設
	昭和38	1963		唐津総合庁舎を大名小路に建設
	昭和40	1965		岩屋炭鉱閉山。唐津の炭鉱は全て閉山
	昭和41	1966		唐津城天守建設

Tab.3 唐津地域の近世~現在年表 ④

第Ⅲ章 遺構

第1節 調査の概要

今回は前述のとおり、建物の基礎を残しての調査を行ったことが調査方針の最大のポイントといえる。これは確認調査の結果から、遺構面の高さと建物基礎の深さが同程度と考えられたため、遺構面を保護することを優先し、上屋の解体にとどめたことによる。その結果、車庫棟下面については、遺構面が残り、遺構の調査を行うことができた。しかし庁舎棟については、建物基礎の深さが1mを超えていたため遺構面が残っておらず、包含層の調査を行うだけにとどまった。建物基礎を残しての調査であったことから、調査区と調査区の間に未調査部分を多く残しながらの調査となった。また調査区内の土壌が江戸期～近代にかけての造成土で構成されていたため、土質の変化が大きく、隣の調査区との整合性を考える上では困難を強いられることとなった。特にS-2を挟んで西側のS-1・5・6と東側のS-3・4間では土質の差が大きく、基本層序を考える上で最も頭を悩ませた点であった。

当初は近世の調査が中心と考えていたが、確認できた遺構については近代のものがほとんどを占め、近世に限定できた遺構は下面の調査で見つかった土坑にとどまった。近世の屋敷に伴う遺構は近代の住宅及び唐津公会堂(東松浦都会議事堂)の建設に伴う造成及び、現代の総合庁舎(唐津保健福祉事務所)建設により破壊されていることが分かった。

庁舎棟の調査では、カク乱の一部が下層の包含層にまで到達していた。建物基礎を残した難しい調査条件であった中、基礎のほぼ直下から丁銀が見つかったことは、基礎を残した調査方針の功の面とできようか。二の門堀に近い調査区でも上面は近代の遺構であり近世にさかのぼる遺構は下面の調査で見つかった土坑1基であった。

下面・下層の調査は、安全面を考慮して各グリッドの中の一部にとどまった。遺構を確認できたのはS-2とH-1の2グリッドだけであった。その他のグリッドでは包含層の調査を行った。包含層は2層に分かれしており、多くの鉄滓や炭化物が見つかった。陶磁器類も中世～近世初頭のものであったため、築城期以前の包含層の可能性が高い。

上記のように当初期待していた近世の屋敷地に関する遺構はなかった。遺物に関しては、近代の造成土から多くの近世陶磁器が出土した。これは近代の大規模な造成により埋め立てが行われたためであり、その際にそれまで建てられていた建物の廃材や石材等と共に投棄されたのであろう。

第2節 層序について

調査はS区から始めた。S区に関しては、基本層序を定め、それに合わせて遺物の取り上げを行うこととした。しかし、上述のとおり全体が造成土であったため、隣のグリッドであっても同一層序であるのか確認が困難であった。また一つのグリッドが狭いこともあり、上層からのシミや掘り込みがあると分層も困難であった。基本層序の模式図(Fig.7)と、代表的な層序としてS-2西壁と中央ベルト土層を掲載した(Fig.8・9)。

3層は、縞状の造成土である4層を基盤とした表土層(生活面)とした。3層は土の汚濁が進み、よく搅拌された土質であった。4層は薄い砂と砂質土を互層に重ねた縞状の土層が基本であるが、場所による差異も見られた。これは造成の時期の違いや、利用した土壌の違いであろう。3層と4層は同じ土質であるため、平面での分層は難しかったが、傾向としては4層から出土した遺物は小片が多かった。

また、3層形成後に造成を行った箇所では、3層上層に今回4層とした縞状の造成土が堆積しているため、層序の認識が混乱する要因となった。

最も多くの遺物が出土したのは2層及び2層を埋土とした遺構である。2層はブロック状の赤褐色土や炭化物が多く混入した土層である。土質からみると大規模な造成による土層と思われることから、大正2（1913）年に建てられた唐津公会堂（東松浦郡会議事堂）に伴う造成土の可能性が高い。そのため、3層と4層は近世～近代（明治期）の造成土及び表土層と考えた。

5層は唐津市街地では通常の黒褐色細砂であるが、7層がブロック状に混じる箇所も見られた。特徴としては鉄滓が多く出土したこと、炭化物及び径が数cm程度の粒状の赤褐色土が多く混じることが挙げられる。出土遺物から考えると染城崩の上層の可能性が高い。6層は河川沿いという地形をよく表した、水流の影響を大きく受けた土質であった。

T区は上述のとおりカク乱が激しく、基本層序を決めることができなかった。H区はそれぞれ土層が異なっていたため基本層序は定めなかった。

第3節 上面・上層調査について

上面・上層の調査について、グリッド毎に詳述する。

(1) S-1 (Fig.10~13)

S-1は遺物の出土が非常に多く、大きめの礫も数石確認できたため、慎重に掘り下げを行った。その結果、L字状の石列（SX11）を確認した。石列はS-2・5には続いていないことから、S-1内で収まるようである。池状の遺構を想定していたが、トレンチ掘削を行った結果、底面に粘土を張ったような痕跡はないことから、池状の遺構ではないと考えた。また石積みは転石も加えても2石程度の可能性が高いことが分かった。石材は3層上面に並べ、2層に覆われているため、3層段階の石組遺構である。遺構形成時期は、石材の下層から近代の陶磁器が出土したことから、近代の石列である。

遺構下層の3層は粘質土と砂質土が互層となっており、水流の影響を受けた土層の堆積がみられた。また炭化物が多く、骨片や陶磁器、瓦片も比較的多く見つかった。3層段階では水流の影響を受ける場所であった場所に石列を造り、2層段階の造成で敷地内を平坦な土地に造り出していることが分かった。

遺物は2層中から多く出土しており、調査区全体を通じて最も出土遺物が多いグリッドであった。

(2) S-2 (Fig.14~16)

S-2はS区では最も調査面積を広くとることができた。遺構検出は3層上面で行ったが、上述した土質の影響で遺構の検出が非常に難しかった。そのためグリッド中央に南北方向のトレンチを設定し、土層を確認しながら掘り下げを行った。

S-2は東西で土層が異なっている。西壁と中央ベルトでは3層が確認されるが、東壁では3層ではなく、4層直上が2層となっている。これはS-3・S-4でも同じ傾向であり、3層は2層段階の造成により消失したと考えられる。

P09は4層上面でいたん検出できたが、掘り下げ途中で遺構ではないと判断した。しかし、5層まで掘削した際に再度遺構として検出でき、底石が据えてあることも確認した。P10は底石を確認したことで遺構と分かったが、平面では検出できなかった。中央ベルトに一部がかかっていたため、木柱の跡が上層で確認できた。両ピット共に3層を埋土としており、深さが0.8m程度。

SK20は3層上面で検出できた遺構で、埋土は版築状に赤褐色土と暗褐色土が互層になっており、しまりが非常に強く、その周囲を黒褐色砂質土が覆う。埋土中からは金属片や陶磁器片が出土している。

3層を掘り込んでいる。P09とP10はSK20をはさむ位置から見つかっているが、埋土が異なっており、伴うものではないと考えられる。

この他、東壁際から土坑が見つかっている。埋土は2層であり、赤褐色土が多く混入する。同埋土はS-3とS-4からも確認されており、S-3のSK07に続く可能性もある。

(3) S-3 (Fig.17・18)

S-3では、4層は北から南側に向けて傾斜しており、北半ほど厚みを増す。3層は南半だけに薄く分布する。2層は南半が厚く、北側に向けて厚みを大きく減じる。北半は2層が薄かったことから、遺物の出土が少なく、3層が残っていないことから遺構の確認もなかった。

SX02は2層上面で検出した。底面付近だけが残存している。底面は西側が高く東側に向けて緩やかに低くなり、東端に陶器壺が底面に擦りつくように斜めに付けられており、液体が壺に流れ込むような構造となっている。モルタルで作られており、長崎方面で近世～近代に見つかるいわゆるアマカワ遺構に類似した遺構である。大きさは底面で壺口縁部までの長さ12.5m、東側の幅が0.6m。2層上面で確認されたことから、唐津公会堂に伴う遺構の可能性が高い。

SX02下層からは5層を掘り込み、2層を埋土としたSK07が見つかった。SK07からは仏飯具を中心とした近世～近代の遺物が多く出土した。数回の掘り返しのため不整形の土坑状の遺構であり、大きさもはっきりしない。S-3では西壁際まで続いている、S-2の土坑につながる可能性もある。

(4) S-4 (Fig.19・20)

S-4も、S-3とほぼ同様の土層の堆積をしている。ただし、2層の分布が広く、4層の分布が狭いという違いがある。

調査区南壁沿いで石列を確認し、その下部で土管の配管を検出した。石列は配管の石蓋の一部と思われ、配管脇から下部には固定のために板状の小礫や瓦片を並べる。配管下部には、2層を埋土とした大型の土坑SX05を検出した。SX05は出土遺物が非常に多く、炭化物と赤褐色土の混入も多くみられた。またSX05北側からは礎石と思われる大型の扁平な円盤や陶磁器が出土しており、2層階で投棄されたものと思われる。

(5) S-5 (Fig.21・22)

S-5は3層上面で礎石の可能性がある並んだ円盤と溝状遺構SD06を検出した。SD06は調査区西壁では確認できないことから、部分的な掘り込みである。SD06に隣接するS-6では井戸(SX01)を検出していることから、SD06はSX01に伴う掘り込みの可能性がある。

S-5北壁では東側から投棄された混貝土層がみられ、アワビを中心にサザエの貝殻が見つかった。その上層には3①層とした赤褐色土と暗褐色砂質土の互層の堆積がみられる。土質的には4層同一であるが、混乱を避けるため3層の一部とした。また調査区北壁東半には3層階の落ちこみがみられるが、これがSX11に伴うものとの可能性もある。

(6) S-6 (Fig.23・24)

S-6では1層除去後、SX01の石組みを検出した。その他3層上面でSK03と04も検出した。SK03は浅く、土坑ではない可能性がある。SK04は埋土が3層で、3層中で終わる掘り込みのよう、遺構プランの確認はできなかったが、底部を打ち欠いた土瓶に、蓋に転用された磁器小皿が載せられた状態で出土した。注口の向きは東南東に正確に向け据えられている。土瓶は胞衣壺に転用されることがあり、出土状況を合わせて考えると、SK04は胞衣埋納遺構と考えられる。

SX01は砂岩の板石を利用した石組みの井戸である。4段積みであり、石材間はモルタルにより目張りを施す。上部の2段の石材は特に内面の仕上げが丁寧であり、内湾気味に石材に加工を施す。石の組

み合わせ方は各段で異なり、T字状と逆T字状の石材の組み合わせや、ほぞ組みも見られる。北側の2段目の石材は補修のためか、モルタルにより小礫が裏側から埋め込まれている。南側最下段は2段に分かれしており、上に載せられた小型の二石の間は0.2m程空けられている。モルタルで固めた痕跡はなく、当初より空けていたことが分かる。裏込めには平瓦が多く詰められていた。築造時期は掘方の埋土が3層であることから、3層段階に造られたと考えられる。

(7) T-1～T-7 (Fig.32～38)

上述のとおりT区は、S区よりも建物基礎が深く、遺構面は残存しておらず、また近世～近代の層もほとんど残存していなかった。

T-1はT-2の南側に設定したが、上屋解体時のカク乱が最も激しかったため、安全面を考慮し、掘削を中止した。

T-2・T-3は建物基礎間が狭小であり、調査できた範囲は狭い。T-2は近世～近代の遺物を含む4層が残存しており、T区の中では遺存状態が良かった。T-2の4層はS区に同一層はないが、小礫が多いこと、赤褐色土や炭化物の混入の状況より、S区の2層と対応すると思われる。3層までのカク乱除去後、4層掘り下げ中に近世の丁銀が単独で出土した。4層からは近世～近代の小片を中心とした陶磁器片が出土しているが、遺物の集中箇所もないことから、近代の造成土と思われる。

T-3はカク乱が激しく、T-2の4層にあたる層がごく一部で確認できたにとどまる。

T-4～7はカク乱が激しく、近世～近代の層は残存していなかったが、T-4では0.9m四方のコンクリート基礎を3基確認した。基礎のコンクリートは小さな隙間が目立ち、用いられている礫は小円礫であった。昭和40年代まではコンクリート基礎に小円礫を用いていたようで、昭和38年に総合庁舎として建てられた庁舎棟の前身の建物の基礎である。また同基礎が見つかったT-4の2層からは、多くの円礫が見つかっている。基礎に用いられていたものと思われる。T-5～7は庁舎棟建設時のカク乱が下層の包含層にまで及んでおり、出土遺物も少なかった。

(8) H-1 (Fig.32～42)

H-1は建物基礎に囲まれておらず、最も広く調査面積をとることができた。H-1の上層とS区土層との関係は、H-1東壁の3層がS区の3層と、4層がS区の4層と対応していると考えた。近世段階の石垣天端の高さは標高2.3m程度であり、2層や3層の上面と大よそ合うことから、当時の生活面は2層や3層の上面となろう。

H-1の遺構検出面は3層上面である。SD14は1層から掘り込まれた土管の配管である。SK15・16・17は3層を掘り込む土坑である。SK15は赤褐色土を貼付けた底面が2面確認されている。SK16は木片が多く出土した小土坑。SK17はSD14に切られた土坑であり、瓦と礫が多く出土しており、その他近世～近代の陶磁器や石塔の一部も見つかっている。

(9) H-2 (Fig.43・44)

H-2のS区土層との対応関係は、3層がS区の3層に、4層がS区の4層に対応すると考えた。3層上面が遺構検出面である。石列SX18を確認した。石列に用いられた石材には矢穴が残るものも含まれていることから、近世にさかのぼる可能性を考えたが、石材下面より2層とした黒色粘質土やガラス片等の遺物が見つかったことから近代以降と分かった。石材の並びに規則性はなく、投棄された石材の可能性がある。

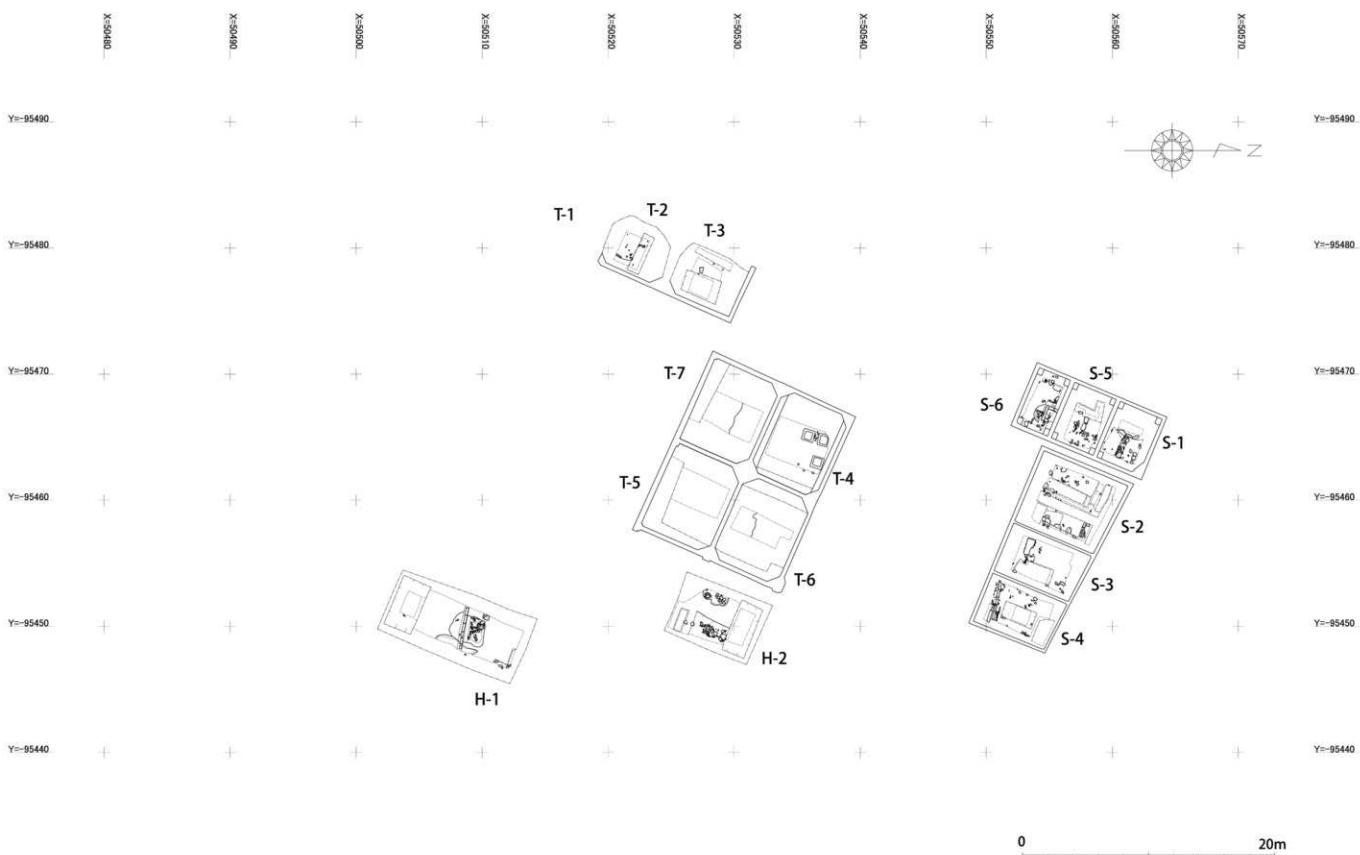


Fig. 5 調査区平面図（上面）(1/300)

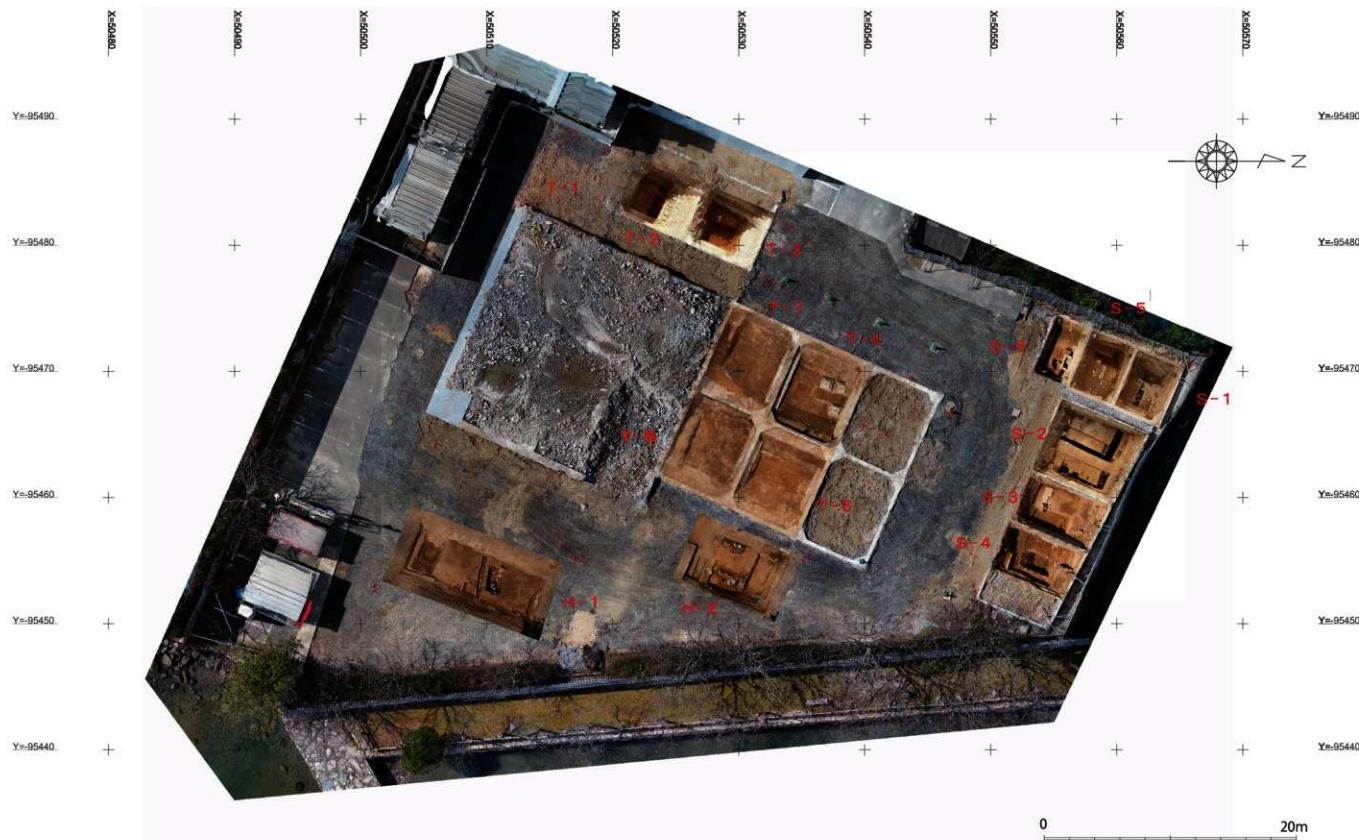
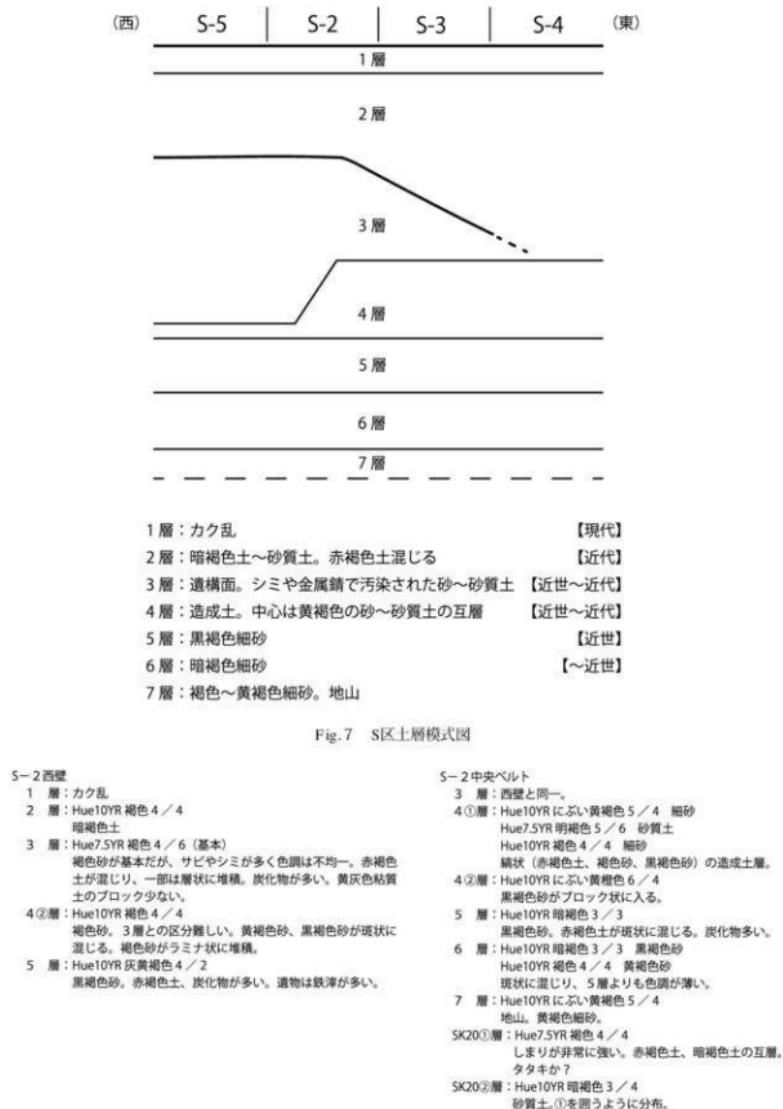


Fig. 6 調査区平面オルソ図 (1/300)



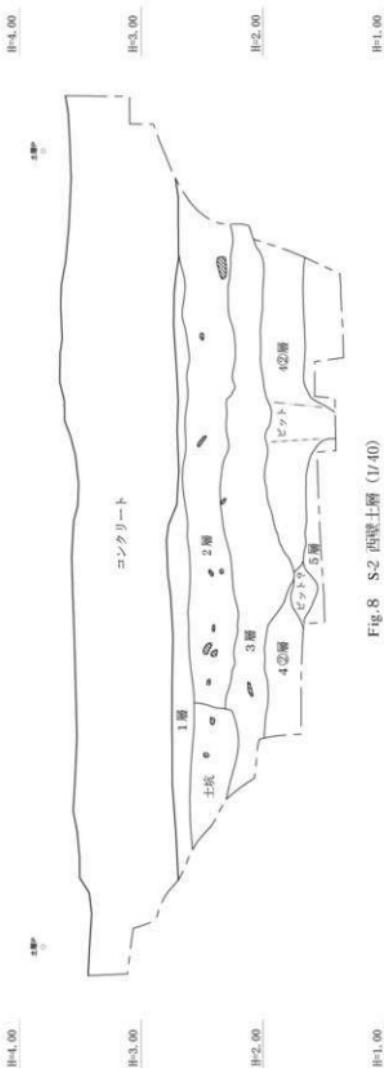


Fig. 8 S-2 西壁上層 (1/40)

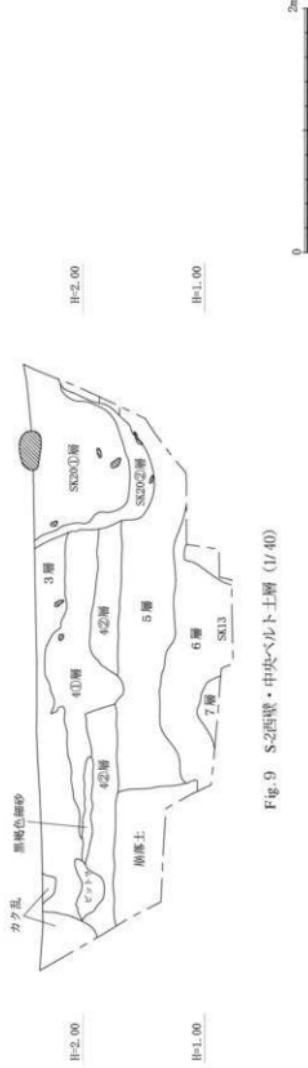


Fig. 9 S-2西壁・中央ベルト土層 (1/40)

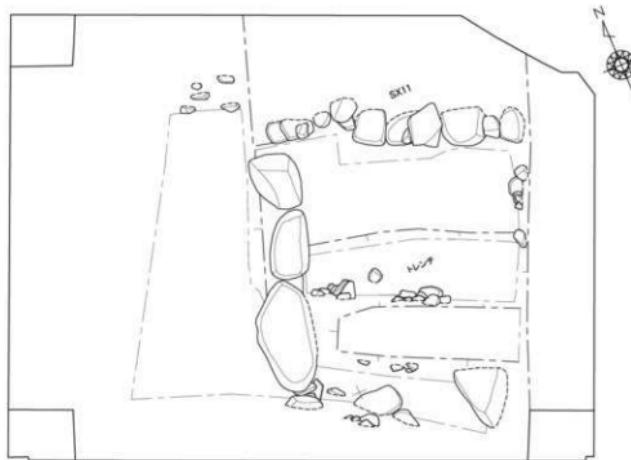
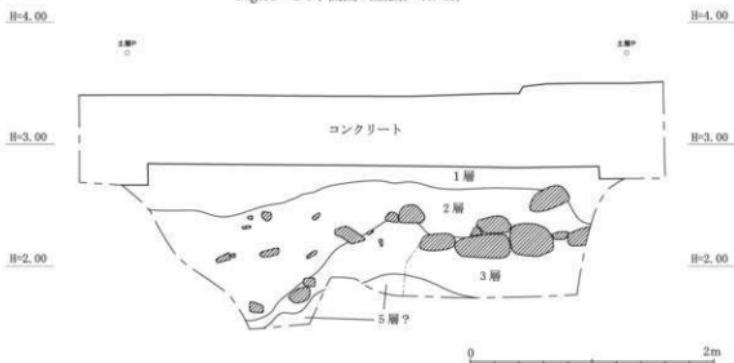


Fig.10 S-1平面図(上面)(1/40)



S-1北壁

- 1 層：カク乱
- 2 層：Hue2SY オリーブ褐色 4／3
砂質土。部分的に砂分、土分の多寡あり。遺物量が多い。
- 3 層：Hue10YR 黒褐色 3／2
粘質土と砂、砂質土が層状、斑状に混じる。
- 5層？：Hue10YR にぶい黄褐色 5／4
5層に含めた黄褐色砂ブロック。細砂～大砂。

Fig.11 S-1北壁土層図(1/40)

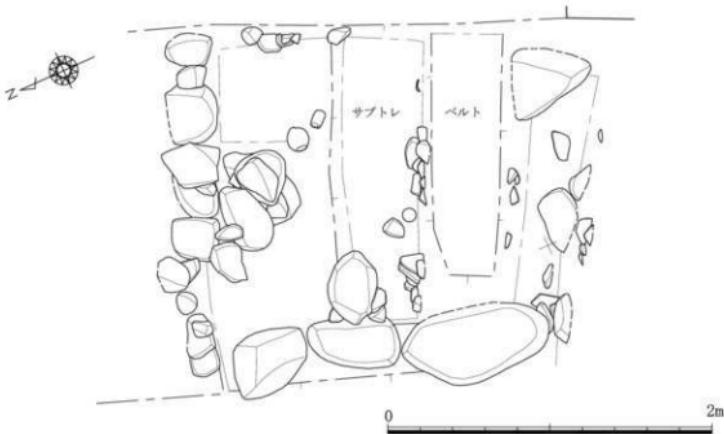


Fig.12 SX11平面図 (1/30)

土面P
○土面P
○

Fig.13 S-1東壁土層図 (1/30)

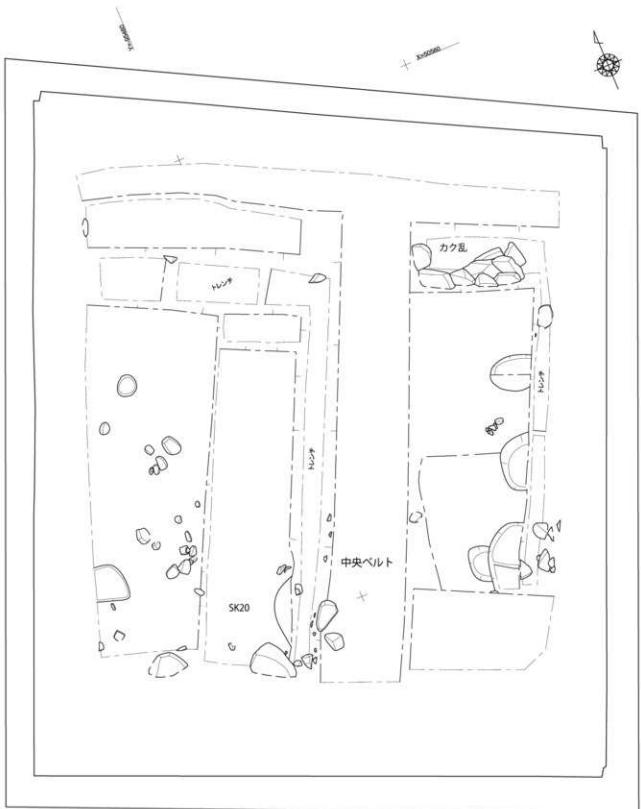


Fig.14 S-2平面図(上面)(1/40)

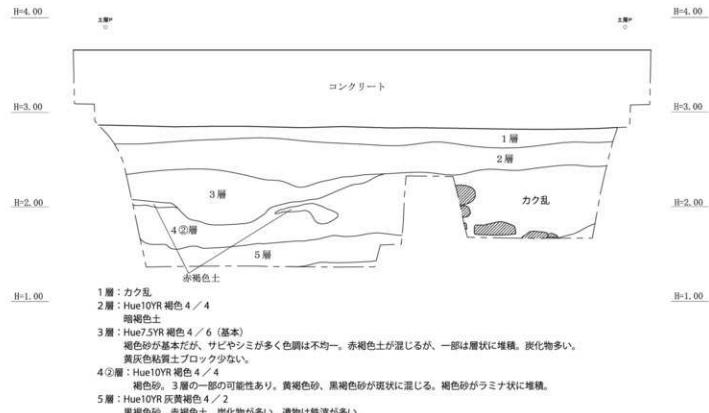


Fig.15 S-2北壁土層図(1/40)

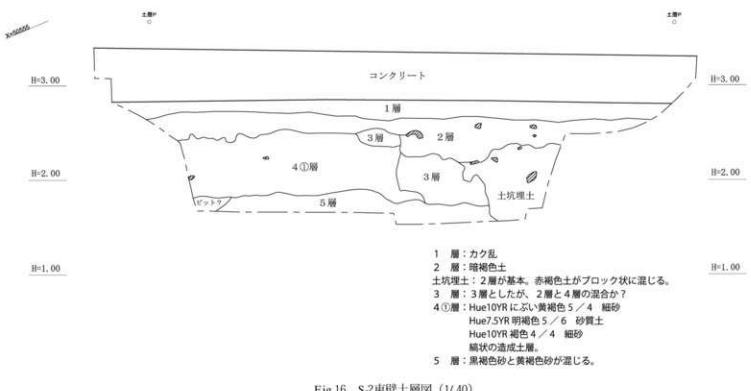


Fig.16 S-2東壁土層図(1/40)

0 2m

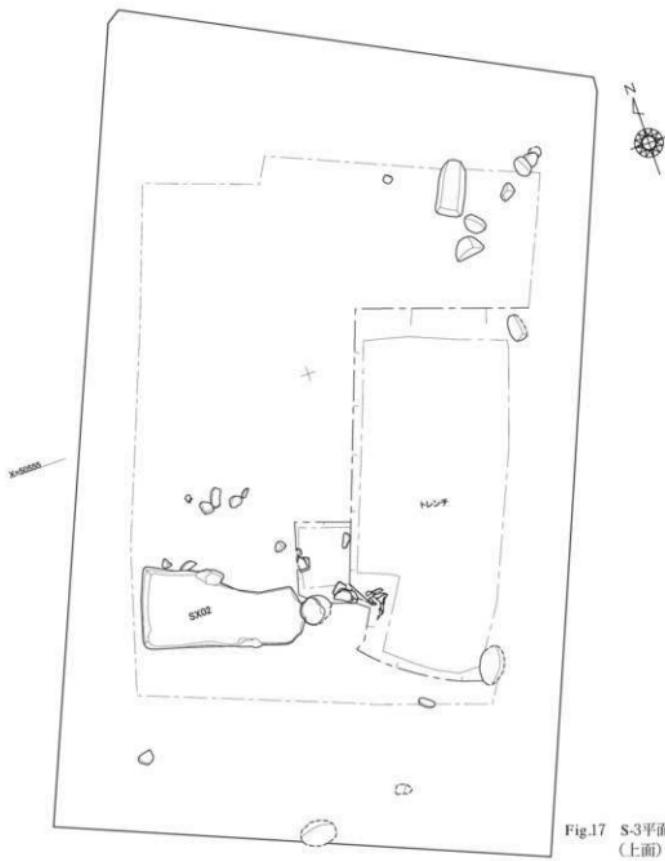
Fig.17 S-3平面図
(上面) (1/40)

Fig.18 SX02オルソ図 (1/40)

0 2m

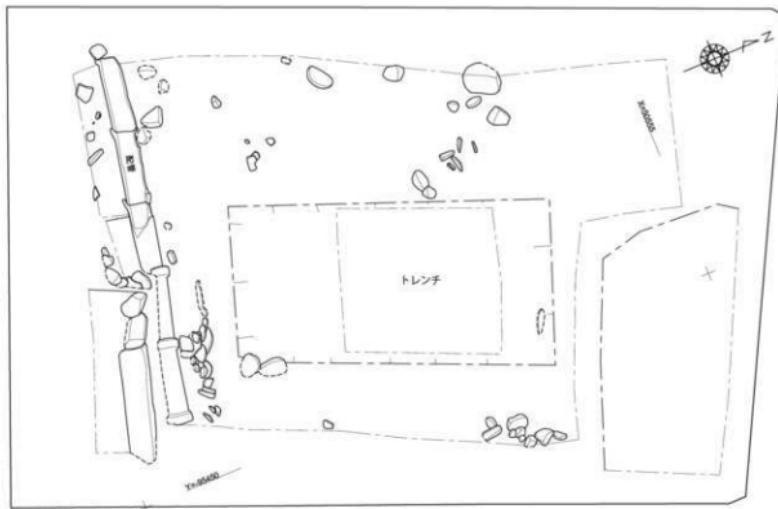


Fig.19 S-4平面図（上面）① (1/40)

0

2m

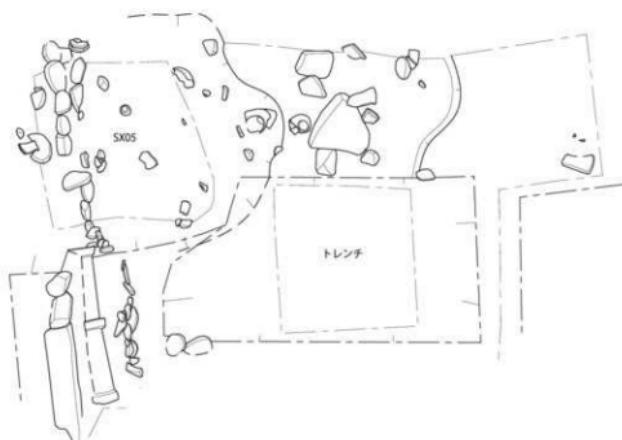


Fig.20 S-4平面図（上面）② (1/40)

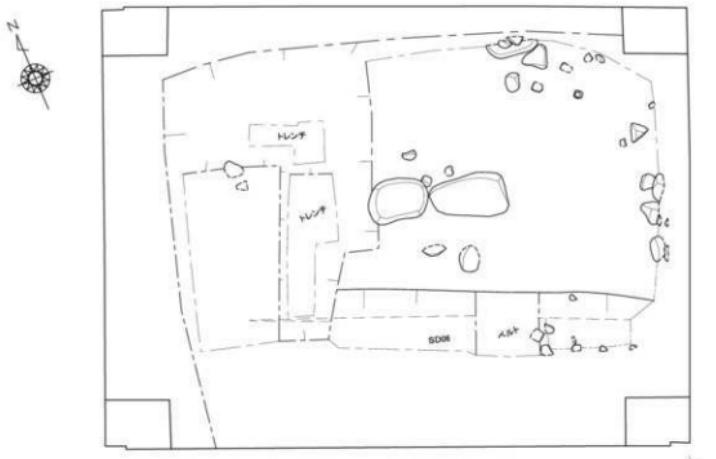


Fig.21 S-5平面図(上面)(1/40)

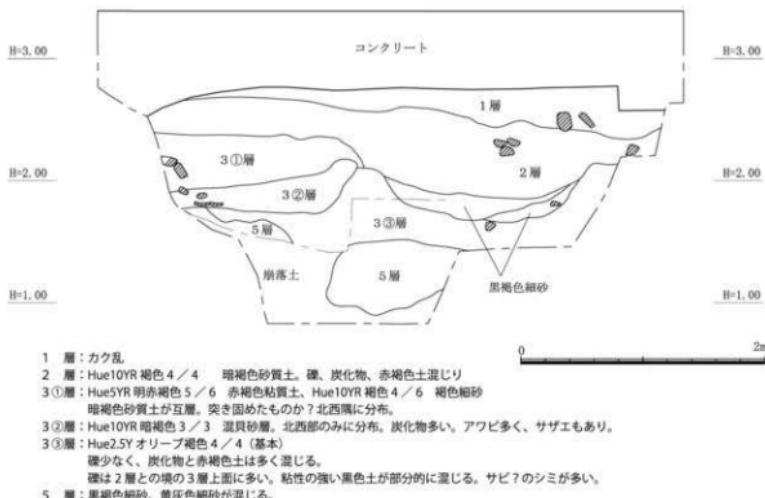


Fig.22 S-5北壁土層図(1/40)

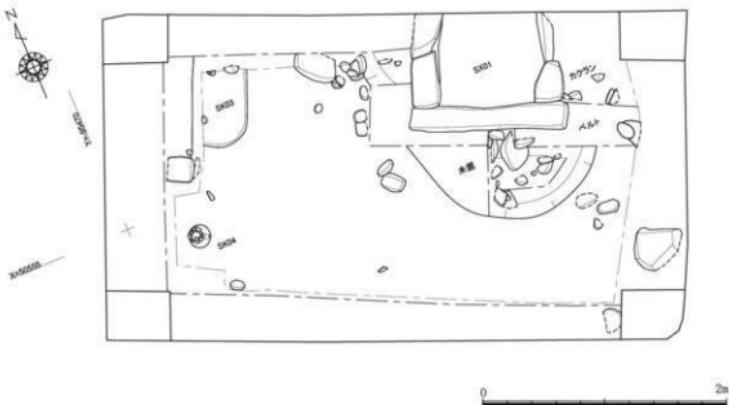
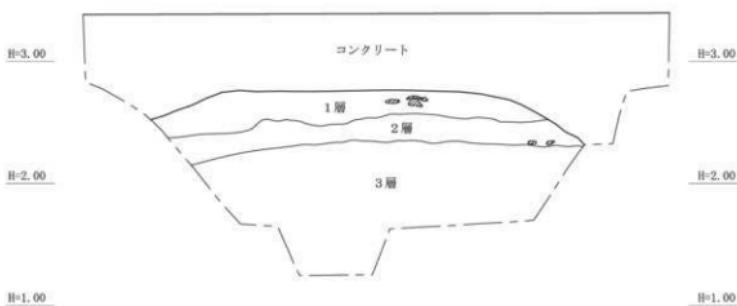


Fig.23 S-6平面図(上面)(1/40)



S-6南壁

- 1層：カク風。
- 2層：Hue10YR 箱褐色3/4 砂質土。礫多い。
- 3層：東に行くにつれ赤褐色粘質土、炭化物、黄褐色砂が層状に混じる。埋め立て土
西壁の3層と同一層だがシミにより非常に汚れた層となる。含有物多い。
層境はないが、汚れのため平面では西壁付近と別層と捉えられるほど色調が異なる。

Fig.24 S-6南壁土層図(1/40)

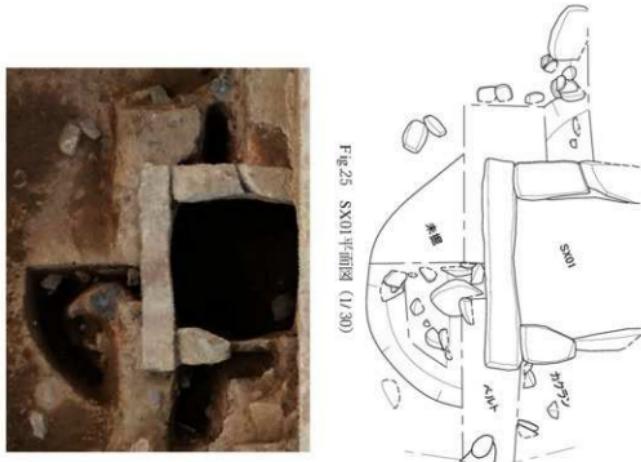


Fig. 25 SX01平面オルソ図 (1/30)

Fig. 27 SX01横断面図 (1/30)

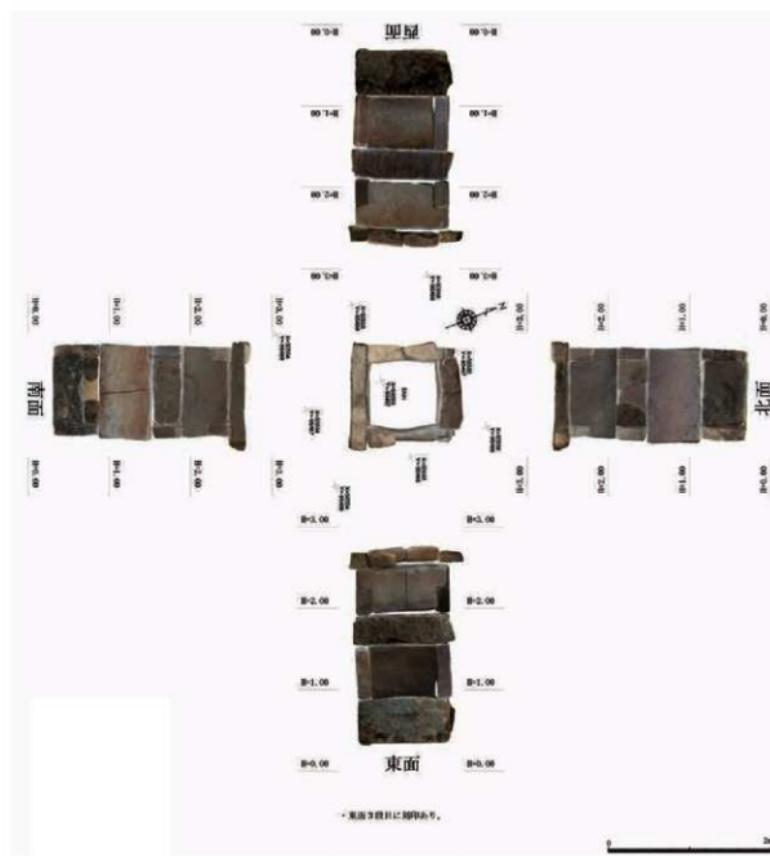


Fig.28 SX01展開オルソ図 (1/60)

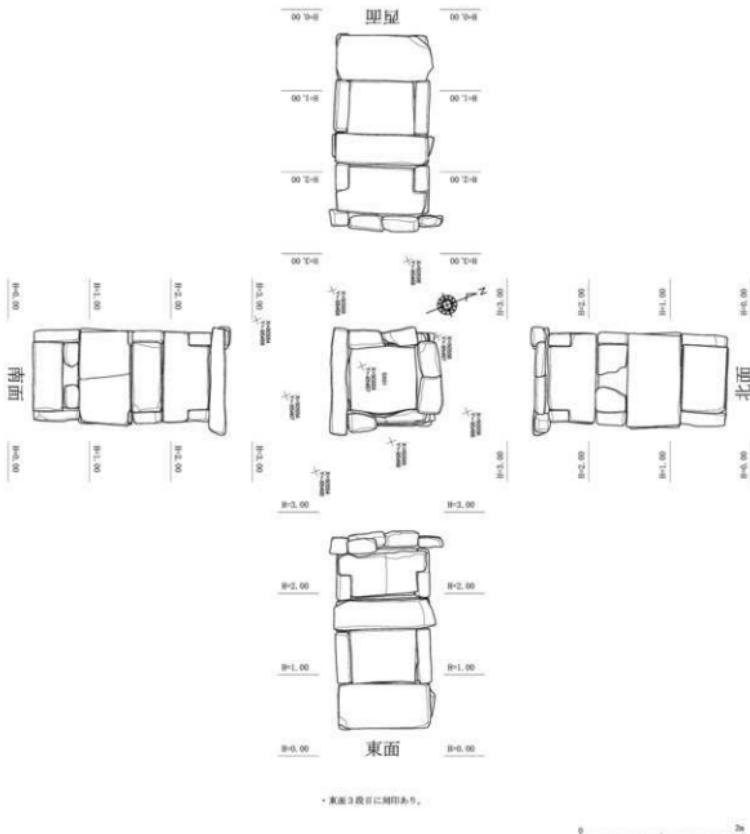


Fig.29 SX01展開図 (1/60)



Fig.30 SX01 3D画像①



Fig.31 SX01 3D画像②

※縮尺任意

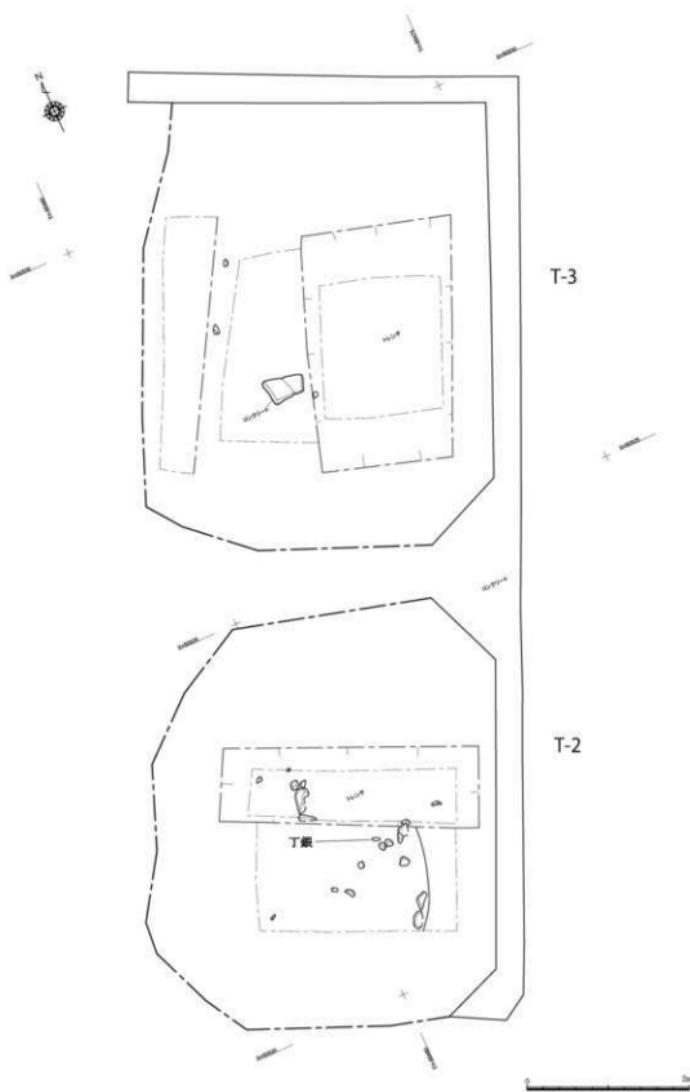
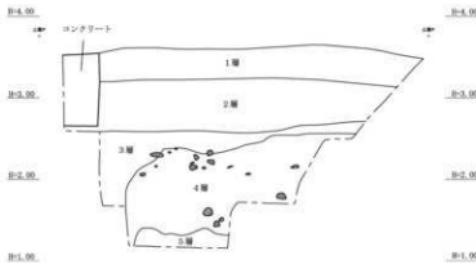


Fig 32 T-2・3平面図（上層）(1/60)



T-2 北壁

1層：カク乱。

細砂、赤褐色土ブロック状に混じる。

2層：Hue7.5 YR 明褐色 5/6

カク乱。細砂、赤褐色土ブロック状に混じる。炭化物混じる。遺物（瓦・陶器）含む。

3層：Hue10YR 黒褐色 3/1

カク乱。細砂、黄褐色斑状に混じる。

4層：Hue10YR 黑褐色 3/2

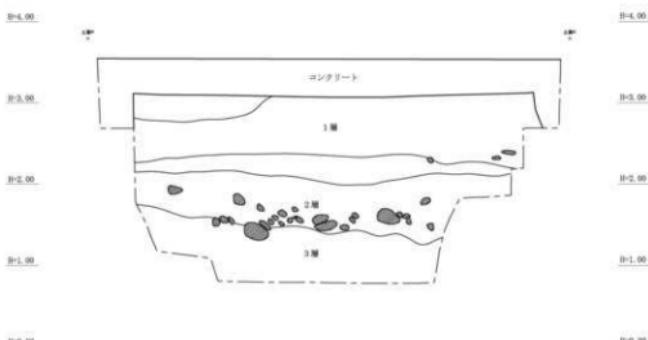
細砂、赤褐色土ブロック状に混じる。炭化物混じる。

5層：Hue10YR 黑褐色 3/2

細砂、赤褐色ブロック混じり、炭化物含む。5区5層と同一層。

※平面では5区の6層と同一層を確認。

Fig.33 T-2北壁土層図 (1/60)



T-4 南壁

1層：カクラン

細砂、褐色粘質土混じる。

2層：Hue10YR 明黃褐色 7/6

細砂、近現代建築物の基礎に伴うバラス、河原石、黄褐色細砂（基礎に伴う埋め砂か）

3層：Hue10YR 暗褐色 3/3

細砂、明赤褐色粘質土混じり、褐灰細砂含む。

5区の5層と同一層。

Fig.34 T-4南壁土層図 (1/60)



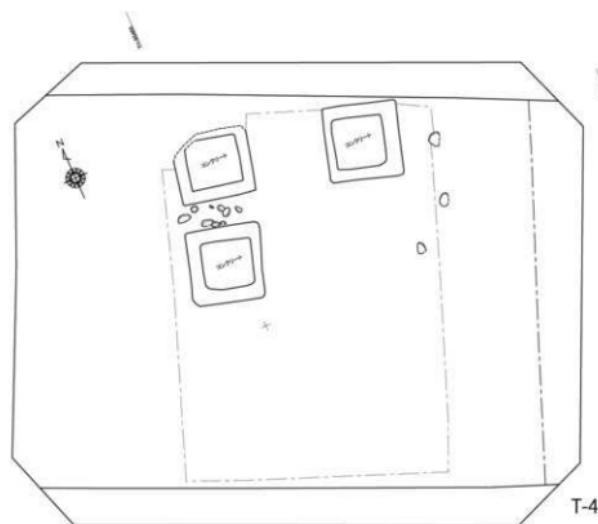


Fig.35 T-4平面図(上面) (1/60)

0 3m

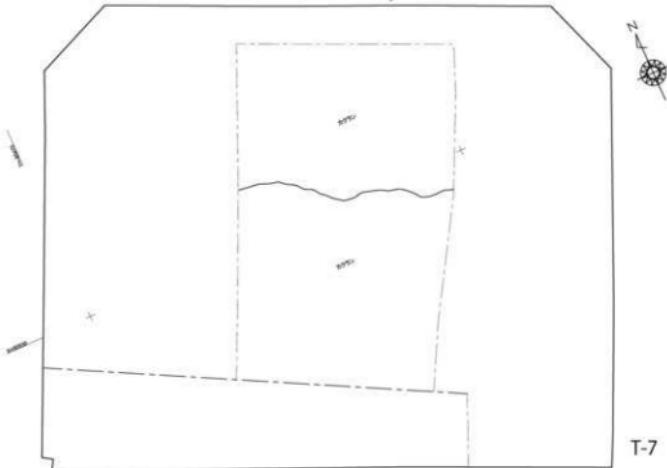


Fig.36 T-7平面図(上層) (1/60)

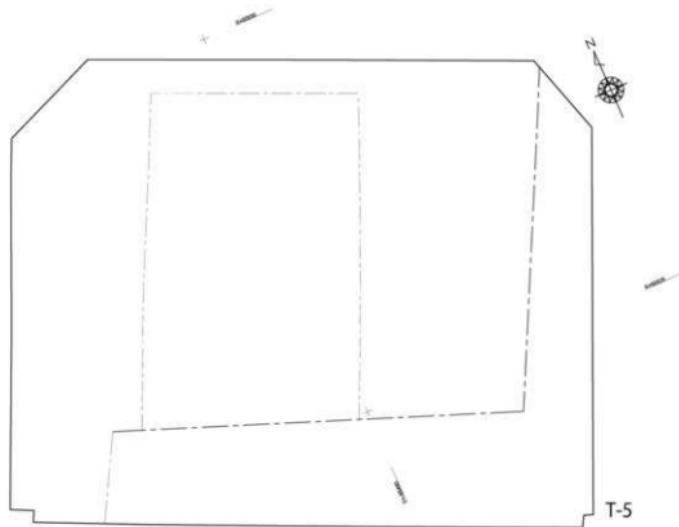


Fig.37 T-5平面図（上層）(1/60)

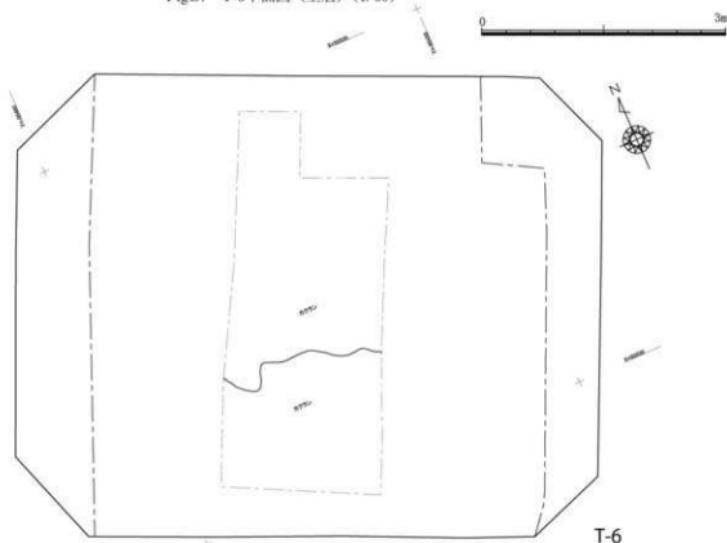


Fig.38 T-6平面図（上層）(1/60)

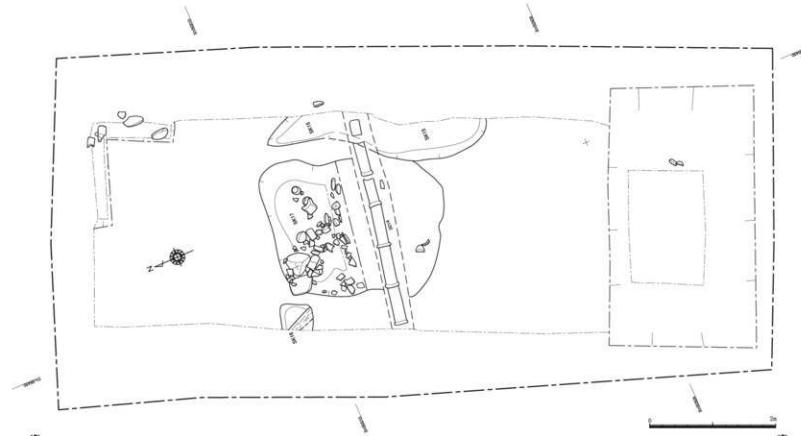


Fig.39 H-1平面図(上面)(1/60)

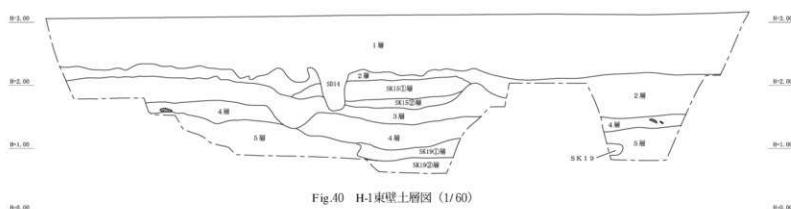


Fig.40 H-1東壁土層図 (1/60)

1層：カク乱	4層：赤褐色質地、暗褐色質地。にぶい黄橙色の豆層
2層：Hue:5YR 褐色 4/3	5層：Hue:10R にぶい黄橙色 6 / 4
細緻、しまりあり、炭化物混じる。	細緻、しまりなし
SK150 層：Hue:10YR 黄褐色 5/6	SK19
しまりあり、炭化物混じる。	①層：コモ層と2層の豆層。木片、加工が多い。磚は非常に少ない。 SK19の本体の底面には粗削り構造出よりも0.6mm高い。
SK159 層：Hue:25YR 明褐色 黑 5/6	②層：Hue:75YR オブリーク黒／2
しまりあり	細緻、しまりなし
3層：Hue:5YR 褐色 4/6	
やわらか、しまりあり	

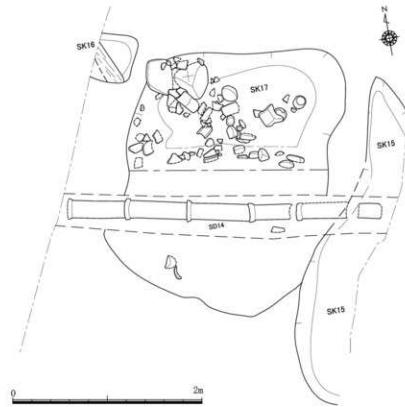


Fig.41 SK17・SD14平面図 (1/40)



Fig. 42 SK17+SD14平西木心之圖 (1/40)

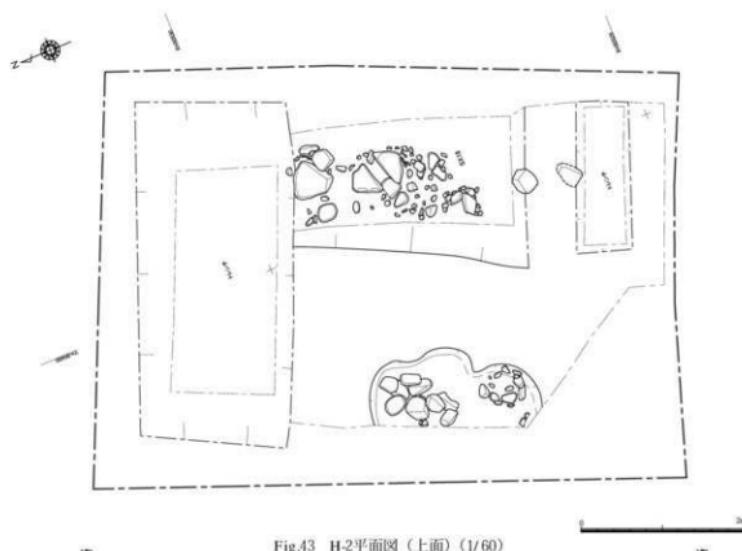


Fig.43 H-2平面図(上面)(1/60)

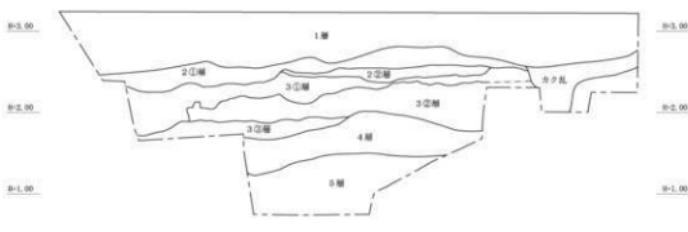


Fig.44 H-2東壁土層図(1/60)

H-2(北)

- 1層：カク乱
- 2①層：黒褐色土
- 2②層：黒褐色～暗褐色砂質土
- 3①層：Hue7.5YR 褐色 4/3
細砂。しまりあり。赤褐色土ブロック状に混じる。
- 3②層：赤褐色土
- 3③層：土質は3①層とほぼ同じだが、砂質が強く、礫が少ない。
- 4層：Hue7.5YR 褐色 5/6
細砂。しまりあり。赤褐色土ブロック状に混じる。
- 5層：Hue7.5 褐色 4/4
細砂。2次堆積砂？赤褐色土わずかに含む。

(1) S-2 (Fig.47)

S-2では5層上面でP09とP10の調査をした後、5層の掘削を行った。5層は土質が比較的そろっており、よく擾拌されたことを示している。5層からは多くの鉄滓が出土し、炭化物や直径が3cm以下の赤褐色土の粒の混入も多く確認できた。鉄滓は鍛治滓の小片が多く、粒状のものから15cmを超える大型の鉄滓が見つかった。陶器は中世～近世初頭のものが少量、石製品としては石鍤が出土している。石鍤は築城以前の生業を表す遺物として注目される。5層の下層の6層は、若干色調が薄く、7層とした地山の黄褐色～黄灰色細砂が不均一にブロック状に混じる。6層は鉄滓の出土や赤褐色土の混入はない。

地山面では、6層を埋土としたSK12・SK13の2基の土坑を検出した。検出高は標高1.0m以下であり、湧水が多くみられた。土坑からは土器や陶器細片が数点出土した。

(2) S-3・S-4・S-5、T-2～T-7、H-2 (Fig.48～51, 53)

いずれのグリッドも、一部を深掘りする形で下層の調査を行った。S-2でみられた5層と6層を区分できたのはS-3、T-2、T-3であった。S区とT区では下層の包含層が確認できたが、二の門堀に最も近いH-1ではS区の5層と6層にあたる層ではなく、地山の2次堆積砂が確認された。水流の影響を受けていたためであろう。

S-3はSK07下層の位置から比較的まとまって鉄滓が出土した。T-2ではS区の5層と6層を確認することができた。遺物として輸入陶磁の白磁や青磁が少数出土した。遺構の可能性もあったが、十分な調査が行えなかった。

(3) H-1 (Fig.52)

地山の2次堆積砂の5層上面でSK19を検出した。層序は2層に分かれており、①層は植物遺体（コモ）と黒色砂が互層で堆積しており、木製品や加工木の小片が出土した。SK19は最終的には幅が3mを超えることが分かり、自然地形のくぼ地の可能性もある。

参考文献（※報告書全体）

- ・家田淳一・川内野啓子 2012 『古伊万里の文様集成』 九州陶磁文化館
- ・宇治章・藤井伸幸 1994 『よみがえる江戸の華一くらしなのかのやきものー』 九州陶磁文化館
- ・江戸遺跡研究会 2001 『図説 江戸考古学研究辞典』 柏書房
- ・小川望 2008 『焼塙壱と近世の考古学』 同成社
- ・唐津市教育委員会 2018 『唐津の明治維新と近代化』
- ・九州近世陶磁学会事務局 2000 『九州陶磁の編年』 九州近世陶磁学会
- ・坂井清春 2013 『唐津城跡本丸I』 唐津市教育委員会
- ・永井久美男 1997 『近世の出土銭I』 兵庫県埋蔵銭調査会
- ・永井久美男 1998 『近世の出土銭II』 兵庫県埋蔵銭調査会
- ・藤木聰 2013 『発掘された火起こしの歴史と文化』『宮崎県文化講座研究紀要 40』
- ・宮崎博司 2018 『絵図からみた唐津城下町の変遷』
- 『公益財團法人鍋島報效会 研究報告書 第8号』 公益財團法人鍋島報效会
- ・山本文子・徳永貞紹 2012 『將軍家献上の鍋島・平戸・唐津』 九州陶磁文化館
- ・山田洋 2007 『庄屋文書にみる唐津城築城年代の一考察』『末廣国』172 松浦史談会



Fig.45 調査区平面図（下層）(1/300)

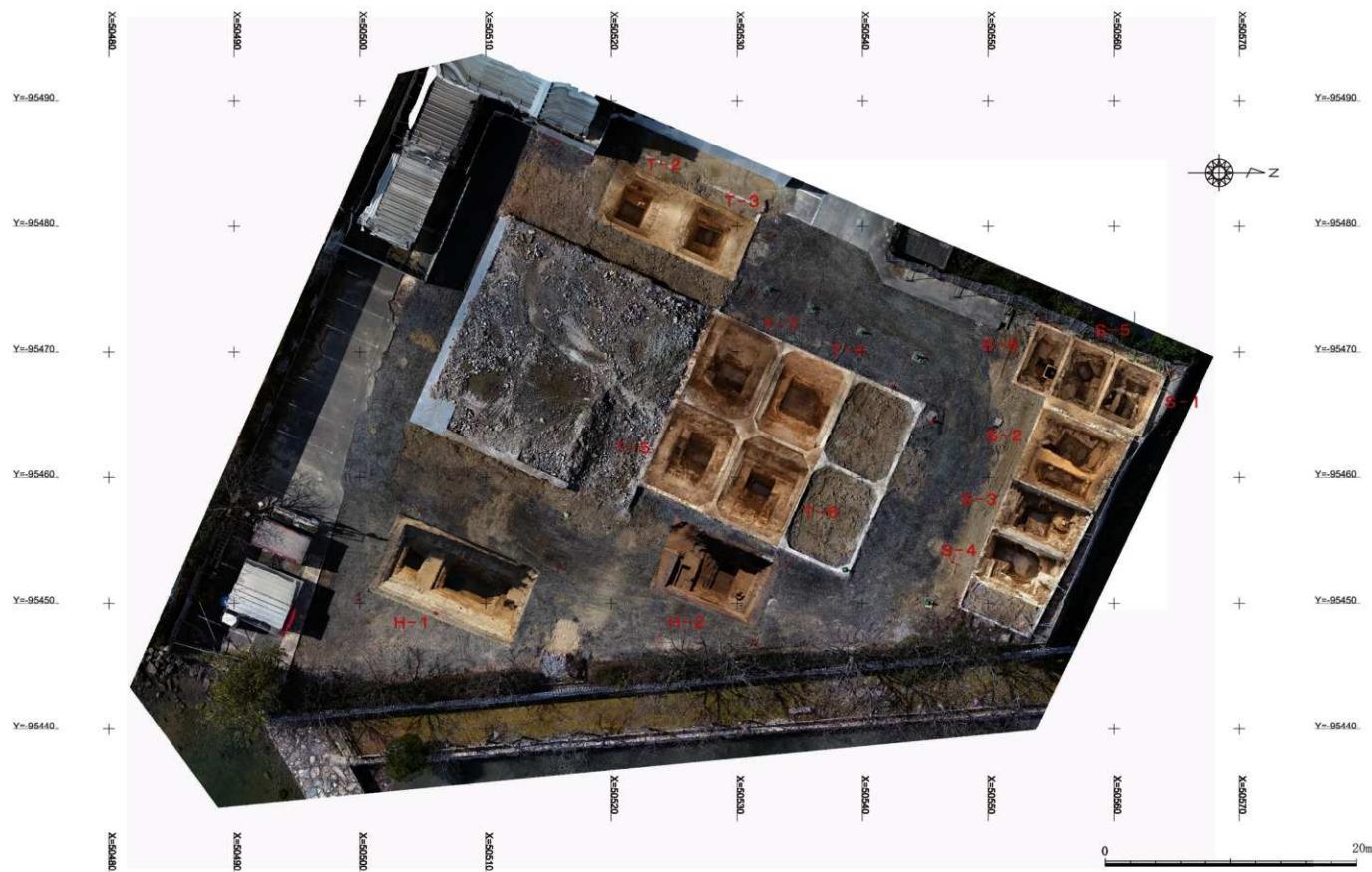


Fig.46 調査区平面オルソ図（下層）(1/300)

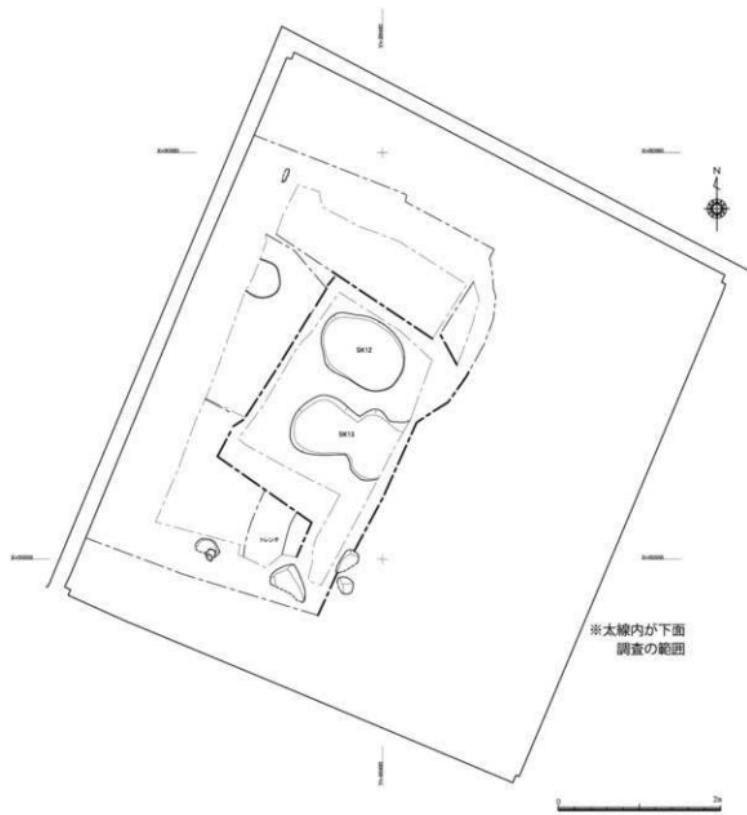


Fig.47 S-2平面図（下面）(1/60)

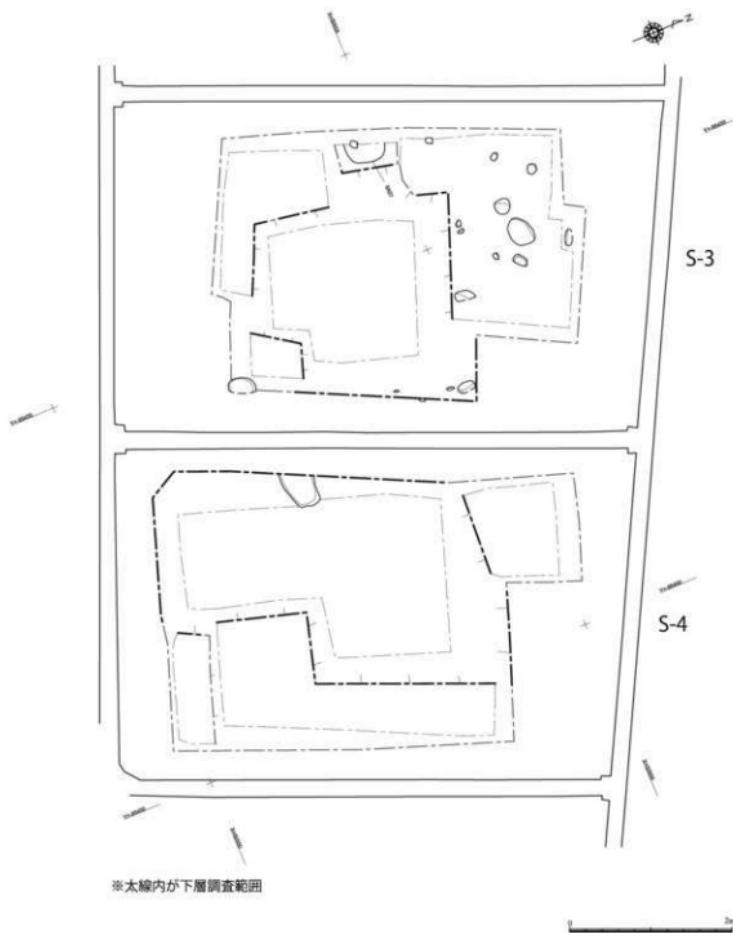


Fig.48 S-3・4平面図（下層）(1/60)

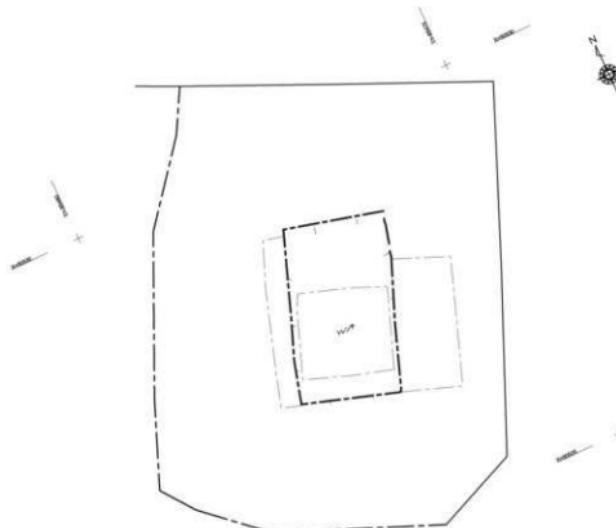
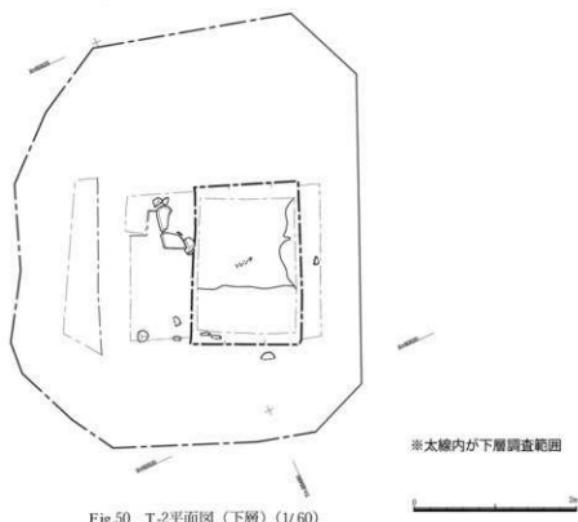


Fig.49 T-3平面図(下層)(1/60)



※太線内が下層調査範囲

Fig.50 T-2平面図(下層)(1/60)

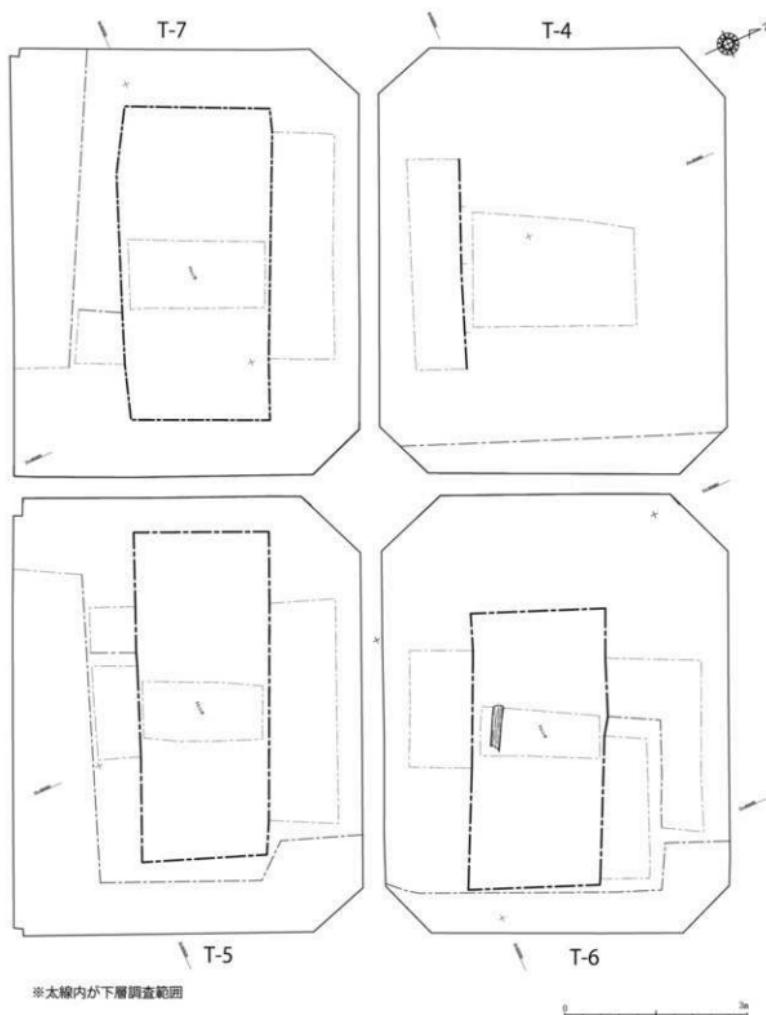


Fig.51 T-4・5・6・7平面図(下層)(1/80)

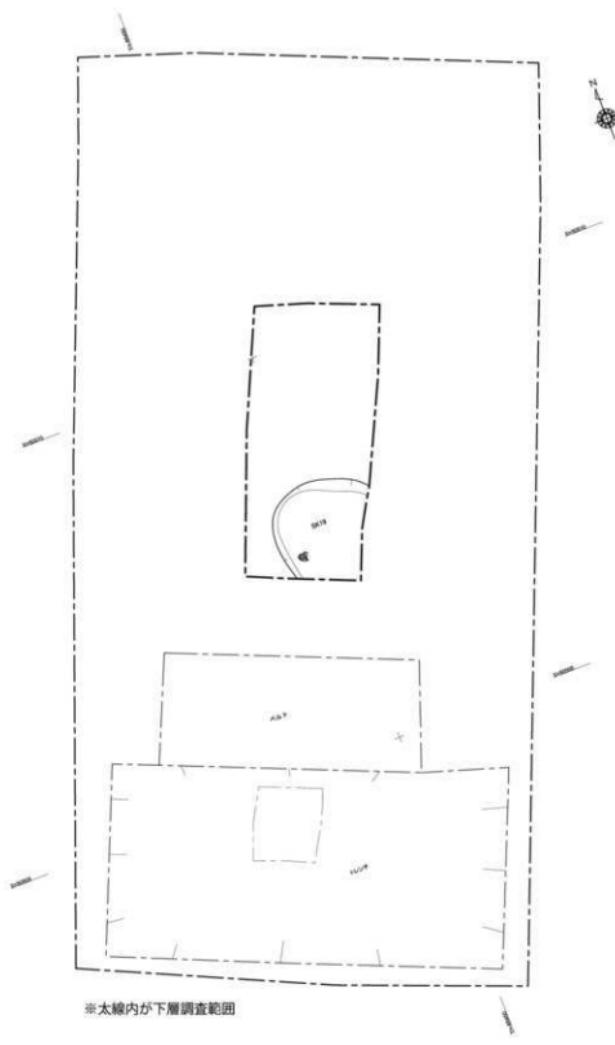


Fig.52 H-1平面図(下面)(1/60)

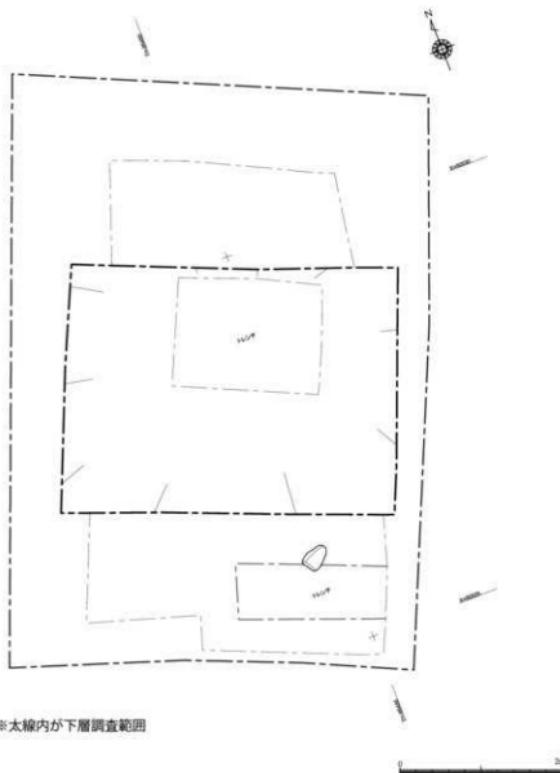


Fig.53 H-2平面図(下層)(1/60)

第IV章 遺物

第1節 陶磁器・土器

(1) 陶器

1～19は陶器碗で、1は灰白色の胎土に透明釉をかけたもの。豊付のみ釉剥ぎ。2は腰が張る浅手の碗。見込み蛇の目釉剥ぎ。3は浅黄色の胎土に透明釉をかけたもの。豊付のみ釉剥ぎ。4は3と同形態の碗であるが、高台に違いがある。5は端反形の小振りの碗。豊付のみ釉剥ぎ。体部に緑銅色の釉をかけ流す。6は体部中位にくぼみがある。釉の発色が良くない。7はつくりが粗く、浅黄色の胎土に透明釉をかける。高台は低く、切り込みを入れる。茶器か。8は黄橙色の胎土に透明釉をかける。9は高台から口縁部にかけて直線的に開く。10はつくりが非常に粗く、胎土に多くの砂粒を混入する。体部に大きく抉りを入れ、高台に切り込みを2か所入れる。豊付を含めほぼ全面に釉をかける。茶器か。11は杉形碗。灰色の胎土に灰緑色の釉をかける。12は体部に大きな凹みあり。内外面に白化粧土を刷毛塗りする。13は内外面に白化粧土を刷毛塗りする。豊付のみ釉剥ぎ。14は灰色の胎土に灰緑色の釉をかける。体部に白土で雲鶴文、口縁部に團線文を象嵌する。15は筒形碗。内外面に白化粧土を刷毛塗りするが、発色が悪い。16は赤褐色の胎土に黒褐色の釉をかけ、内面に白化粧土を刷毛塗りする。豊付に砂が付着する。17は杉形碗。体部下半に2カ所削り込みを入れる。口縁部内外面、見込み付近に白化粧土を塗る。豊付に砂が付着する。18は天目碗。19は杉形碗。灰白色のち密な胎土に灰白色の釉をかける。高台から体部下端にかけて露胎。

20～33は陶器皿。20は灰白色の胎土に透明釉をかける。21は黒褐色の呉須を象嵌した二重團線と繩文を巡らす。22の口縁部は棱花となす。灰白色的胎土に透明釉をかける。23は黒褐色の呉須を象嵌した團線、桜花文を巡らす。24と25はほぼ同じ器形で、24は白土を盛り上げて鶴を描き、浅く彫り込んで鉄絵で草木を描く。25は見込みに呉須で梅花や松葉を描く。26は見込みに呉須で草花を描く。27は粗雑なつくりの灯明皿。赤褐色の胎土に鉄釉をかける。28は内面と外面の上半部を中心に白化粧土を施し、緑彩で松を描く。29～30は大皿。29は見込みから体部にかけてひずみがある。見込みに呉須で文様を描くが、発色が悪く内容不明。30は高台が高く、外に張り出す。体部内面に呉須で文様を描く。31は内面に白化粧土を波状に刷毛塗りし、見込みを蛇の目釉剥ぎする。32は灯明皿とした。外面全体にヘラ削りを施す。口唇部にタール状のものが付着する。33は灯明皿。受皿がつくもの。34と35は小片であるが、志野の向付か。36は磁灶窯系の黄釉盤。

37～39、41は鉢。37は灰色のち密な胎土に黒褐色の釉をかける。38は深手の鉢で、体部に呉須で梅花を描く。39は内面に白化粧土を刷毛塗りし、見込みを蛇の目釉剥ぎする。41は体部外面上半と内面下半に白化粧土を刷毛塗りする。40は大型の皿。胎土目が5カ所残る。外面は体部下半まで露胎。42～50は擂鉢。42～45は備前焼系の擂鉢。42は片口がつく。43は小振りのもので、口縁部の屈曲が緩やか。44と45は口縁部外面の下端の肥厚が大きい。46と47は小型の擂鉢で底部糸切り。46は口縁端部が内側に突出する。47は口縁部を玉縁状につくる。48は口縁部が外方に肥厚し、低い高台がつく。49は口縁部が外反し、片口がつく。50は全体の3/4が残る。口縁部だけに鉄釉をかけ、口縁部は内外に屈曲しながら立ち上がる。底部は糸切り。

51～54は瓶。51は体部中位までヘラ削りを施す。肩部付近に鉄絵で筆文様を描く。52は体部下半に白化粧土を刷毛塗りする。53と54は全体の4/5が残る。53は明赤褐色の胎土に、口縁部から頸部にかけて

鉄軸をかけ、肩部以下は白化粧土を塗り、透明釉をかける。鉄絵で竹等の文様を描く。松?は緑彩か。豊付のみ釉剥ぎ。54も口縁部から頸部にかけて鉄軸をかけ、肩部以下は白化粧土を塗り、透明釉をかけるが、53と比して質が悪い。鉄絵で菊等の草花と笹の葉を描く。豊付のみ釉剥ぎ。55~57は土瓶。55は底面が打ち欠かれている他は完形。体部は偏球形であり、中位以上に緑色の釉を厚くかけ、下半以下は露胎。56はほぼ完形。底部と体部の境界で強く屈曲し、反り気味に立ち上がる。底部は露胎でヘラ削りを施す。体部は細沈線を巡らす。57は体部上半に細沈線を巡らす。鉄軸をかけるが、発色が悪い。58は完形の火入。体部上半に銅緑色の釉をかけるが、内面は口縁部を中心に釉が剥離する。体部下半は露胎であり、丁寧にヘラミガキが施される。59は水注の体部から底部か。

60~65は蓋。60と61は土瓶の蓋。60は白化粧土をぬり、透明釉をかけ、鉄絵で文様を描く。61は完形品。白化粧土をぬり、透明釉をかけ、鉄絵で菊花?の文様を描く。瓶54と釉調や文様構成が同じである。62と63は小壺や急須の蓋か。62は灰白色の胎土に黒褐色の釉をかける。63は完形品。鉄軸をかける。64は行平鍋の蓋か。体部に沈線を巡らし、灰白色的胎土に灰オリーブ色の釉をかける。65は小壺の蓋か。淡黄色の胎土に透明釉をかける。

66と67は無釉焼締め陶器であり、いわゆる朱泥陶器。66は急須もしくは小型の壺か。外面は非常に丁寧に仕上げる。67は極小型の鉢であり、擂鉢か。68は植木鉢。体部が直線的に立ち上がり、口縁部が外方に大きく屈曲する。69は不明品。直径3mm程の小孔が上下方向に貫通する。調整は粗く、窯道具か。70は筆立て。竹を模してつくられる。71は無釉焼締め陶器の小型の徳利。肩部に沈線を巡らす。72は甕口縁部片。外面と口縁部内面に白化粧土を塗り、鉄絵で文様を描く。73は甕底部片。濃緑色の土灰釉をかけ、体部に叩き目が残る。74はSX02に据えられていた中型の壺。体部は膨らみをもち肩部に向けてややすぼまり、口縁部は直線的に上方に立ち上がる。

(2) 磁器

75~93は碗。75と76は龍泉窯系青磁。76は体部内面の文様は不鮮明で内容不明。77は粉青沙器。白化粧土を刷毛塗りする。78は朝鮮半島産の軟質白磁。見込みに砂目が5カ所確認できる。79と80は軍用食器。体部はほぼ直線的に立ち上がり、口縁端部がわずかに外反する。豊付のみ釉剥ぎ。80はやや小ぶりで、器形の特徴は79と同じ。旧帝国海軍の鎮桜錨の紋章が入る。81~94は染付。81は梅樹が描かれる。82は薄手のつくりで、口唇部内面のみ釉剥ぎ。83は小碗。唐草文が描かれる。84は草花が描かれる。85は腰が張り、梅樹と唐草が描かれる。86は外面に鷺と樹木、内面に七宝繫と鷺、柳が描かれる。87は見込みを蛇の目釉剥ぎし、外面に梅樹、團線が描かれる。88は唐草と草花?が描かれ、裏銘は大明成化年製。89は釉の発色が悪く、團線と網目文が描かれる。90は草花と樹木、團線が描かれる。91は高台が高く、逆さにした「丸に上がり藤」家紋に似た文様、連続した円文等が描かれる。見込みにも紅白の花が描かれる。92と93は染付青磁。92は朝顔形碗。内面に四方擗文、團線を描く。93は内面に四方擗文、團線、見込みに花?が描かれる。94と95は鉢で、蛇の目凹型高台。94は外面に唐草文、内面に樹木と建物を描く。95は白磁輪花。

96~105、107~110は皿。96は高麗青磁。底面に胎土目3カ所付着。97は粉青沙器。内外面に白化粧土で象嵌する。98と99は灰青沙器。98は見込みに目跡が4カ所残り、豊付のみ釉剥ぎ。99は豊付と見込みに目跡が5カ所ずつ残る。100は白磁皿。見込みを蛇の目釉剥ぎする。101は皿としたが蓋か。外面に草木、内面に團線、水?鳥?を描く。102はSK04で土瓶の蓋に転用されていたもの。内面に明黄褐色の染料で雷文、鶴、梅、紅葉、牡丹、竹、松の文様を描く。雷文には複数個所のズレがあり、銅板転写のズレであろうか。103は八角形の皿で、内面に型紙摺絵で草花、外面に唐草文を描く。104と105は白磁

紅皿。106は小杯。「歩兵〇四十八連隊 ○中〇」の字が判読できる。歩兵第48連隊は久留米を本拠とする連隊であり、その記念盃であろうか。107は外面に唐草文、内面に草花を描き、見込みにコンニャク印判五弁花文。108～110は大皿。108は外面に唐草文、内面に椿や草花を描く。109は内面に柳や松を描く。高台内にハリ支え4力所残る。110は平皿であり、焼成時に割れている。111は粉青沙器鉢。112は色絵鉢。113、115、116は小杯。113は白磁。115は内面に宮島醤油のマークと「謹」が判読できる。116は外面に草花を描く。114は鉢?であろうか。外面は青磁、内面は透明釉をかける。釉調が良い。117は八角形の鉢。内面に草花や鳥、山等を描く。118～121は仏壇具。草花や唐草文を描く。122は湯飲み。「株式会社大阪支店大」「化成、じた昔が恥ずかしの」が判読できる。123と124は香炉。123は青磁、124は口唇部と外面に波を描く。125～128は蓋。125は松竹梅を描く。126は内外面に草花、四方櫻文を描く。127は烏犀園の薬容器の蓋。128は「フタヲト クボミ」が判読できる。129は象底青磁梅瓶。130は水滴。注口や装飾がつく。

(3) 土器・土製品

131～142と144は土師器皿である。131～142は底部に糸切り痕が残る。132は口縁部外面が変色する。134、139は口縁部に、137は口縁部と内器面にススが付着する。灯明皿か。139は器壁が非常に薄く、口縁部はシャープに仕上げる。143は环。胴部から底部にかけては布目痕が残っている。144は底部から直線的に立ち上がる。底部は中心が薄く、内面に同心円状の調整痕がみられる。底部外面は糸切痕が残っておらず、直線的なナデ痕がわずかにみられる。

焼塩壺は今回の調査で、身が15点、蓋が14点の出土を確認し、市内の今までの調査で最も多く出土している。145～159は焼塩壺の身。145～147は輪積み成形で、ずん胴形をしている。145は内器面に輪積み成形の痕跡が残るが、外器面は丁寧にナデ調整が施される。外器面の刻印は「天下一堺ミなど藤左衛門」か。146は内器面に輪積み成形の痕跡が残っており、外器面は表面が粗くなっている。147は内器面に輪積み成形の痕跡が残っており、外器面はナデ調整が施される。148～159は板作り成形で、コップ型を呈す。148～154は内器面に布目痕がみられ、外器面は丁寧にナデ調整が施される。149は外器面に自然釉がみられる。150は底部には粘土帯と粘土塊を挿入する。151は外器面が使用時に熱を帯びたためか、表面に赤色や青色の部分がみられる。底部に粘土塊のみが挿入される。外器面に「泉州麻生」の刻印。152は底部に粘土塊のみが挿入される。153は底部に粘土塊のみが挿入される。外器面に「泉州麻生」の刻印。154は底部の粘土塊は残っていない。外器面に「泉州麻生」の刻印。155は内器面に布目痕はみられず、外器面と同じくナデ調整が施される。外器面の刻印は「泉州麻生」か。156は底部に粘土塊を挿入した後、ナデ調整が施されている。外器面に「難波淨因」の刻印。157は内器面に布目痕がみられ、外器面はナデ調整が施される。底部は粘土塊を挿入した後、ナデ調整が施される。外器面に「難波淨因」の刻印。158は内器面に布目痕がみられ、外器面はナデ調整が施されている。底部は粘土塊を挿入した後、ナデ調整が丁寧に施される。外器面に「大上々」の刻印。159は内器面に布目痕がみられ、外器面はナデ調整が施される。底部は粘土塊を挿入した後、ナデ調整が丁寧に施される。外器面に刻印の痕跡はみられるが不明瞭であった。

160～173は焼塩壺の蓋である。形状は身に対応するように逆凹形をしており、端部の長さに違いもみられる。内面に布目痕がみられ、型作り成形と思われる。163、164は、内面の布目痕に重なるように円形の文様がみられる。

174～176は焰焰。174～176は底部と胴部の境に5mm程度の段が付き、胴部は口縁部に向かってやや内傾気味に立ち上がる。外器面、内器面ともにススの付着が認められる。177は火鉢。胴部が内済気味に

立ち上がる。口縁上部から内器面脛部上方に向かって、斜め方向の穴を穿孔する。

178は瓦質土器風炉。3足。外面は丁寧にミガキを施し、内面はハケ目や指頭圧を残す。179～181は硬質瓦質土器。179は十能の把手部分。指頭圧が残る。180は蓋。火消し壺用か。181は目皿。182は鉢。器面が完全に剥離する。183～186は瓦質土器。183～185は防長系といわれるもの。183と184は足鍋。183は体部下半に煤が付着する。185は擂鉢。186は角火鉢。187～189は硬質瓦質土器。187は釜。外面は丁寧にミガキを施しており、石鍋に似る。内面には煤が付着する。188は火鉢。内外面にハケ目を施す。189は壺。火消し壺の可能性がある。190は須恵器壺。古代以前か。191は輪の羽口先端。外面は断面方形。192はレンガ。モルタルが付着する。

第2節 石製品・金属製品・瓦等

193と194は石塔。193は五輪塔の空風輪。194は宝篋印塔の笠部。赤褐色系の岩石製。195は砥石。196～199は有溝石鍤。滑石系の石材を用いる。200は火打石。青緑色のチャート製。藤木氏のご教授により、徳島県阿南市大田井産であることが判明した。201は土鍤。202は鍔を固定する切羽。203は永楽通宝、204～206は寛永通宝。

207はインク壺。「TAIYO No630」の銘あり。208は山田安民本舗（現ロート製薬）が1909（明治42）年に発売を開始した目薬の瓶。209は東京薬院のチーム水の瓶。

210～248は瓦。210～234は軒丸瓦。210～216は瓦当文様が「丸に三つ引両」。唐津市内では初出。家紋瓦か。計測値は縦と直線間、直線幅、直線間の値を $j \sim p$ として掲載している。210は瓦当面全体が残る。211と215はコビキBが確認できる。217～224は巴文が右巻き、珠文数が8。225は巴文が左巻き、珠文数が8。226～229は巴文が左巻き、珠文数が9。巴尾が長い。230は巴文が右巻き、珠文が10。231は巴文が左巻き、珠文が10。232は巴文が右巻き、珠文が11。233と234は巴文が左巻き、珠文が12。巴尾が長い。220、227はコビキBが確認できる。

235～246は軒平瓦。235～240と245は上向の三葉文。241と242は下向の三葉文。243と244と246は上向の五葉文。239と245は唐草の巻きが他と異なる。

247は丸瓦の完形品。248は鬼瓦の鱗部分。菊花のような刻印あり。

第3節 丁銀

249は近世の丁銀であり、T-2の4層から出土した。法量は長さ10.08cm、最大幅3.59cm、厚さは平均で0.73cm。当初、表面はFig.77のように錫で覆われており、極印を打った際の段差の一部がかろうじて確認できる程度であり、実測はその段階で行った。その後、長崎県埋蔵文化財センターにて分析及び、クリーニングを行った。詳細は後述する。重さはクリーニング作業前が168.246g、作業後が166.789gであった。クリーニング後の写真がFig.79である。拓本はクリーニング後のものであり、採拓は永井久美男氏にお願いした。極印は上下端に各1面（大黒像）、左が3面（全て寶・常是）、右が4面（寶・常是が2面、大黒像が1面）の合計9面である。元号がないことから慶長丁銀もしくは正徳享保丁銀である。

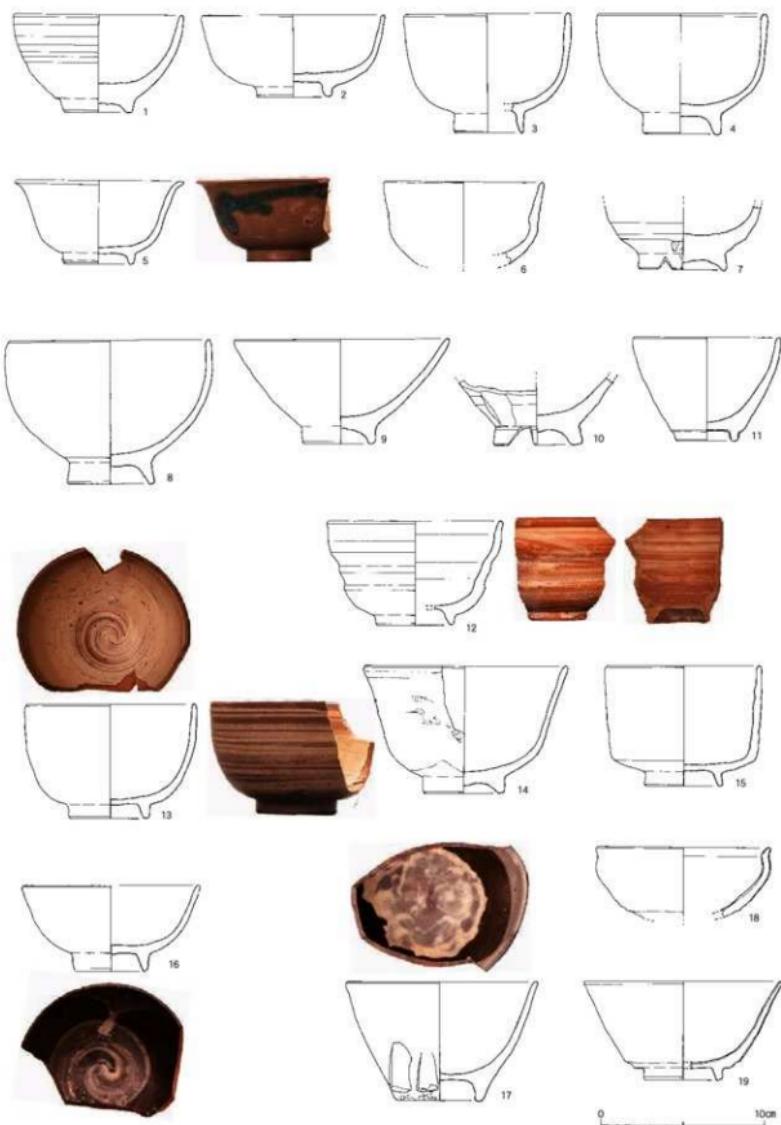


Fig.54 遺物実測図①(陶器)(1/3)

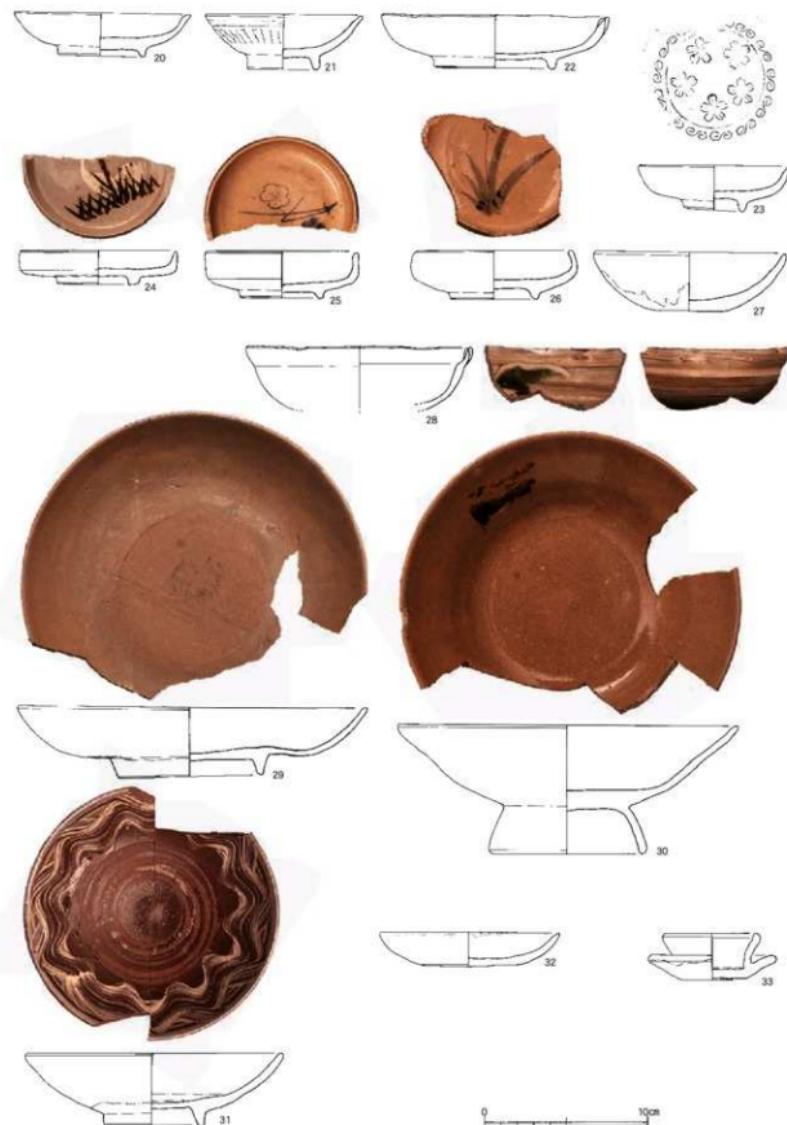


Fig.55 遺物実測図②(陶器)(1/3)

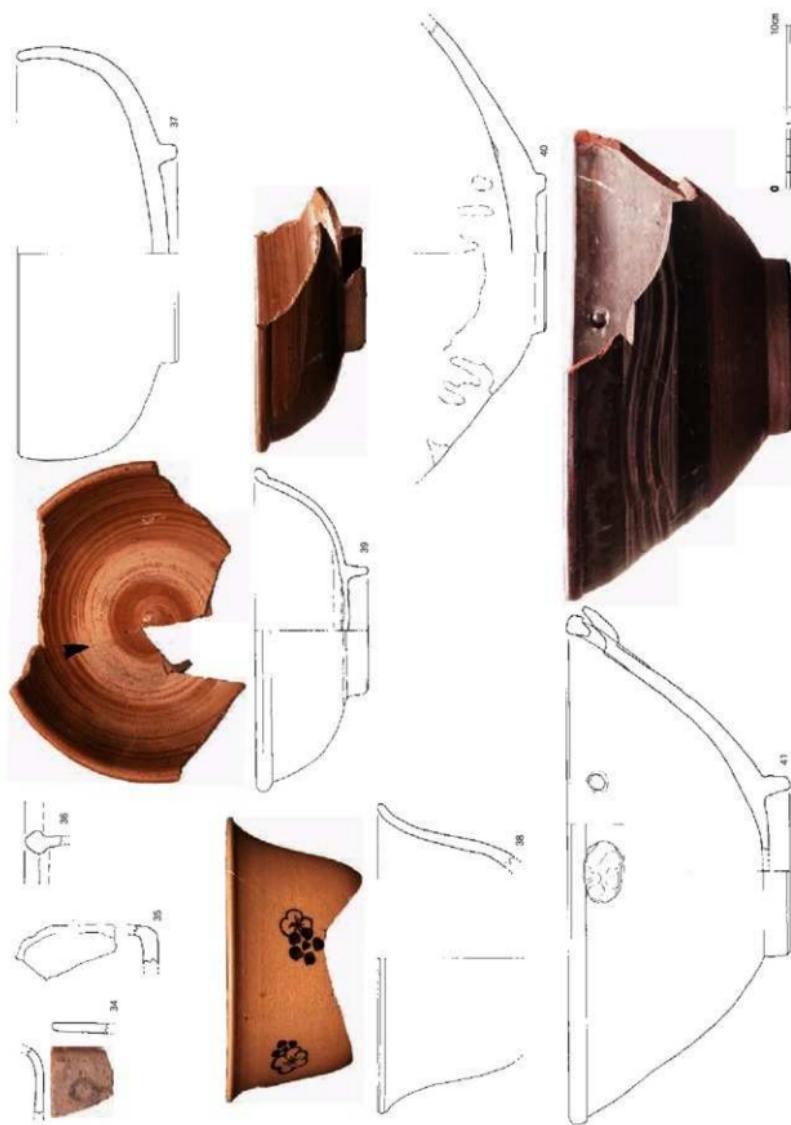


Fig.56 遺物実測図3 (陶器) (1/3)

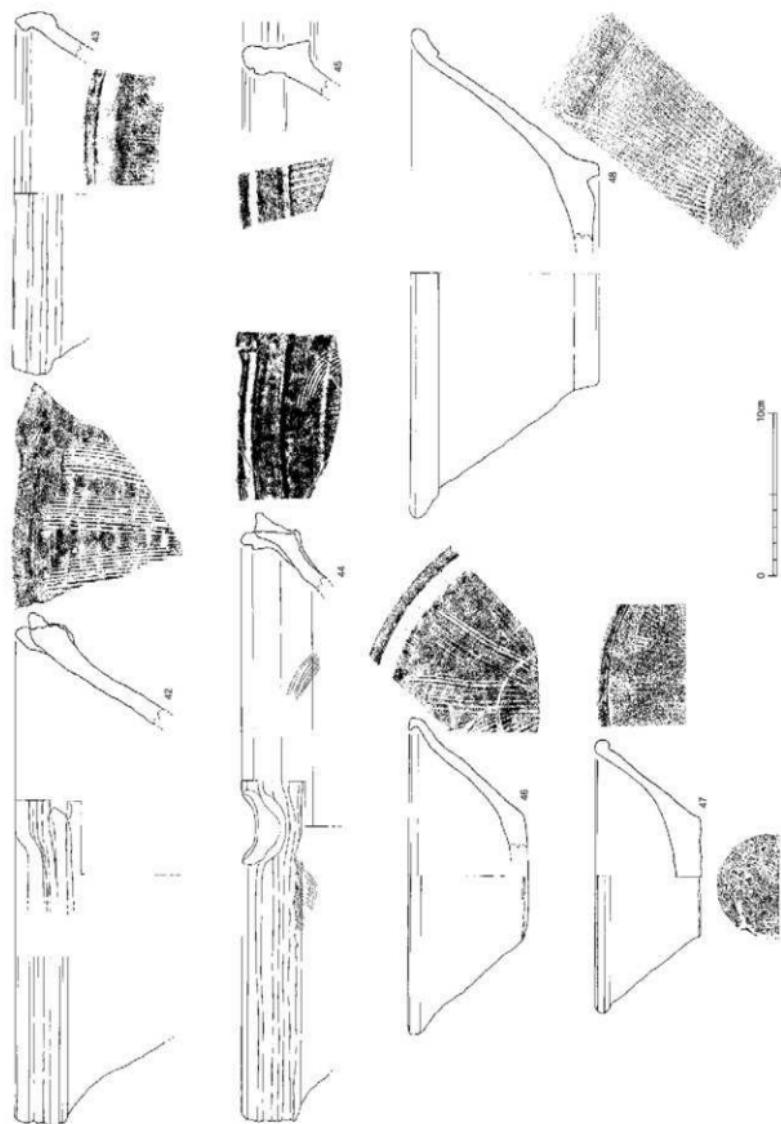


Fig.57 遺物実測図④(陶器) (1/3)

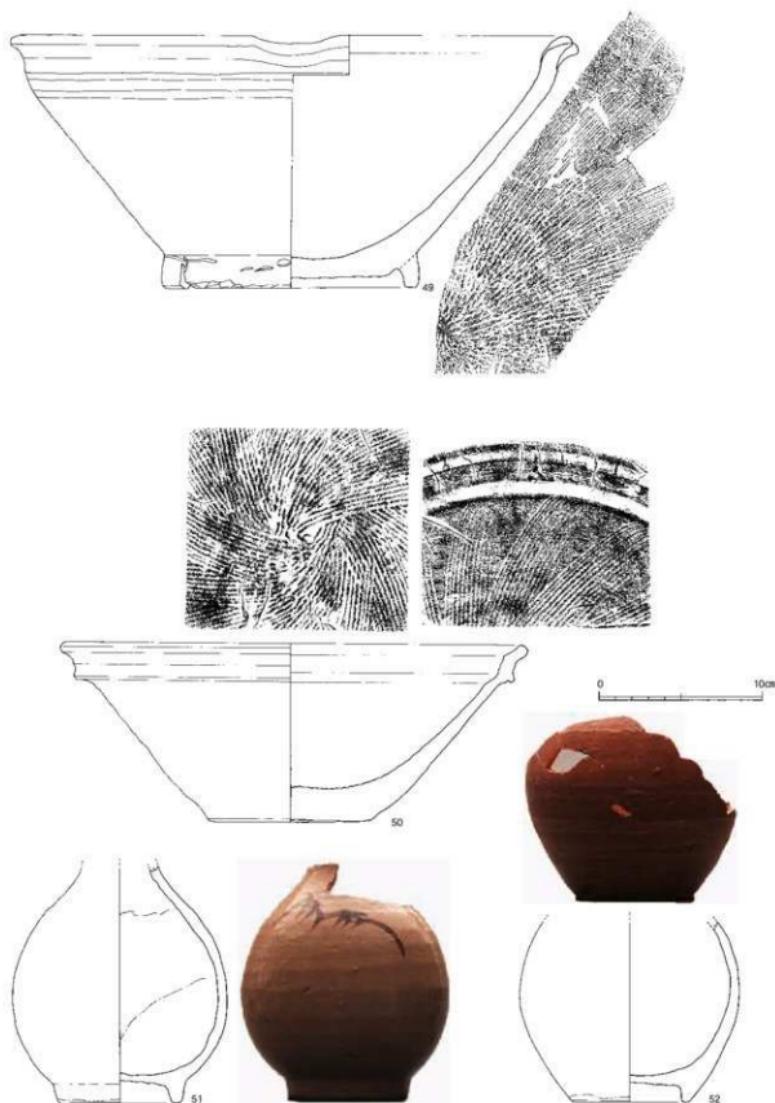


Fig.58 遺物実測図⑤(陶器)(1/3)



Fig.59 遺物実測図⑥（陶器）（1/3）



Fig.60 遺物実測図⑦（陶器）(1/3, 1/4)

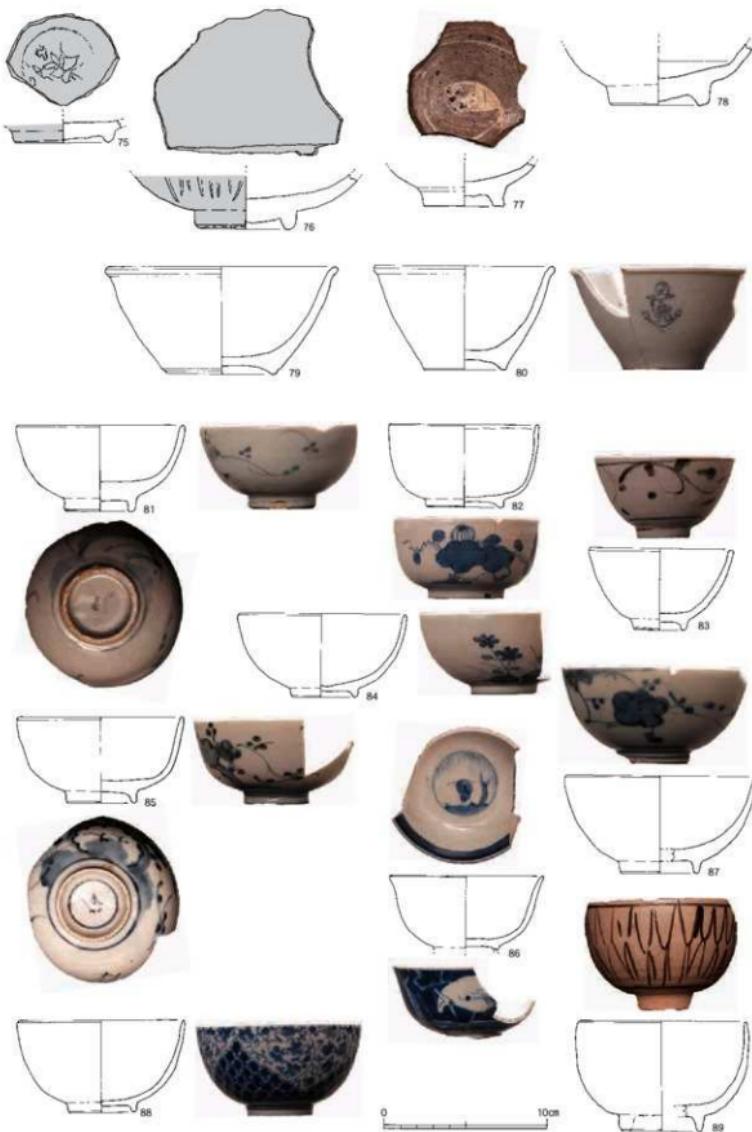


Fig.61 遺物実測図⑧（磁器）(1/3)



Fig.62 遺物実測図⑨（磁器）（1/3）

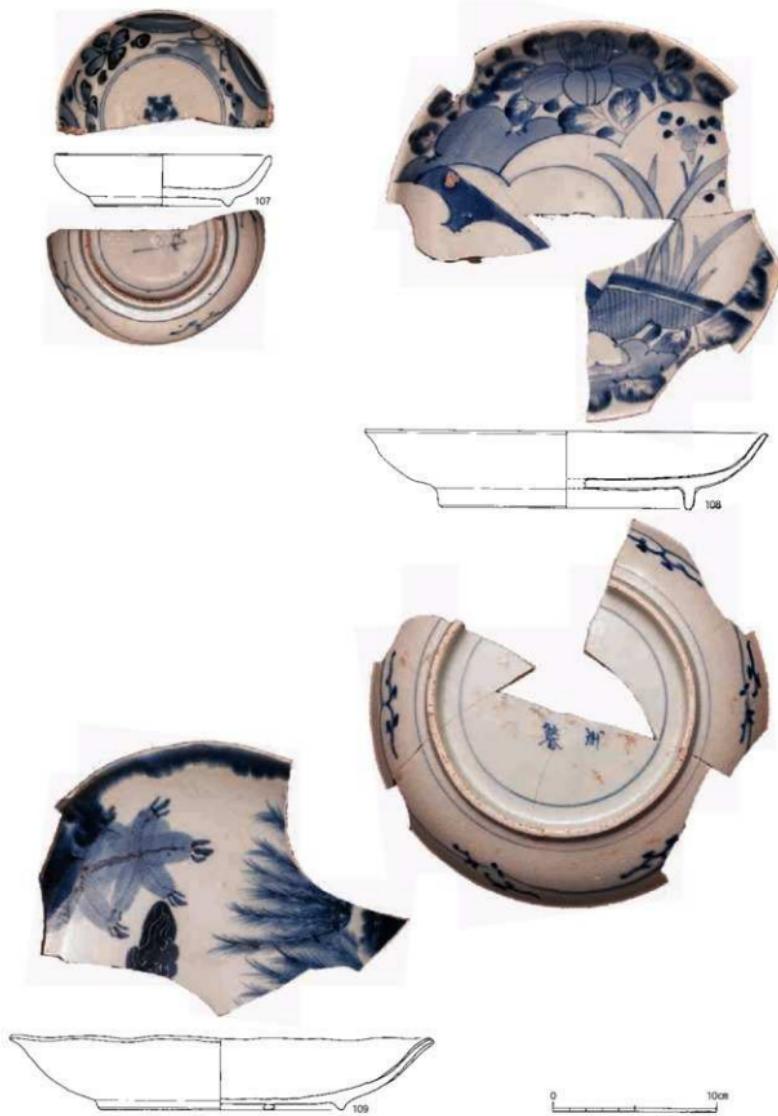


Fig.63 遺物実測図⑩（磁器）（1/3）



Fig.64 遺物実測図①（磁器）（1/3）



Fig.65 遺物実測図⑫（磁器）（1/3）

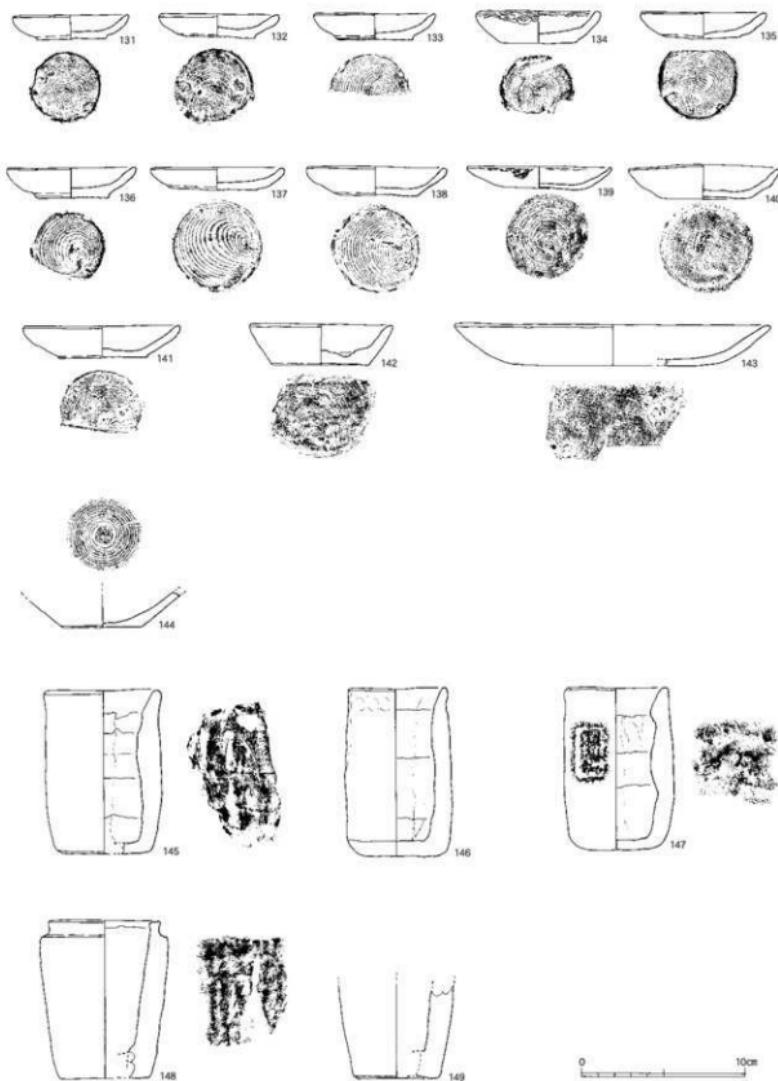


Fig.66 遺物実測図⑬（土器）(1/3)

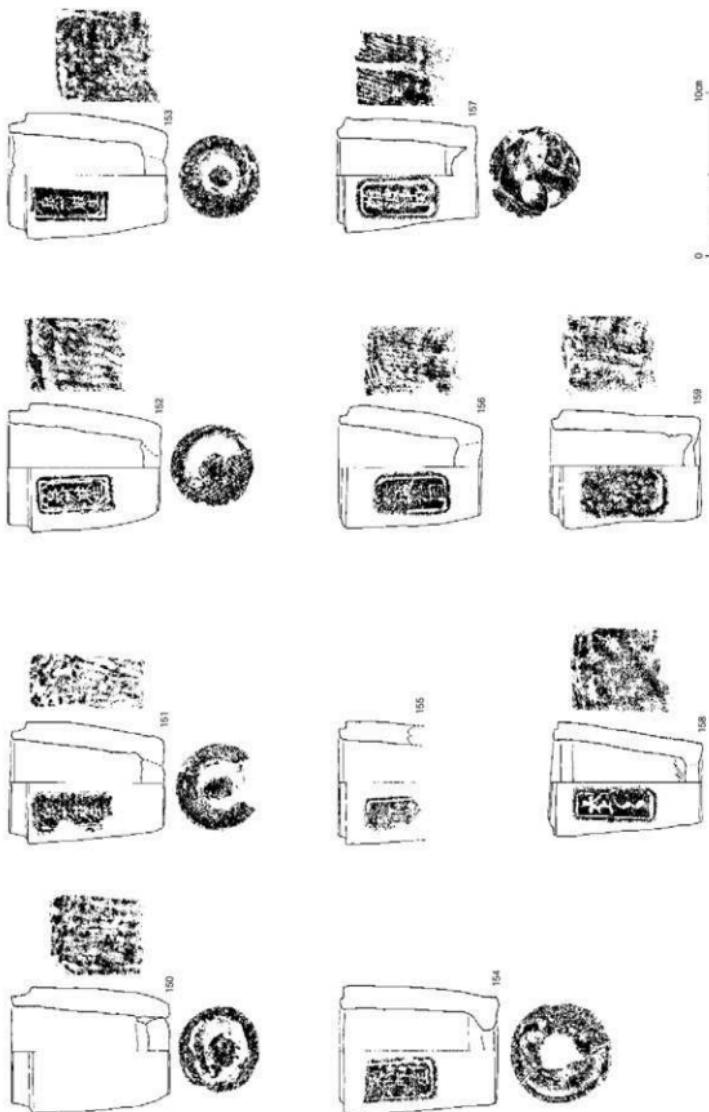


Fig. 67 遺物大形圖3 (土器) (1/3)

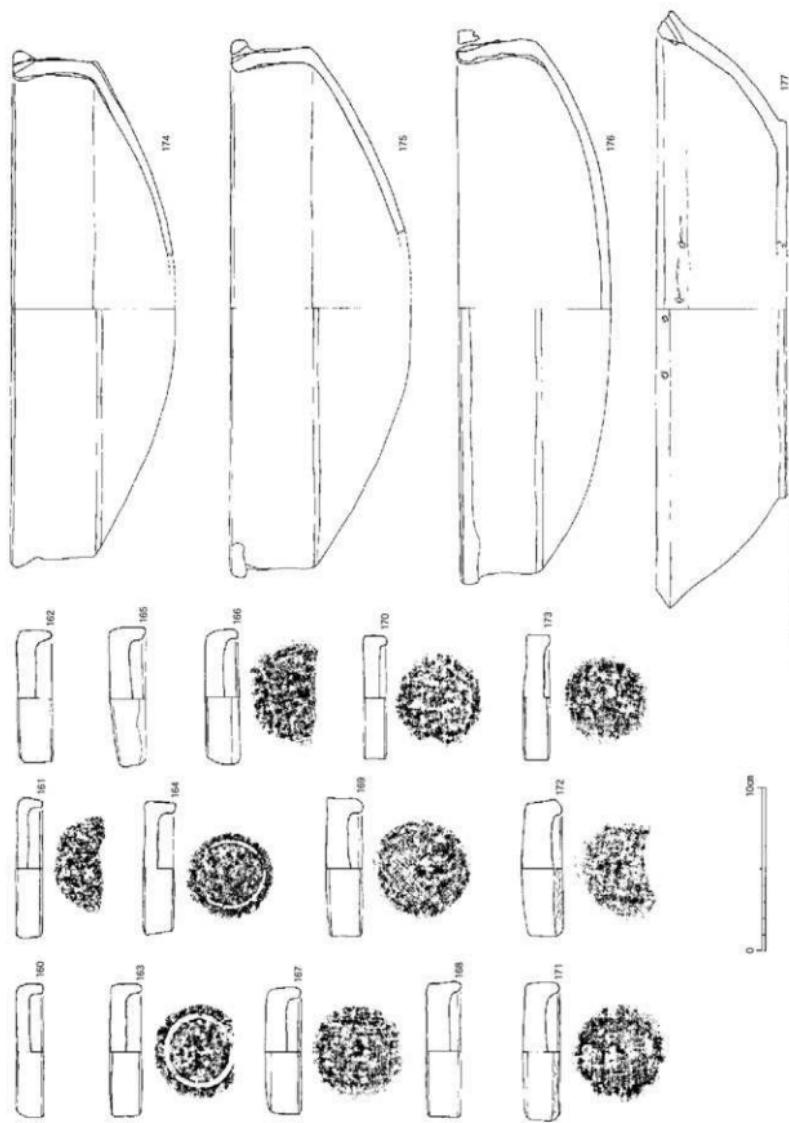


Fig.68 遺物実測図⑤(土器) (1/3)

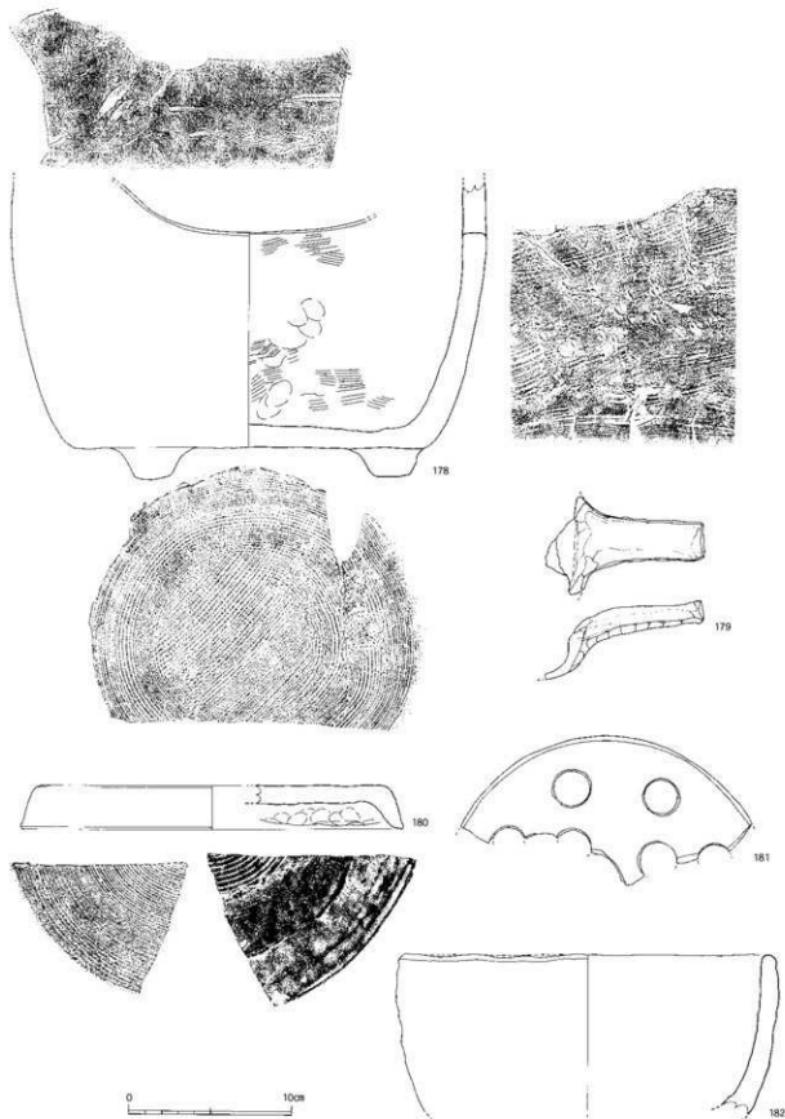


Fig.69 遺物実測図等(瓦質土器)(1/3)

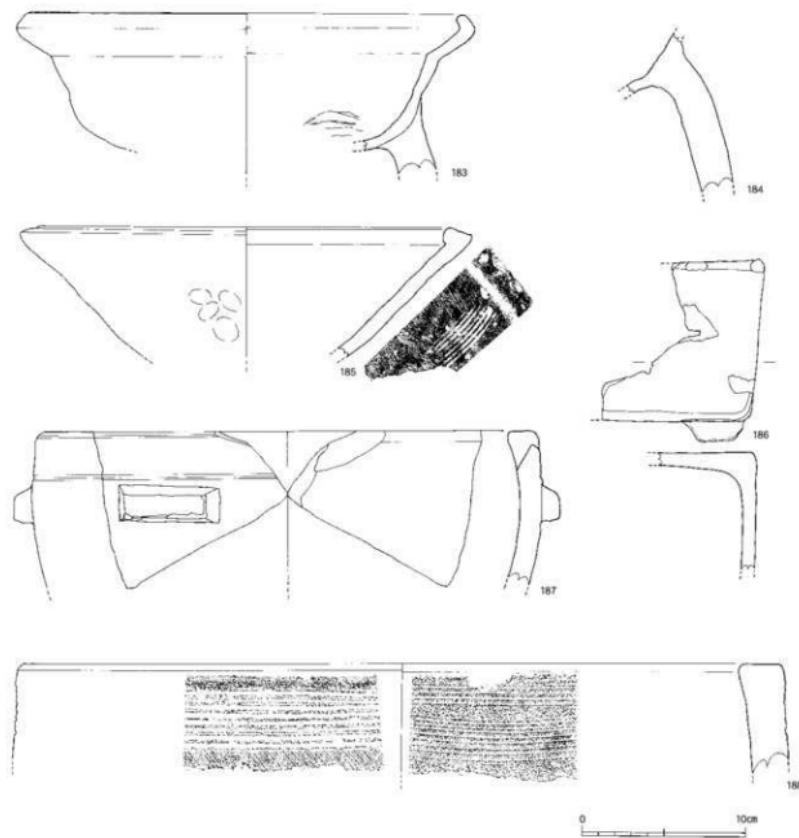


Fig.70 遺物実測図⑦（瓦質土器）(1/3)

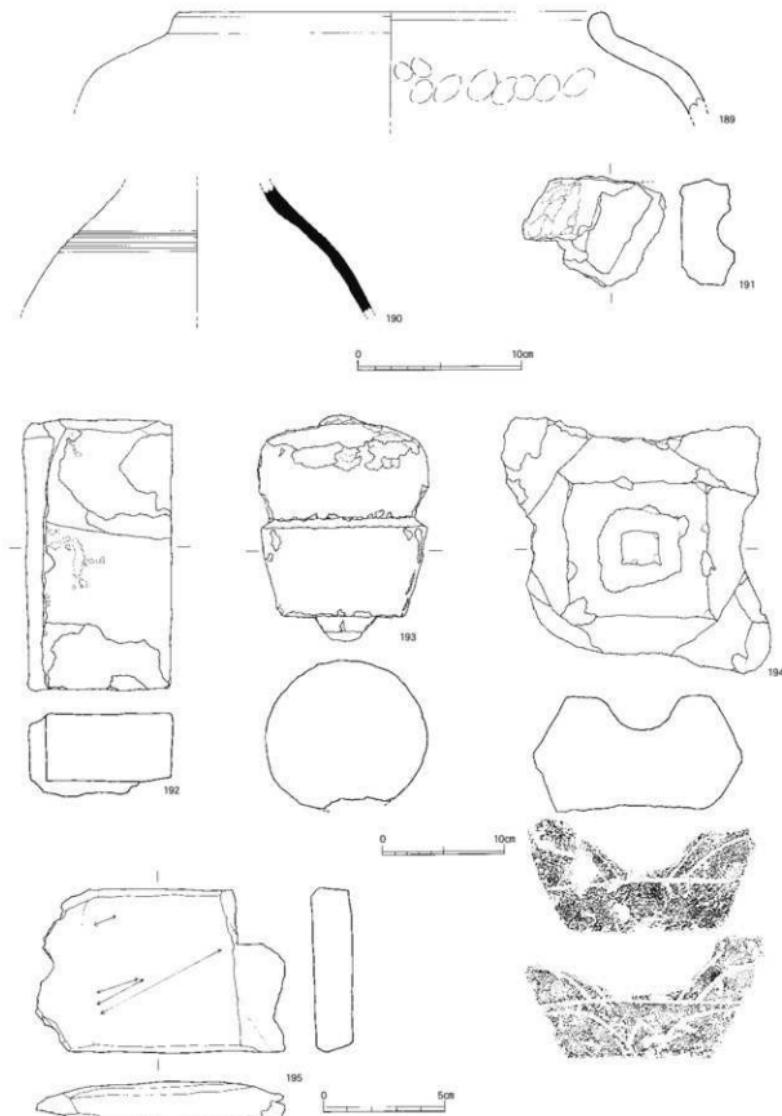


Fig. 71 遺物実測図⑧（須恵器・石製品他）(1/2, 1/3, 1/4)

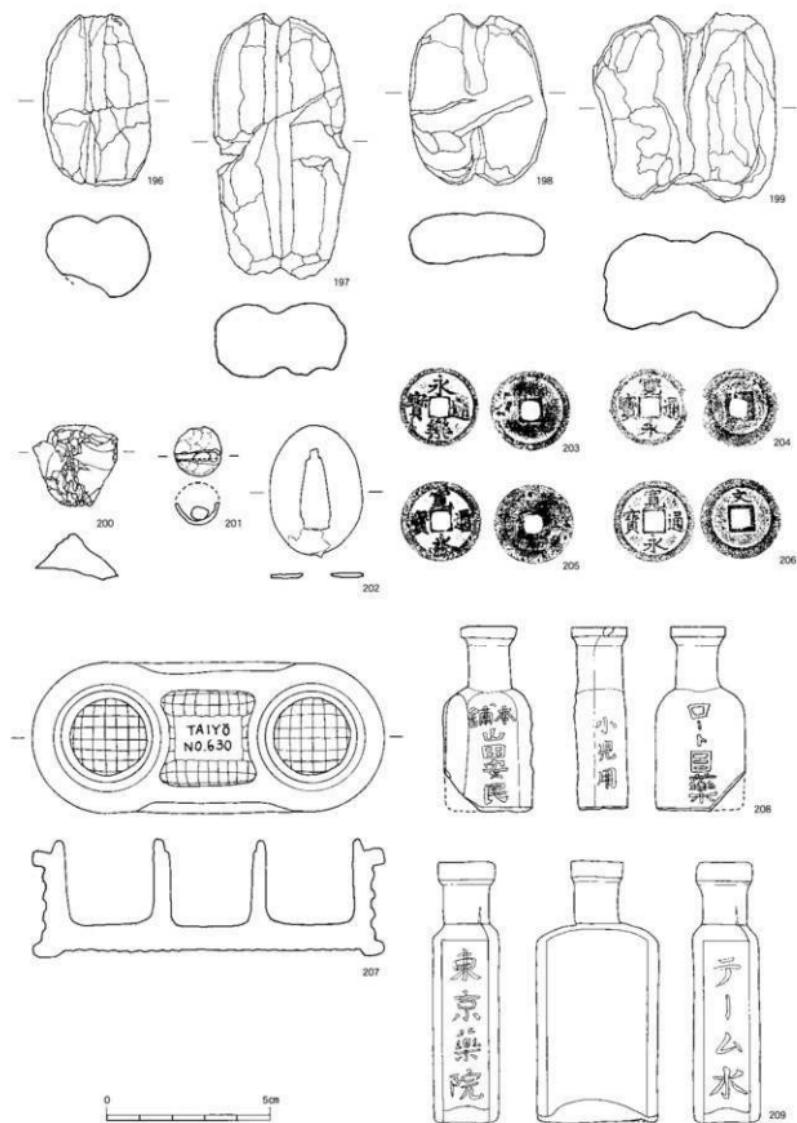


Fig.72 遺物実測図⑨（石製品・銅錢・ガラス製品）(1/2)

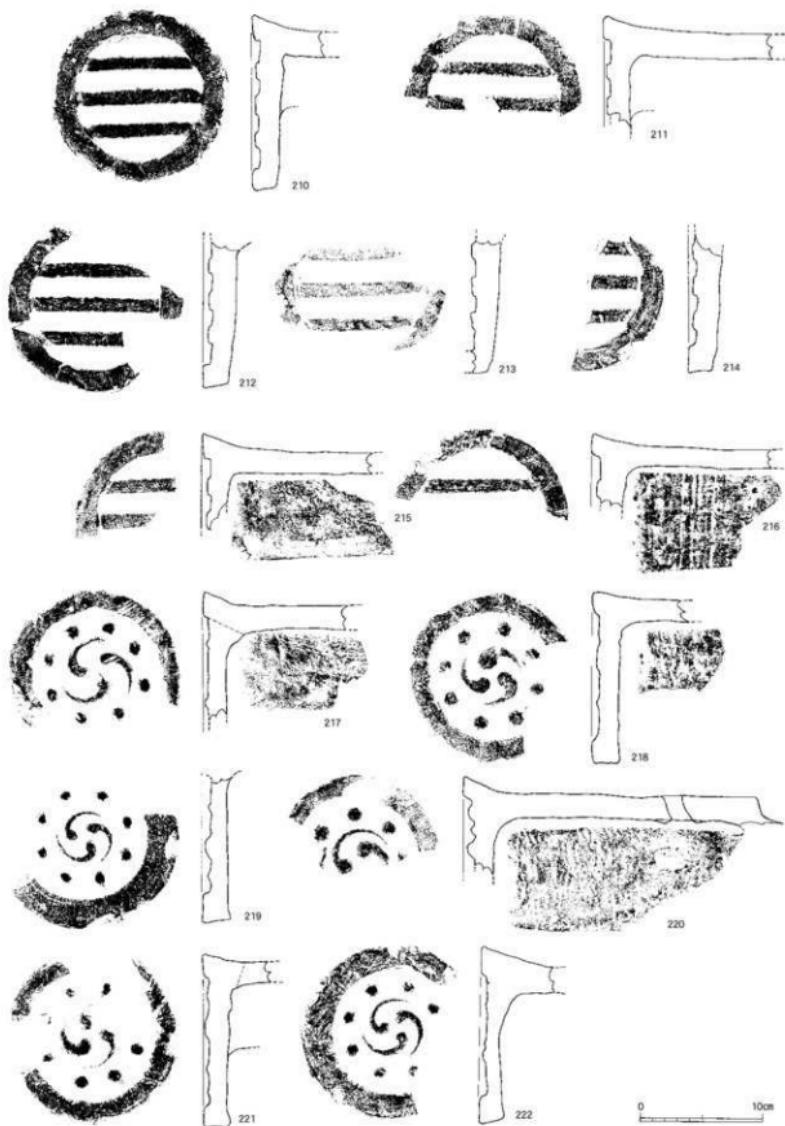


Fig.73 遺物実測図②(瓦) (1/4)

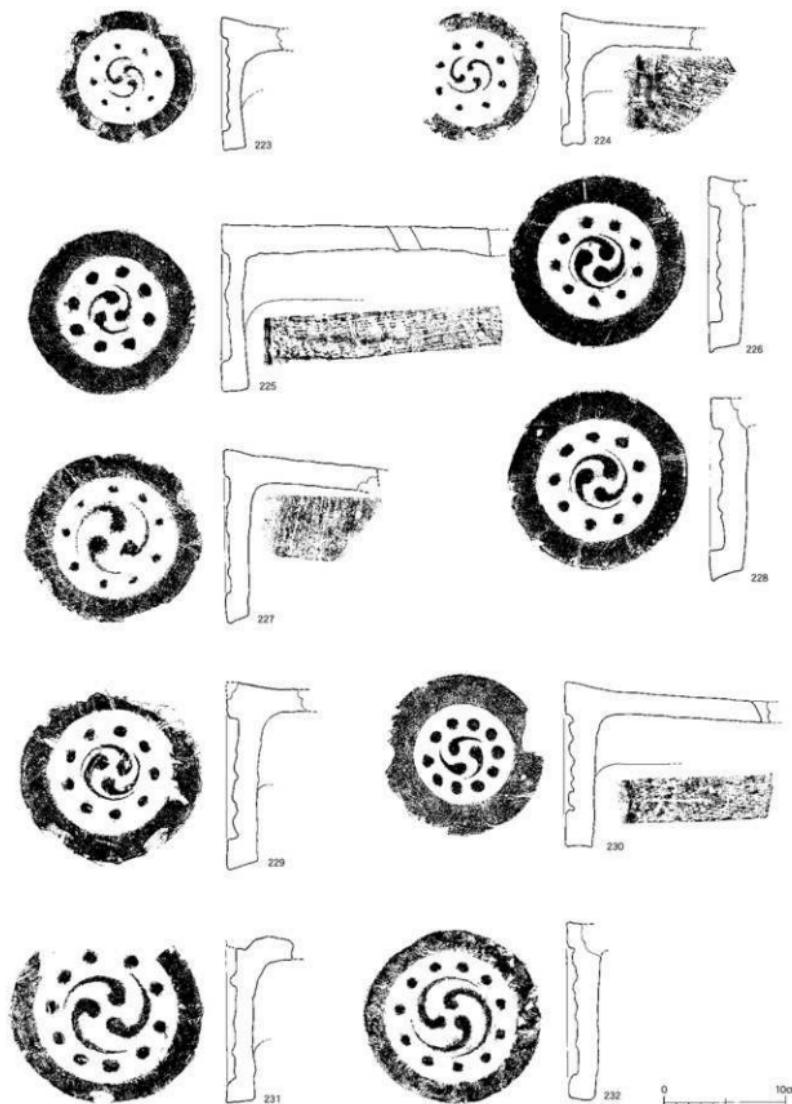


Fig.74 遺物実測図②(瓦)(1/4)

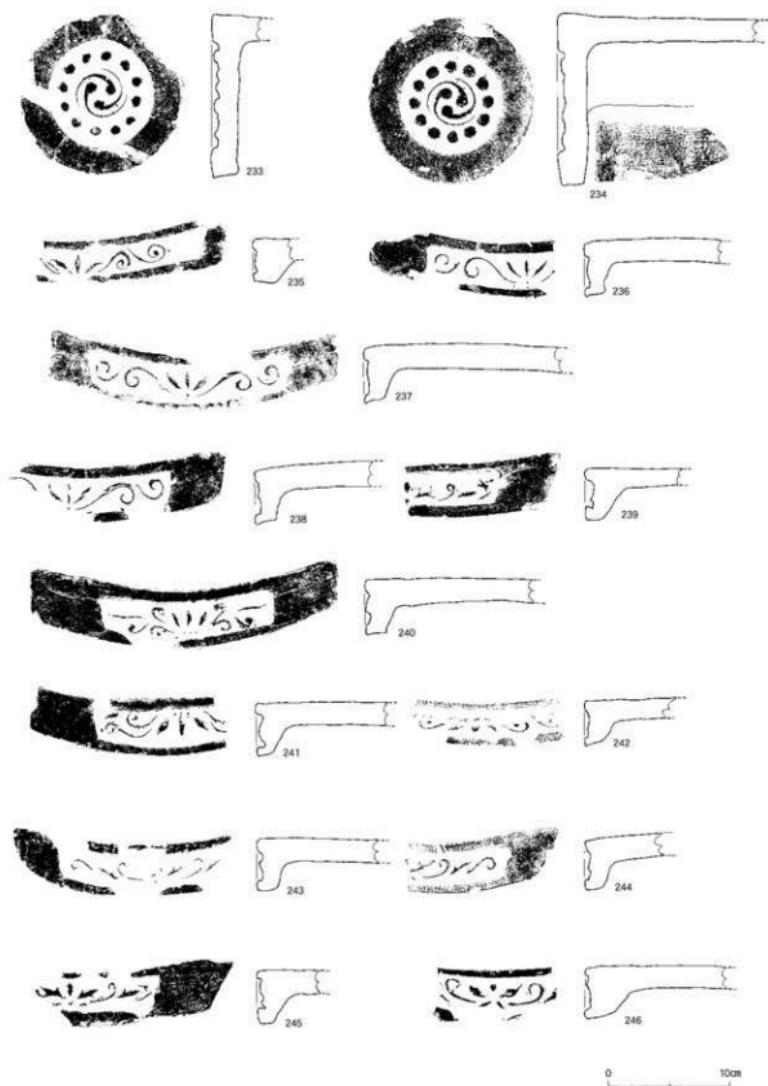
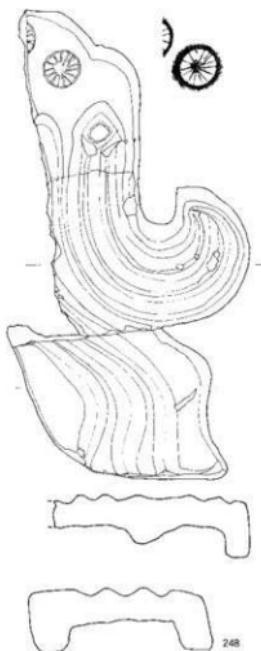
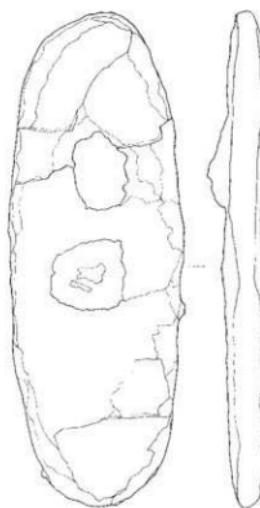


Fig.75 遺物実測図25(瓦)(1/4)



0 10cm



0 5cm

Fig.76 遺物実測図23(瓦・丁銀)(1/4, 1/1)



Fig.77 丁銀クリーニング前写真



Fig.78 丁銀透過X線写真



Fig.79 丁銀クリーニング後写真



Fig.80 分析の様子

	1回目	2回目	3回目	4回目	平均
Ti	0.39	0.00	0.00	0.00	0.10
Fe	1.60	0.13	0.45	0.93	0.78
Cu	23.37	28.94	39.47	19.84	27.91
Ag	73.38	69.11	58.65	78.05	69.80
W	0.06	0.40	0.29	0.14	0.22
Pb	0.88	1.13	0.94	0.79	0.94
Bi	0.34	0.29	0.20	0.25	0.27
計	100.02	100.00	100.00	100.00	100.00



Fig.81 丁銀成分比の簡易計測

遺構名	グリッド	出土遺物	備考
SX01	S-6	瓦他	石組み井戸
SX02	S-3		アマカワ遺構か?
SK03	S-6		遺構ではない?
SK04	S-6	磁器、陶器	
SX05	S-2,3,4	陶磁器,土製品多数	
SD06	S-5		SX01に伴う掘り込みか?
SK07	S-3	陶磁器,土製品多数	
P08	S-2	小土器片	
P09	S-2		底石あり
P10	S-2		底石あり
SX11	S-1		石列
SK12	S-2	小土器片,小礫	下面検出
SK13	S-2	小土器片,小礫	下面検出
SD14	H-1	陶磁器	土管
SK15	H-1		赤褐色粘質土で周囲を囲う
SK16	H-1	陶磁器,鉄滓	木片出土
SK17	H-1	陶磁器,瓦	
SX18	H-2	ガラス片	石列
SK19	H-1	曲げ物片	下面検出
SK20	S-2	針金他	版築状

Tab. 4 遺構一覧表

Tab. 5 題物測定(1)

Tab. 6 題物配累 (2)

Tab. 7 遊物觀察表 (3)

Tab. 8 造物觀察表(4)

編目	地名	層位・構造	地層 (cm)										地層	特徴	地質・古生物			
			a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k					
Fg-27-210	S-1	木戸4	斜丸Ⅲ	14.6	16.3			(6.1)	2.0	0.6	2.1	1.6	1.4	1.2	1.3	1.4	1.6	砂質含泥 含膏均合
Fg-27-211	H-1	黒崎河原下	2-4層	8.0	6.0	12	3.7	0.5	2.0	1.9	1.2	1.4	1.5	1.2	1.5	1.6	砂質含泥 含膏均合	
Fg-27-212	S-3	S-07	3-5層	17.0	16.0	1.5	(2.5)	2.5	2.1	0.7	(1.4)	1.4	1.4	1.6	1.2	1.5	砂質含泥 含膏均合	
Fg-27-214	S-1	3-5層	6	(1.6)	(9.1)			(2.4)	2.0	0.7	(0.0)	1.6	1.3	1.5	1.2	1.6	(1.0)	-
Fg-27-215	S-1	6	(1.6)	(5.0)	(6.1)			(14.1)	0.8	1.6	(0.5)	1.4	1.3	(1.5)				-
Fg-27-216	S-6	S-01堤防	6	(6.1)	(3.7)			(14.7)	0.7	1.6	1.9	1.4						砂質含泥 含膏均合
Fg-27-218	S-1	サブトナ層	6	14.4	9.8	5.9	1.2	(12.6)	0.5									砂質含泥 含膏均合
Fg-27-219	S-4	3-4層	6	13.0	9.9	5.0	1.6	(8.1)	2.2	0.6								砂質含泥 含膏均合
Fg-27-220	S-6	S-01堤防	6	(1.7)	9.1	4.5	1.3	(2.1)	2.1	0.7								砂質含泥 含膏均合
Fg-27-221	H-2	SK18	6	14.1	16.3	5.0	1.7	2.7	0.5									-
Fg-27-222	S-6	S-01堤防内	6	14.4	9.5	5.0	1.4	6.2	2.1	0.5								砂質含泥 含膏均合
Fg-27-223	S-1	2-4層	6	10.0	7.3	3.7	0.9	(5.3)	1.8	0.6								-
Fg-27-224	H-1	SK-20	6	13.0	8.8	4.2	1.5	7.2	2.2	0.8	2.1							-
Fg-27-225	H-1	SK-17	6	14.0	9.3	5.0	1.5	(3.7)	2.5	1.0								砂質含泥 含膏均合
Fg-27-226	H-1	SK-17	6	14.4	9.6	6.2	1.0	(12.6)	1.9	0.5	2.0							-
Fg-27-227	H-1	SK-17	6	14.2	9.6	6.2	1.0	(12.6)	1.9	0.5	2.0							砂質含泥 含膏均合
Fg-27-228	H-2	SK-17+No.3	6	7.0	9.9	4.4	1.5	3.0	2.2	1.1								砂質含泥 含膏均合
Fg-27-229	H-1	樹枝	6	15.0	9.7	5.2	1.6	(6.6)	2.5	0.9								砂質含泥 含膏均合
Fg-27-230	H-1	SK-17	6	13.4	7.9	3.7	1.3	(16.8)	2.3	0.7	1.8							砂質含泥 含膏均合
Fg-27-231	S-2	表土	6	15.1	10.9	7.3	1.6	(5.4)	2.3	0.8								砂質含泥 含膏均合
Fg-27-232	H-1	SK-17	6	14.3	10.3	7.0	1.2	(2.0)	2.2	0.8								砂質含泥 含膏均合
Fg-27-233	S-6	S-01堤防内	6	13.3	6.2	4.3	1.3	(4.2)	2.1	0.6								砂質含泥 含膏均合
Fg-27-234	H-1	SK-17	6	14.0	8.0	4.0	1.3	(6.6)	2.1	0.6								砂質含泥 含膏均合
Fg-27-235	S-5	黒崎河原下	6	(14.7)	(13.5)	3.5	2.1	(3.3)	2.0	0.3	1.7							砂質含泥 含膏均合
Fg-27-236	S-6	SK-1	6	(15.0)	(10.5)	4.2	2.6	(11.4)	1.65	0.4	1.7							砂質含泥 含膏均合
Fg-27-237	S-4	No.3	6	24.5	16.2	4.2	2.6	(6.3)	1.7	0.4	2.0							砂質含泥 含膏均合
Fg-27-238	S-3	表土	6	18.0	19.5	4.5	2.7	3.8	1.8	0.4	2.0							砂質含泥 含膏均合
Fg-27-239	S-4	3-4層	6	(12.5)	(6.5)	4.0	2.2	(8.7)	1.5	0.7	(1.4)							砂質含泥 含膏均合
Fg-27-240	H-1	SK-17	6	25.2	14.3	4.5	2.7	13.6	1.7	0.4	1.8							砂質含泥 含膏均合
Fg-27-241	H-1	6	19.5	(10.0)	4.2	2.7	(10.7)	1.5	0.7	1.8							砂質含泥 含膏均合	
Fg-27-242	H-1	6	(12.0)	(12.0)	3.6	2.2	7.7	1.6	0.25	(1.6)							砂質含泥 含膏均合	
Fg-27-243	S-6	S-01堤防3-4層	6	(18.0)	(14.2)	4.2	2.4	(3.1)	1.8	0.45	1.8							砂質含泥 含膏均合
Fg-27-244	S-1	6	(12.4)	(9.5)	3.9	2.3	2.4	(6.5)	1.5	0.4	1.9							砂質含泥 含膏均合
Fg-27-245	H-1	3-5層	6	(11.0)	(11.0)	4.4	2.4	5.1	1.5	0.6	1.9							砂質含泥 含膏均合
Fg-27-246	H-1	2-4層	6	(9.5)	4.1	2.6	(11.6)	2.3	0.5	1.8								砂質含泥 含膏均合
Fg-27-247	H-1	6	24.5	(17.0)	4.2	2.7	(10.7)	1.5	0.7	1.8								砂質含泥 含膏均合

Tab.9 複物塊岩表長(5)

第V章 まとめ

第1節 遺構について

今回の調査では2層段階の造成が大きく、それ以前の時期の遺構は大きく破壊を受けていたため、確認できた遺構数は少ない。

S-3で見つかったSX02はアマカワ遺構に類似した遺構で、その構造から水回り関係の遺構である。底面付近だけの残存であったため、上部構造がどのようなものか知ることはできない。遺構は2層上層に造られていることから、唐津公会堂に伴う遺構と考えられる。

S-6で見つかった石組み井戸SX01は、掘方の埋土から3層段階に造られたと考えたが、1層除去後見つかったため、2層段階でも露出していた可能性が高い。またSK04は、底部が打ち欠かされた土瓶に磁器小皿が蓋として載せられており、土瓶の注口を東南東に向けて正位置に据えられていた。これらのことからSK04を胎衣埋納遺構と考えた。胎衣埋納遺構については、方位を順に従って決められることがあるらしく、東南東は辰の方角で旧暦の三月である。埋納時期を示す可能性がある。この他、S-1からほぼ完形の土瓶（Fig.59-56）や土瓶の蓋（Fig.60-61）が出土している。関連する遺構があった可能性もあるが、少なくとも土瓶の完形品がS区西側にまとまる傾向は指摘できる。

T-4で見つかった建物基礎は庁舎棟の前身建物に用いられていたものである。国土地理院の閲覧サービスで昭和22年の航空写真を確認すると、低層の建物が確認できる。昭和38（1963）年に建てられた総合庁舎の以前は、大正2（1913）年に建てられた唐津公会堂（東松浦郡議事堂）が、用途を変えながら所在していたと考えられている。公会堂については、設計図を確認することができなかったが、木造建物であり、今回見つかった基礎は公会堂の基礎としては大きすぎるようと思える。そのためT-4の建物基礎がどの建物に伴うものか、結論付けることはできなかった。

第2節 遺物について

今回出土した陶磁器は定量的な分析は行っておらず、時期別の検討も行えないが、城下町域の調査に比して、陶器の割合が高いように思えた。黄白色の胎土に透明釉をかける京焼風の焼き物の出土数が多くなったことは特徴の一つである。その中で茶器の可能性がある碗が見つかったことは大きい。また大皿の出土数が多かったことも特徴の一つといえよう。

焼塙壺は唐津城本丸・二の丸・三の丸で出土しているが、今回の調査は、今までの調査の中で最も多くの焼塙壺が出土した。今回は小川望氏の分類に沿って記述した（小川、2008）。「泉州麻生」の刻印は他の遺跡でも多く見つかっているが、今回「難波淨因」「大上々」の刻印が見つかった。特に「大上々」の刻印は発見例が非常に少なく（小川、2008）全国で数例の確認例があるだけという。

チャート製の火打石（Fig.72-200）は、藤木氏のご教授により徳島県大田井産の火打石であることが判明した。藤木氏の研究（藤木、2013）によると、大田井産火打石は近世後半には広く西日本一帯に流通した広域流通品である。これまで唐津市内では火打石の出土例は報告されておらず、この他どのような石材の火打石が使われていたのかまだ分かっていない。今後は、調査で見つかる硬質石材の剥片について注視する必要がある。

瓦では軒丸瓦の瓦当面が「丸に三つ引両」の家紋瓦（Fig.73-210～216）が見つかっている。今回の調査地に屋敷を構えた武家の家紋を調査することはできなかったが、唐津藩に関する武家では、寺澤氏

に仕えた有力武家の原田氏の家紋が、「丸に三つ引両」であることは知ることができた（風雲戦国史ホームページ参照）。原田氏の屋敷地の場所は分かっておらず、寺澤氏時代の最終段階では、当地が片岡氏の屋敷地であったことが知られている。そのため、原田氏と「丸に三つ引両」の家紋瓦を結びつけることは控えなければならないが、その関係を今後とも注視すべきであろう。

出土遺物からみた調査成果は、今回の調査地が上級武家の屋敷地であることと整合的である、といえよう。

第3節 丁銀について

(1) 調査の経緯について (Fig.77~81)

当初丁銀については知識が全くなかったため、確認が遅くなった。また極印が判別できない状態であったことから、長崎県埋蔵文化財センターの多大なご協力により、透過X線写真撮影・蛍光X線分析・クリーニング作業を行うことができた。透過X線写真撮影は厚みがあるためX線が通過しなかったが、極印の形状及び場所を確認することができた。蛍光X線分析では銅と銀の合金であることが分かった。クリーニング作業を行った結果、若干削りすぎたが、大黒像・常是・寶を肉眼で確認することができるようになった。鉱物の比率について調べるために、別に簡易計測計にて測定を行った。丁銀表面の4回の計測の平均は、銀が7割、銅が3割弱であった。その結果、慶長丁銀・元禄丁銀・正徳享保丁銀（以下、正徳丁銀）の3種に絞り込むことができた。

その後、錢貨研究の第一人者である永井久美男氏にお願いし、当遺跡出土品を実見していただき、採拓もしていただいた。また黒川古文化研究所所蔵資料の見学についてもご尽力していただき、今回資料として掲載することができた。黒川古文化研究所と永井氏のご協力により、丁銀についての重要な所見を得ることができた。

(2) 丁銀の識別について (Fig.82、83)

出土した丁銀（以下、本丁銀）は、極印の種類から慶長丁銀（以後初期慶長銀を除く）と正徳丁銀に絞られる。本丁銀は、遺存状態が良くないため、極印の識別が難しい。永井氏によりまとめられた（永井、1998）慶長丁銀と正徳丁銀を識別する特徴は、

慶長丁銀

- ①字体が細い。
- ②是の8画目と9画目の始点の位置が非常に近いことで、9画目が立ち気味になる。
- ③大黒像の2個の俵は左側が短く、右側が長い。
- ④極印は左右に3～5面打たれるものが多く、左右の極印数が異なるものもある。
- ⑤長期間作り続けられているため、バリエーションが多い。

正徳丁銀

- ⑥形態がほぼ一定で、小振りなものが多い。（130g前後）
- ⑦極印が浅い。
- ⑧字体が太くて大きく、縦長。
- ⑨大黒像が正面を向く。
- ⑩是の9画目の始点が8画目の中ほどにあることで、9画目が寝る。
- ⑪極印は左右に各3面打ち、4面打ちがある。

黒川古文化研究所で実見した丁銀資料以外にも、不十分ながら資料の収集を行った。そこで気づいた

**慶長丁銀
左3面右4面打ち**



**正徳享保丁銀
左右3面打ち**



Fig.82 慶長丁銀と正徳享保丁銀の識別点

左3面右4面打ち



Fig.83 唐津城跡出土丁銀の特徴

その他の識別点としては、

- ⑫正徳丁銀は竈の19画目の始点が貝の中ほどに位置するもの、18画目と19画目の角度が45度よりも大きいものがほとんどを占める。
- ⑬正徳丁銀は竈の20画目が太くて長い。
- ⑭慶長丁銀は竈の19画目の始点が貝の右端に位置し、18画目と19画目の角度が45度よりも小さいものがほとんどを占める。
- ⑮確認できる資料が少ないため確証がもてないが、大黒像の袋に数条の縦筋が入るものは慶長丁銀に限られる。

本丁銀は遺存状態が良くないが、特徴として、

- ・極印は左が3面、右が4面打たれる
- ・書体が細い
- ・是の8画目と9画目の始点の位置が近く、9画目が立ち気味
- ・大黒像の俵の大きさが左右であまり変わらない（1～2mm）
- ・竈の19画目の始点が貝の右端に位置し、18画目と19画目の角度が45度よりも小さい
- ・竈の20画目は短い
- ・大黒像の袋に数条の縦筋が入る

以上が挙げられる。上記からみると、本丁銀の特徴は大黒像の俵の大きさを除き、慶長丁銀にあてはまる。しかし、分類上の大きな基準となる大黒像について不明な点が多く、俵の長さがあまり変わらない点は大きい。今回収集した資料でも、慶長丁銀で本資料ほど左右の俵の長さが近いものはなかった。そのため、今回の報告では慎重を期し、慶長丁銀と正徳丁銀か断定することは避け、今後の課題としたい。

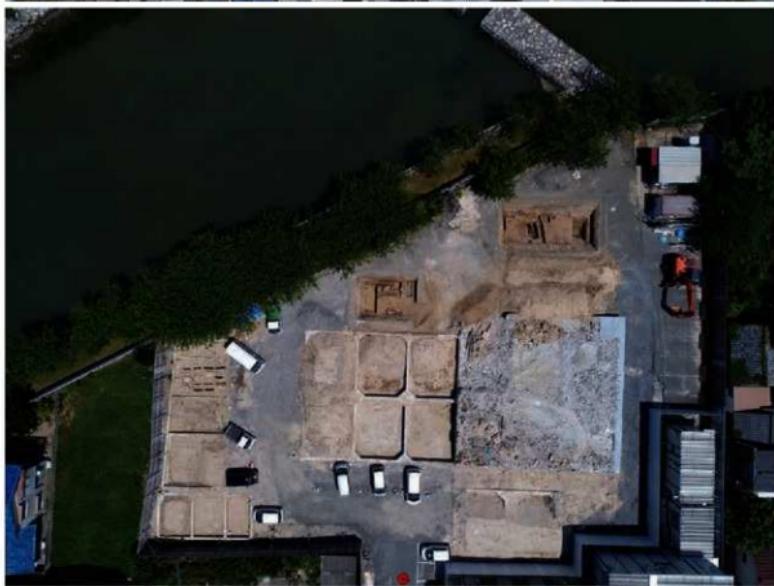
今回丁銀資料を初めて扱ったが、永井氏の検討以外に学術的な研究がなく、また資料化された丁銀が少ないため、実物の確認ができなかったことは非常に大きな問題であった。発掘調査で見つかることが極めて限られるためであろうが、資料化を進めることは丁銀研究の今後の大きな課題である。

最後になりましたが、調査にご協力いただいた唐津保健福祉事務所の皆様、調査及び整理作業に従事していただいた発掘作業員並びに整理員の皆様に御礼申し上げます。

今回の報告は報告者の力量不足で不十分なものになってしまいましたが、九州陶磁文化館、黒川古文化研究所、長崎県埋蔵文化財センター、片多雅樹氏、寺井誠氏、徳永貞紹氏、永井久美男氏、藤木聰氏の多大なご協力がなければ、さらに不十分な報告となっていました。特に片多氏と永井氏には本当にお世話になりました。記して感謝申し上げます。また参考文献はほとんど掲載できなかった。ご寛恕願いたい。



- ① 唐津城と松浦川以東の風景
- ② 調査区全景（調査前、東から）



① 調査区全景（調査前、真上から）

② 調査区全景（調査中、真上から）



① H-1 全景（真上から）

② H-2 全景（真上から）



- ① 挖削作業状況①
- ③ 挖削作業状況②
- ⑤ SX01 側壁石材②
- ⑦ 埋戻し作業状況

- ② ドローン写真撮影状況
- ④ SX01 側壁石材①
- ⑥ 重機作業状況
- ⑧ 調査区埋戻し終了状況



- [1] S-1 上面遺構検出状況（南から）
- [3] SX11 全景（西から）
- [5] S-1 北壁土層（南から）
- [7] S-1 中央ベルト土層（北から）

- [2] SX11 遺物出土状況（南から）
- [4] SX11 北側石列
- [6] S-1 東壁土層（西から）
- [8] S-1 中央ベルト土層（拡大、北から）



- [1] S-2 上面遺構検出状況（南から）
- [3] P09 検出状況（北から）
- [5] P10 底石検出状況（東から）
- [7] S-2 北壁土層（南から）

- [2] S-2 上面トレンチ掘削状況（南から）
- [4] P09,P10 底石検出状況（南から）
- [6] P09 底石検出状況（北から）
- [8] S-2 西壁土層（東から）



① S-2 東壁土層（西から）

③ S-2 中央ベルト土層（拡大、西から）

⑤ S-2 下面遺構検出状況（南から）

⑦ S-2 下面遺構完掘状況②(拡大、南から)

② S-2 東壁土層（拡大、西から）

④ S-2 中央ベルト、東壁土層（西から）

⑥ S-2 下面遺構完掘状況①(南から)

⑧ SK13 土層（西から）



- ① S-3 上面遺構検出状況（北から）
- ③ SX02 検出状況②（北から）
- ⑤ S-3 上面遺構完掘状況（南から）
- ⑦ S-3 下層遺構検出状況②（拡大、南から）

- ② SX02 検出状況①（東から）
- ④ SK07 遺物出土状況（東から）
- ⑥ S-3 下層遺構検出状況①（南から）
- ⑧ S-3 調査区水没（南から）



- [1] S-3 下層完掘状況（南から）
- [3] S-4 上面遺構検出状況②(拡大、北から)
- [5] SX05 挖削状況①(東から)
- [7] S-4 上面遺構完掘状況（東から）

- [2] S-4 上面遺構検出状況①(東から)
- [4] S-4 上面遺構掘削状況（南から）
- [6] SX05 挖削状況②(北から)
- [8] S-4 調査区水没（東から）



- [1] S-4 下層完掘状況（東から）
- [3] SD06 土層（西から）
- [5] S-5 北壁土層②(拡大、南から)
- [7] S-6 上面遺構検出状況（東から）

- [2] S-5 上面遺構検出状況（西から）
- [4] S-5 北壁土層①(南から)
- [6] S-5 下層完掘状況（東から）
- [8] SK04 遺物出土状況（東から）



① SX01 挖削状況①(上から)

③ SX01 挖方土層(東から)

⑤ SX01 北壁土層(南から)

② SX01 挖削状況②(東から)

④ SX01 石積内面①(南から)

⑥ SX01 石積内面②(北から)

⑦ SX01 石積外観(南から)



- [1] SX01 解体調査①(西から)
- [3] SX01 解体調査③(西から)
- [5] S-6 西壁土層（東から）
- [7] T-1 堀削状況（北から）

- [2] SX01 解体調査②(南から)
- [4] SX01 解体調査④(北から)
- [6] S-6 南壁土層（北から）
- [8] T-2 遺物出土状況①(南から)



- ① T-2 遺物出土状況②(拡大、南から)
- ③ T-3 上層完掘状況（東から）
- ⑤ T-4 上層検出状況①(北から)
- ⑦ T-4 下層完掘状況（北から）

- ② T-2 下層完掘状況（南から）
- ④ T-3 下層完掘状況（東から）
- ⑥ T-4 上層検出状況②(拡大、南から)
- ⑧ T-5 上層完掘状況（東から）



- [1] T-5 下層完掘状況（東から）
- [3] T-6 下層完掘状況（東から）
- [5] T-7 下層完掘状況（西から）
- [7] H-1 上面遺構掘削状況（西から）

- [2] T-6 上層完掘状況（東から）
- [4] T-7 上層完掘状況（西から）
- [6] H-1 上面遺構検出状況（南から）
- [8] SK17 遺物出土状況（南から）



- [1] H-1 下面遺構検出状況（西から）
- [3] SK19 土層（西から）
- [5] H-2 上面遺構検出状況①(北から)
- [7] H-2 上面遺構完掘状況（北から）

- [2] H-1 下面遺構完掘状況（西から）
- [4] SK19 追加調査（西から）
- [6] H-2 上面遺構検出状況②(北から)
- [8] H-2 下層完掘状況（南から）



① 遺物 (2 ~ 10)

③ 遺物 (77,78,96,97,100,101,111,129)

② 遺物 (20 ~ 23,25,26,29,30)

④ 遺物 (210 ~ 216)



- [1] 遺物 (34 ~ 36)
- [3] 遺物 (55)
- [5] 遺物 (57)
- [7] 遺物 (79)

- [2] 遺物 (50)
- [4] 遺物 (56)
- [6] 遺物 (68)
- [8] 遺物 (95)



- [1] 遺物 (1,11,14,15,18,19)
[4] 遺物 (42 ~ 45)
[7] 遺物 (60 ~ 65)

- [2] 遺物 (12,13,16,17,27,28,32,33)
[5] 遺物 (46 ~ 49)
[8] 遺物 (69 ~ 71)

- [3] 遺物 (37,40)
[6] 遺物 (58,59,66,67,73)
[9] 遺物 (74)



① 遺物 (75,76,78)

④ 遺物 (182,188,189)

⑦ 遺物 (192)

② 遺物 (98,104,105,113,114)

⑤ 遺物 (183 ~ 185)

⑧ 遺物 (247)

③ 遺物 (179 ~ 181)

⑥ 遺物 (186,187,190,191)



[1] 遺物 (131～144)

[2] 遺物 (146)

[3] 遺物 (147)

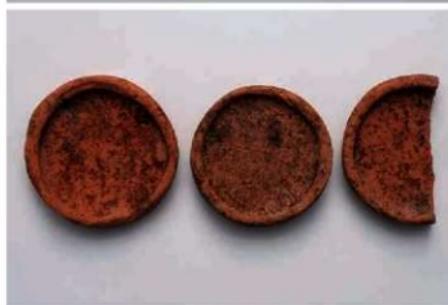
[4] 遺物 (150)



- [1] 遗物 (151)
[4] 遗物 (154)
[7] 遗物 (158)

- [2] 遗物 (152)
[5] 遗物 (156)
[8] 遗物 (159)

- [3] 遗物 (153)
[6] 遗物 (157)



- [1] 遺物 (145,148,149,155)
[3] 遺物 (160 ~ 162 裏)
[5] 遺物 (165 ~ 167 裏)
[7] 遺物 (168 ~ 170 裏)

- [2] 遺物 (160 ~ 162 表)
[4] 遺物 (165 ~ 167 表)
[6] 遺物 (168 ~ 170 表)
[8] 遺物 (171 ~ 173 表)



- [1] 遺物 (171 ~ 173 裏)
- [3] 遺物 (163,164 裏)
- [5] 遺物 (175)
- [7] 遺物 (177)

- [2] 遺物 (163,164 表)
- [4] 遺物 (174)
- [6] 遺物 (176)



① 遺物 (207 ~ 209)

③ 遺物 (195 ~ 199, 201)

⑤ 遺物 (200 裏)

⑦ 遺物 (193)

② 遺物 (203 ~ 206)

④ 遺物 (200 表)

⑥ 遺物 (178)

⑧ 遺物 (225)



- [1] 遺物 (210)
- [3] 遺物 (212 ~ 214)
- [5] 遺物 (220)
- [7] 遺物 (193)

- [2] 遺物 (211,215,216)
- [4] 遺物 (217,218)
- [6] 遺物 (219,221,222)
- [8] 遺物 (225)



- [1] 遗物 (226,228,229)
- [3] 遗物 (231,232)
- [5] 遺物 (200)
- [7] 遺物 (193)

- [2] 遗物 (227,230)
- [4] 遗物 (233,234)
- [6] 遺物 (178)
- [8] 遺物 (194)

報告書抄録

ふりがな	からつじょうあと (10)							
書名	唐津城跡 (10)							
副書名	唐津保健福祉事務所建替えに伴う発掘調査							
巻次	第181集							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	築城 昇平、美浦 雄二							
編集機関	唐津市教育委員会							
所在地	佐賀県唐津市南城内1番1号 大手口センタービル6階							
発行年月日	平成31年3月29日							
ふりがな 所蔵遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
市町村	遺跡番号							
からつじょうあと 唐津城跡	さがけん 佐賀県 からつし 唐津市 だいめいこうじ 大名小路	412023	0724	33° 27' 05.67172	129° 58' 22.99910	※ 契約期間 20170106 ～ 20170731	800m ²	唐津保健 福祉事務 所の建替 え
所蔵遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
唐津城跡	城館跡	近世 ～ 近代		井戸 小穴 土坑 包含層	土師器 陶器 磁器 瓦 金属製品 錢貨等			遺構の中心 は近代であり、 近世の遺構は かく乱のため 遺存状態は悪 かったが、近 代の造成土中 から多くの遺 物が出土した。



唐津市文化財調査報告書 第181集
唐津城跡(10)
平成31年3月28日印刷
平成31年3月29日発行
編集・発行者 唐津市教育委員会
唐津市南城内1-1
印刷所 呼川プリント
〒847-0853 唐津市江川町702
☎(0955)72-6023